

# 裁判所構成法講義目錄

緒論

第一章 裁判所及ヒ檢事局

第一節

第二節

第三節

第四節

第五節

第六節

第七節

第八節

第九節

第十節

第十一節

第十二節

第十三節

第十四節

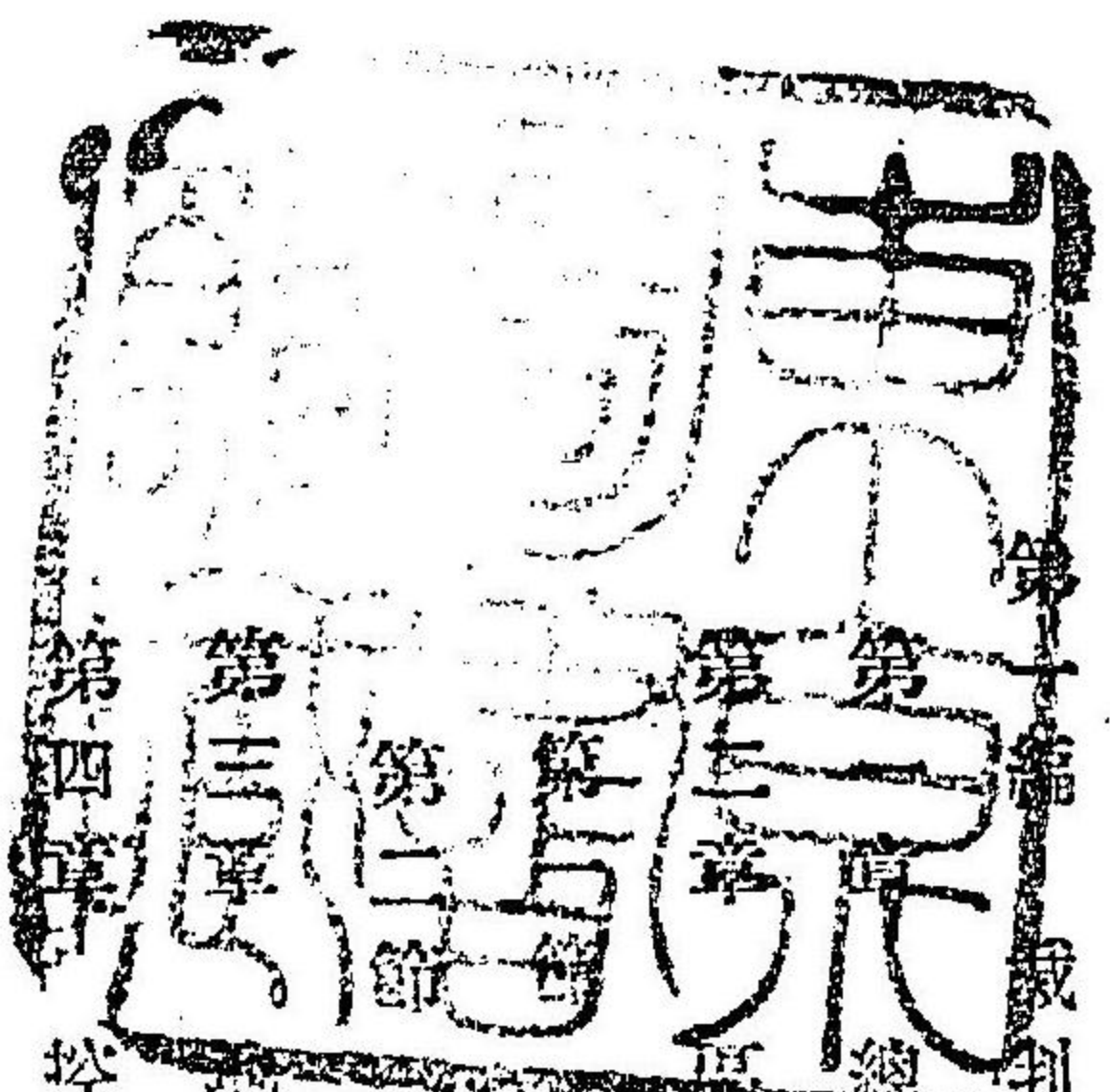
第十五節

第十六節

第十七節

目錄

一



四十四

四十五

六十五

六十六

六十七

八十四

八十九

九十八

百九

百十九

百十八

二

第三章 檢事……………百二十六

第四章 書記……………百三十二

第五章 執達吏……………百三十六

第六章 廷丁……………百五十六

第三編 司法事務ノ取扱……………百五十七

第一章 開廷……………百五十八

第二章 裁判所ノ用語……………百六十五

第三章 裁判所ノ評議及言渡……………百六十九

第四章 裁判所及檢事局ノ事務章程……………百八十

第五章 司法年度及休暇……………百八十二

第六章 法律上ノ共助……………百八十八

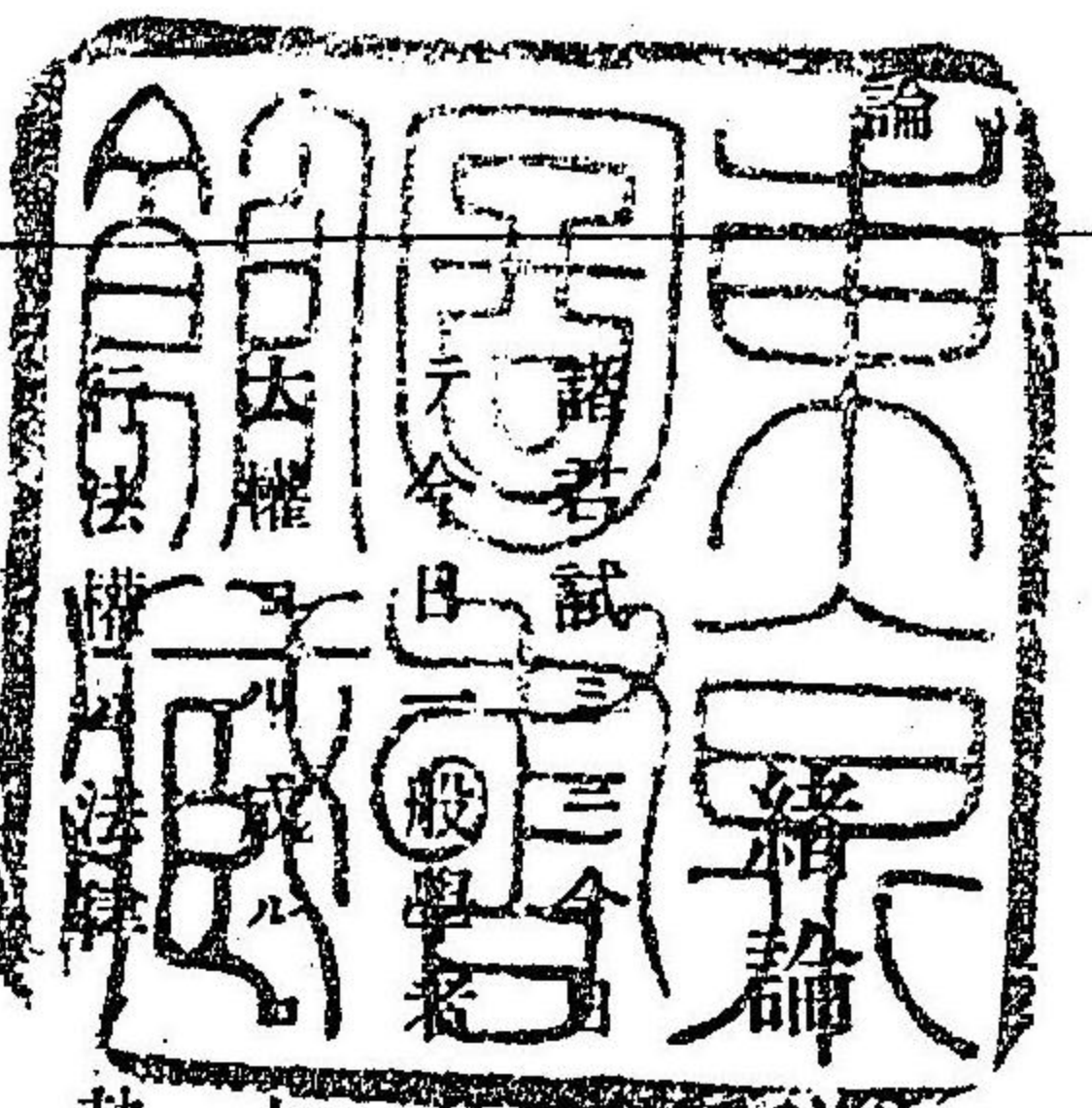
第四編 司法行政ノ職務及監督權……………百九十

裁判所構成法講義目錄 終

裁判所構成法講義

本校 講師 士 兩角彦六先生 口述

本校 校友 筆記



緒論

諸君試三今日  
 明國ト稱セラル、モノニ就テ其國政權ノ分合組織ヲ見併セ  
 唱道スル所ヲ参照セハ凡ソ一國ノ政權ハ正ニ立法行法ノ二  
 トヲ知ラン所謂立法權ナルモノハ法律ノ制定ヲ以テ其職トシ  
 執行ヲ以テ其任トシ而シテ行法權ハ之ヲ分テ行政權及司法  
 權ノ二種トス行政權ハ平時ニ於テ法律ノ執行ヲ掌リ司法權ハ訴訟ニ際シテ法  
 律ヲ執行ス即チ訴訟事件ニ關シテ權利義務ノ所在ヲ明ニシ之ニ適用スヘキ法  
 律ノ範圍及ヒ效果ヲ定ムルモノタリ而シテ此司法權ヲ運用スルノ機關ハ取リ  
 モ直サス裁判所ナリトス然ラハ則チ裁判所構成法ノ何タルコトハ又別ニ定解

裁判所構成法

ヲ下スマテモナク即チ法律ノ遵奉ヲ確保シ各人ヲシテ其分ヲ得セシムルノ目的ニ成リタル官權ノ組織構成ニ關スル法律ノ一体ナリトス

モンテスキューー氏曰ク一國ノ政權ハ立法行政司法ノ三ヨリ成ル而シテ若シ立法權ニシテ行政權司法權ト共ニ一人若クハ一集合体ノ掌裡ニ併合セラレン乎人民ノ自由ハ得テ望ムヘカラス自ラ之ヲ制シ自ラ之ヲ行フ專横至ラサルナケレハナリ若シ又司法權ニシテ立法權若クハ行政權ト分離セサランカ同レク人民ハ其自由ヲ失フヘシ立法權ト併合センカ裁判官ハ正ニ立法者トナルヘク生殺與奪又意ノ如クナラサルモノナシ行政權ト併合センカ裁判官ハ正ニ壓制官吏トナリ終ランハミト三權分立說ハ今日ニ容レサル所ナリト雖モ而モモンテスキューーノ數言能ク政權ノ分立セサルヘカラサルコト司法權ノ獨立セサルヘカラサルコトヲ說テ餘蘊ナシ蓋シ吾人カ生命ヲ安全ニ財產ヲ鞏固ニ平然其生ヲ過スコトヲ得ルハ法律ノ之ヲ確認スルニ職由ス可シト雖モ裁判所ノ之ヲ保護スルナカリセハ果シテ如何其法律ハ如何ニ完備シ如何ニ善良ナリトスルモ所謂徒法死律ノミ一片ノ空文何ノ用ヲモ爲ササルヘシ

更ニ一步ヲ進メテ裁判所ノ以テ法律適用ノ任ニ當ルアリトスルモ其組織完ヲ得ス或ハ行政權ニ侵害セラレテ常ニ政府ノ之ニ干渉シ或ハ裁判官ノ懲戒其途ヲ得スシテ賄賂請托行ハレ其位地鞏固ナラスシテ容易ニ良心ヲ曲奪セラルコトアリトセンカ吾人カ權利ノ保護者タル實果シテ何クニ在ル寧ロ裁判所ナキト何ヲ擇ハン否更ニ甚シキモノアリ古來ノ傳稱ニ良法アラントヨリハ寧ロ惡裁判官アラシムル勿レトハ實ニ之ヲ言ヘルモノニシテ裁判所ノ組織如何ハ最も直接ニ吾人ノ休戚ニ關スルモノタリ人或ハ言ハン吾人ハ平日ニ於テ裁判所ニ用ナシ僅ニ權利ノ侵害義務ノ不履行ニ遇フテ始メテ之ヲ煩ハスノミト實ニ然リ然レトモ之ヲ以テ裁判所ノ有無若クハ其組織ノ如何ハ直接ニ吾人ニ利害ノ關係ナシトハ三尺ノ童子モ尙且斷定シ去ルコトヲ肯セサルヘシ假リニ裁判所ナシトセンカ吾人ハ鬪爭掠奪ノ古代ニ復歸セサルヲ得ス裁判所アルモ其組織ノ不完全ニシテ法律ノ適用ヲ全フスル能ハストセンカ姦惡不良ノ徒ハ乘シテ以テ私利ヲ博シ世ハ當ニ健訟亂訴ノ中ニ埋没セラルヘク社會ノ安寧ハ得テ期スヘカラス夫レ聽訟吾猶人也使無訟乎裁判所構成法ノ目的ハ實ニ訟ナカラ

シムルニアリ是レ猶平日ニ武備ヲ怠ラサルハ異日ニ爭亂ナカラシムル所以ト  
 毫モ異ナルコトナシ而シテ裁判所ノ組織完全ニシテ始メテ此目的ヲ達スルコ  
 トヲ得ヘク其組織ヲ完全ナラシメンニハ先以テ司法權ヲ獨立ノモノトシ裁判  
 官ヲシテ不偏不黨ノ地位ニ立タシメサルヘカラス是レ憲法ノ臣民ノ權利ヲ保  
 証スルト同時ニ裁判官ノ地位ヲモ鞏固安全ナラシムル所以ナリ(憲法第五十七  
 條第五十八條)

司法權ノ獨立セサルヘカラサルヤ斯ノ如シ然レトモ之ヲ實際ニ見ルハ實ニ近  
 世ニ始マル

遠ク古代ニ遡リテ考フルニ裁判所ノ起源ハ如何ト云フニ全ク人民ノ私闘ニ代  
 ツテ起リタルコトハ爭フ可カラス私怨復讐ヲ防キ社會ノ秩序ヲ維持スルノ必  
 要ヨリ來レルモノナリ西曆紀元六百四十六年ロンバレド王「ロタリ」ノ勅令ニ  
 曰ク朕ハ法令ヲ以テ自闘復讐ヲ廢セントスルモ人民慣習ノ久シキヲ今卒カニ  
 之ヲ全廢スルヲ得ス故ニ不得止被害者ニ私闘復讐スルノ權利ヲ許シ又償金ヲ  
 擇フヲ得セシムト雖モ然レトモ朕ノ意ハ人民ヲシテ復讐ヲ捨テ償金ノ法ニ依

ラシメントスルニアルカ故ニ極メテ償金ノ額ヲ大ニシテ人民ヲ法廷ニ誘導ス  
 ル所以ナリト又羅馬ノ十二銅標ヲ見ルモ我國ノ大寶令ヲ見ルモ(現行刑法ニモ  
 誣告罪)反坐法ノ制アリ反坐法トハ例ヘハ他人ノ身体ノ一部ヲ毀損セル時ハ其  
 加害者ノ身体ノ同一部分ニ同一種類ノ苦痛ヲ加フルニアリ手ヲ切ルトキハ手  
 ヲ切り足ヲ傷ケタル時ハ足ヲ傷ルト云フ如シコレ何ニ依リテ然ルカ他ナシ未  
 開ノ民ノ復讐スルヤ受ケタル害ヲ以テ加害者ニ被ラシムルハ普通一般ノ事ニ  
 シテ即チ全ク未開人民ノ復讐ノ念ヲ満足センカタメニ外ナラス此等ノ例証ニ  
 徴スルモ古代ノ法律ハ被害者カ復讐スルト同一ノ方法ヲ採用シテ人民ヲシテ  
 私闘ヲ含テ、法律ノ裁判ニ訴ヘシメ人民自身司法權ヲ私スルヲ妨クルノ目的  
 ニ出テタルモノニシテ從テ裁判所ハ人民ノ私闘ニ代ツテ起リタルコトヲ証ス  
 ルニ足ルヘシ

私闘ニ代ツテ裁判所ハ起リタリト雖モ是レ唯公力ヲ以テ私力ニ代ハタルニ過  
 キス行政モ司法モ混同シテ有力者一人ノ手裡ニ存シ生殺與奪擧テ會長若クハ  
 其屬僚ノ欲スル儘ナリシ殊ニ注意スヘキハ訴訟手續ノ如キモ別ニ一定ノ定規

ナク民事刑事ノ區別モ存セサリシ否之ヲ區別スルヲ知ラサリシナリ他人ノ物ヲ盜ムモ單ニ他人ヲ損害シタル所爲モ同一ノ方法手段ヲ用井テ加害者ヲ罰シ以テ原告被害者ノ怨ヲ解キ之ヲ満足セシムルヲ以テ救正ノ法ト爲セリ畢竟スルニ未開ノ民ハ被害者爲害者トノ直接ノ關係ヲ見ルヲ得ルモ其犯行カ社會若クハ國家ニ及ホスノ影響ハ之ヲ見ルコト能ハサリシカ故ニシテ例ハ本邦ノ古代ニ於テモ稜除ト贖罪ノミカ犯罪ヲ罰スル唯一手段ニシテ素箋雄尊カ其罪ヲ懺悔シテ板ヲ爲シタリトカ某采女カ破廉耻罪ヲ犯スニ依リテ其采邑ヲ返上シテ罪ヲ免セラレタリト云フカ如ク實ニ民事モ刑事モナク寧ロ悉ク民事ナリント云フモ不可ナルナシ

然ルニ社會カ漸ク進ミ殺人竊盜ノ如キ所爲ノ社會ニ及ス影響ヲ知り且ツ愛國ノ思想大ニ發達シ國家ノ秩序ヲ保ツノ必要ヲ感スルニ至リテハ一個人ノ利益ハ一國ノ利益ニ讓ラサルヘカラス公犯ハ私犯ヲ埋没スルト論スル程ニナリ其結果犯罪アルトキハ刑法ニ問フテ犯者ヲ罰スルモ被害者ニ對スル損害賠償ノ如キハ措テ問ハサル如キ有様トナリ裁判所ノ扱フ所ハ一ニ刑事ニ止マル如キ

觀ヲ爲セリ彼ノ大寶令ノ如キ或ハ五逆八罪トカ刑事ニ關シテ細密ノ規定ヲ見ルモ民事ニ關シテハ殆ント之ヲ知ルニ由ナシ近ク之ヲ徳川氏ノ時代ニ見ルモ亦大同小異ヲ出テス殊ニ法律ニ訴訟ニ專ラ秘密主義密行主義ヲ執レルカ故ニ法律ノ如何モ人民ハ之ヲ知ラス訴訟モ之ヲ密行シテ公開スルコトナク殊ニ刑事ニ付テハ彼ノ拷問ノ如キ慘酷ナル手續ヲ以テ唯一ノ糾明手段トナセリ其後民事刑事ノ別ヲ知り其制裁ニ手續ニ多少區別ヲ存スルニ至リテモ未タ裁判所ヲ獨立ノモノトシ司法權ヲ他ノ政權ヨリ分離セサルヘカラサルノ必要ハ之ヲ知ラサリシ泰西諸國ニテモ之ヲ知リタルハ實ニ近世ノ事ニ屬ス我國ニテモ實ニ神武開闢以來明治ノ初年迄行政モ司法モ悉ク一官權ノ下ニ混一シ來リタリ今古來ノ職制等ニ就テ極メテ簡單ニ之ヲ圖解スルニ略ホ左ノ如シ

○大寶令以前

天子親聽——國造——伴造

(大伴物部)

○大寶令以後

勅裁——太政官(左辨官)——刑部省(卿)少輔(大判事)

裁判所構成法

(京都) 左京職

(地方) 國司—郡司—鄉司—里長

○鎌倉制度

政所 執權三所ヲ轄ス

問注所 聽訟所

侍所 武事ニ關スル一切ノ件

以下大要同シ

○承久以後

、、、、 京都六波羅探題 京都以西ノ全權ヲ握ル

○足利氏ノ制

鎌倉管領

守護 地頭

京都管領

○徳川氏ノ制

勘定奉行 勘定吟味役

寺社奉行 吟味物調役

町奉行

將軍直裁—老中—三奉行

明治維新以降王政ノ興復ト共ニ百事更新ノ緒ニ就キタルモ司法ノ組織ニ至リテハ亦行政ト混同シテ行政官ハ同時ニ司法官タリシコト往時ニ異ナル所ヲ見ス彈正臺ト云ヒ聽訟課ト云ヒ寧ロ行政ノ一部ヲ成セルモノト見テ不可ナシ其今日ニ推移シ來リタル沿革變遷ハ茲ニ述ヘス司法省沿革誌時々ノ布告等ヲ參照アラントコトヲ望ム

之ヲ概スルニ政權分立ノ原則ト共ニ司法權ノ獨立ヲ認メタルハ全ク近世ニ始マル其初人民ノ私闘ニ代リテ起リタル裁判所ハ公力ヲ以テ私力ニ代リタルニ過キス行政司法ハ混一シテ其分科ヲ見サルモノ實ニ數千年ノ久シキニ達シ近世學理ノ進歩ト共ニ漸ク其分立ヲ政權配合ノ上ニ見ルニ至リタルモノニシテ我邦ノ如キモ亦彼ノ憲法ノ發布ト共ニ初メテ司法權ノ獨立ヲ保証スルコトヲ

裁判所構成法

得ルニ至レルモノナリ

謹テ帝國憲法ヲ按スルニ 天皇ハ國ノ元首ニシテ統治權ヲ總攬シ所謂國ノ主權者ニ在スカ故ニ立法行政ノ大權ハ舉テ 天皇ノ一身ニ存スルコト皇祖皇宗傳承シテ所謂日本ノ國體ヲ組成スル所ナリト雖モ敢テ自ラ擅ニシ給ヨリハス憲法ヲ以テ其遵由スル所ヲ示シ給ヘリ故ニ立法權ヲ行フニ當テハ必スヤ帝國議會ノ協賛ヲ要シ而シテ司法權ニ至テハ敢テ躬親カラ聞食サル、コトナク全ク之ヲ裁判所ニ委任シ賜ヘリ(憲法第五十七條)司法權ハ 天皇ノ名ニ於テ法律ニ依リ裁判所之ヲ行フ此故ニ 天皇ノ委任ヲ受ケタル裁判所カ法律ニ基キテ司法權ヲ行フヤ不羈獨立敢テ他ノ干涉ヲ受クルコトナシ議會モ之ヲ蹂躪スルコトヲ得ス總理大臣モ司法大臣モ之ニ干涉シ之ヲ妨害スルコトヲ許サス斯ノ如ク既ニ憲法ヲ以テ司法權ノ獨立ヲ保証スル以上ハ更ニ進ンテ之ヲ確保鞏固ナラシムルノ手段ヲ盡サ、ルヘカラス而シテ裁判官即チ司法權ヲ行フモノ、地位ヲ鞏固ナラシムルヲ以テ隨一ノ手段ナリトス若シ其ノ地位不安ナリトモシカ裁判官ハ其ノ地位ニ戀々スルヨリ容易スク行政權ノ頤使ニ甘從シテ其ノ

十

侵害ヲ受クヘク司法權ノ獨立モ有名無實ノ者タル可シ故ニ憲法第五十八條ハ曰ク裁判官ハ刑法ノ宣告又ハ懲戒ノ處分ニ由ルノ外其ノ職ヲ免セラル、コトナシ懲戒ノ處分ハ法律ヲ以テ之レヲ定ム(構成法第七十三條第七十四條第七十五條及第七十七條亦細則ヲ定ム)ト故ニ裁判官ハ他普通ノ行政官吏ト異ナリ長官ノ意思ヲ以テ容易ニ之ヲ左右シ之ヲ轉免セシムルコトヲ得ス必スヤ刑法ノ宣告ニ依ルカ否ラサレハ時ニ懲戒裁判ノ方法ヲ以テスルニアラサレハ其職ヲ奪フコトヲ得ス

其地位ヲ鞏固ニシ容易スク動カスコトヲ得サラシメ以テ終身官ト爲ルニ至リテハ其之ヲ任命スルニ當リテ最モ周到ナル注意ヲ加ヘサルヘカラス若シ夫レ庸愚ノ輩ヲ舉ケテ此安全ノ地位ヲ授ケ吾人ノ生命自由財產榮譽ヲ保護スルノ任ニ當ラシメンカ其危險實ニ云フヘカラス一タヒ任用セラレタルモノハ都テ其ノ地位ノ安全ナルニ安ンシ苟モ懲戒裁判ニ觸レサル以上ハ何ヲ爲シテモ視然願ミサルカ如キノ弊風ヲ來スニ至ルヘク懶惰ナルモノハ益々懶惰ニ流レテ進ンテ勉ムルコトヲ爲サス勤勉家モ之ト伍スルヲ見テ勉ムルモ益ナシトシ進

ンテ事ニ當ルコトヲ爲サス庸者其職ヲ失ハスシテ賢者ハ之ト伍スルヲ耻ルノ有様ニ陥リ結局裁判事務ノ滯滞不整頓ヲ來スハ數ノ免レサル所ニシテ即チ之ヲ終身官トスルハ人民ノ權利ヲ保護スルニアルニ却テ之ヲ妨害スルニ陥リ司法權ノ獨立ハ却テ言フヘカラサル禍害ヲ醸スノ一原因トナリ了ル可シ裁判官其人ヲ精撰スルノ必要實ニ大ナリトス(構成法第五十七條以下)然レトモ裁判官モ又行政官ト同シク文官ト稱スル總稱ノ下ニ包括セラル、モノニシテ政府ノ任命スル所ニ係リ從テ又國庫ヨリシテ其俸給ヲ受クルモノトス蓋シ司法權ハ行政權ノ一部ナルカ故ニ政府ノ之ヲ命スルハ固ヨリ其所ニシテ既ニ政府ノ之ヲ任命シ國家ノ事務ヲ分掌スル以上ハ國庫ヨリ俸給ヲ受クルコトモ又當然ノ事ナリトス

往時佛蘭西國一派ノ學說ニテハ裁判官ハ宜シク人民ニ於テ之ヲ選舉スヘシ政府ニ於テ之ヲ任命スルハ裁判官ノ獨立ニ嫌ナキ能ハスト論シタリ然レトモ之レ言フ可ク行フヘキノ論ニアラス若シ人民ヨリ選舉スルトセンカ裁判官ハ選舉人ノ歡心ヲ買ハンカタメニ却テ其良心ニ背キテ不公平ノ裁判ヲ爲シ政府ニ

屈從セサル代リニ其選舉者ニ曲從スルコトトナリ裁判官ノ獨立ハ得テ望ムヘカラス其弊勝テ言フ可カラサルモノアリ况ンヤ我邦ノ如ク文武官ノ任免ハ一ニ天皇ノ大權ニ屬スル國体ニ於テハ之ヲ言フモ之ヲ行フヘカラサルコト勿論ナリトス

又歐洲ノ中古時代ニ於テハ裁判官ノ俸給ノ如キモ之ヲ國庫ヨリ支給セシテ人民即チ訴訟人ヨリ一事件毎ニ謝金ヲ受ケタルコトアリシモ其弊ハ實ニ現然ニシテ報酬ノ多キモノニ私スルハ人情ノ免レサル所其弊百出實ニ云フヘカサルモノアリシ故ニ今日又此種ノ議論ヲ爲スモノアルヲ見ス裁判官ノ俸給ヲ定ムルモ亦 天皇ノ大權ニ屬ス(憲法第十條)俸給令ヲ以テ之ヲ定メタリ俸給令ニ付テモ議論ナキニアラス一般裁判官ノ俸給ヲハ低減シテ他ノ行政官吏トノ權衡ヲ失セル如キハ其甚シキモノタリ均シク陪席判事ニシテ俸給ニ甲乙ヲ付ケ或ハ三府五港ノ裁判長檢事長檢事正等ハ他ノ所長檢事正ニ比シテ俸給ヲ増加シアルニ部長其他各判事ニ付テハ全國平等ニシテ何等ノ區別ヲ爲サスト云フカ如キ非難ノ餘地ナシト云フヘカラス聞カスヤ英國ノ如キハ大法官ハ實ニ總



理大臣ヨリモ多額ノ俸給ヲ受クルコトヲ蓋シ裁判官ニ相當ノ俸給ヲ與ヘテ其生計ニ苦心セサラシムルハ自ラ其獨立ヲ維持シ裁判ノ公平ヲ得セシムルノ途ナルニ却テ其俸給ヲ減殺スル如キハ策ノ得タルモノニアラスト信ス

裁判官ノ地位ヲ鞏固ナラシムルハ實ニ司法權ノ獨立ヲ保証スルモノニシテ同時ニ又裁判ノ公平確實ヲ得ルノ途ナルコト上來陳スルカ如シト雖モ蓋シ裁判官モ又人也時ニハ事實ヲ誤リ法律ヲ誤リテ以テ裁判ノ確實ヲ過ルコトナシトセス時ニハ又私情ニ促サレ賄賂請托ヲ容レテ以テ裁判ノ公平ヲ害スルコトナキヲ保セス是ニ於テカ此弊ヲ矯メンカタメニ裁判所ノ組織上二個ノ制度ノ存スルモノアルヲ見ルニ二級審理ノ制及合議裁判ノ制是レナリ

二級審理ノ制

二級審理ノ制ト稱スルハ上級裁判所ヲシテ下級裁判所ノ下シタル裁判ヲ釐正スルコトヲ得セシムルモノニシテ即チ凡ソ訴訟ハ必スヤ二回審理ノモノトシテ下級裁判所ノ判決ニ對シテハ上級裁判所ニ控訴スルコトヲ得セシムルニアリ蓋シ控訴ノ途ニ依リテ以テ第一審ノ判決ノ錯誤不公平ヲ矯正シ得ヘキコトハ所謂一タヒスルハ再ヒスルノ勝レルニ若カサルノ道理ニテ固ヨリ親易キノ理

由タルノミナラス上級裁判官ハ下級ノ裁判官ノ如ク直接ニ訴訟人ト近邇スルモノニアラサルカ故ニ自ラ請托ニ左右セラレ、ノ患モ少カルヘク且其ノ事件ハ既ニ第一審ニ於テ一ト度審理釋明セラル、モノニ係ルカ故ニ之ヲ判別スルニ於テ概シテ正鵠ヲ誤マルコトナカルヘシ殊ニ下級裁判所ニ於テ既ニ十分ノ練習ヲ遂ケ經驗ヲ重ネタル裁判官ヲシテ第二審ノ判決ニ當ラシメ同時ニ下級裁判所ヨリモ係員ノ數ヲ加倍スルニ於テハ其効力モ又一層大ナルヘキナリ(第十四條第十六條第二十六條第二十七條第三十七條第三十八條第四十一條)或ハ一タヒスルハ再タヒスルノ精且確ナルニ若カストセハ之ヲ三度スルハ又之ヲ再ヒスルニ勝ルコト明ナルヘシト云フヤヲ知ラスト雖モ若シ此推理ヲ貫カントセハ之ヲ三タヒスルハ四タヒスルノ勝レルニ若カスト云ハサルヲ得ス結局底止スル所ヲ知ラサルニ至ルヘク其結果タル執拗ナル訴訟人ハ一生ヲ擧ケテ訴訟ニ從事スルニ至リ訴訟ノ終局ヲ見ル能ハサルヘク貧窮ナル訴訟人ハ訴訟費用ノ多キニ堪ハスシテ中途訴訟ヲ拋棄シ且其權利ヲ伸張スルコトヲ絶念スルニ至ルヘシ其弊實ニ言フヘカラサルモノアリ此故ニ一回ノ審理ハ或ハ裁判ノ

公平ヲ破リ確實ヲ得サルノ嫌ナキニアラサルカ故ニ第二回ノ審理ヲ爲サシムト云フモノ獨リ我邦ノミナラス歐洲各國ノ制度概シテ皆然リトス然レトモ事實ノ審理ハ此二回ノ審理ヲ經テ過誤ナシトスルモ法律ノ點ニ至テ或ハ之ニ背戾シ或ハ其適用ヲ誤ルコトナシトセス故ニ控訴ノ裁判ニ對シテハ又更ニ一種ノ救濟ノ道ナカルヘカラス上告即チ是レナリ蓋シ上告ノ途タルヤ全國ヲ通シテ法律適用ノ畫一ヲ期スルニアリテ從テ全國一般ヲ管轄スヘキ法衙ノ掌ルヘキ所タラサルヘカラス此故ニ從來ハ獨リ大審院ノミ上告ヲ受理判決シ來タルニ現行構成法ニテハ各控訴院モ又區裁判所ノ控訴事件ニ對スル上告ヲ受クルモノトナセリ(第三十七條第二項第五十條第一項)斯ノ如クスルトキハ區裁判所ノ事件ニ付テハ控訴院ヲ異ニスル毎ニ裁判例ヲ異ニスルノ結果ヲ見ルヘク法律適用ノ畫一ハ望ムヘカラサルニ至ラン果シテ如何ナル理由ヨリスルカ或ハ區裁判所ノ管轄事件ハ極メテ輕微ノ事件ニ屬ス此ノ輕微ノ事件ニ付キ唯一個ノ大審院ニノミ上告セシムルモノトセハ遠地ニ居レハ旅費其ノ他ノ失費ノタメニ到底上告ノ手段ヲ利用スルコト能ハサルニ至ル可シ成程一理アリ

合議制  
獨制ノ可  
否如何

然レトモ今日日ヲ逐フテ交通ノ便利ヲ加フルニ至テハ此理由ノ力ハ漸ク減少シ行カサルヘカラス且ツ夫レ上告ノ手段ハ法律適用ノ畫一ヲ期スルモノ其主タル理由ナリトセハ數多ノ上告裁判所ヲ設クルハ決シテ此目的ニ適フタルモノニアラス故ニ佛國ノ如キハ上告裁判所トシテハ破棄院即チ大審院ノ一裁判所アルノミ唯獨逸ニ至リテハ然ラス獨逸ハ數多ノ聯邦ヨリ成リ各聯邦其法律ヲ異ニスルカ故ニ從テ上告ヲ受クル裁判所モ數多アルヲ見ルハ不得止次第ナレトモ全國ヲ通シテ同一法下ニ浴スル日本國ニ於テ數多ノ上告裁判所アリ從テ數種ノ裁判例ヲ見ルカ如キハ甚々謂ハレナキコトト云ハサルヘカラス今ヨリ裁判所構成法上ノ原則トシ最モ喧シキ彼ノ合議制單獨制ノ可否如何ニ就テ論究スヘシ所謂合議制トハ訴訟事件ヲ審理判決スルニ當ツテ數名ノ裁判官之ヲ掌ルモノニシテ單獨制トハ單ニ一名ノ裁判官ヲシテ事件ヲ審理判決セシムルノ謂ナリ凡ツ裁判所ハ下級裁判所ヨリ最上級ノ裁判所迄或ハ悉ク合議制ト爲スヘキカ或ハ又悉ク單獨制ト爲スヘキカ或ハ又一部分ハ合議制トシ一部分ハ單獨制トシテ兩制ヲ併用スヘキカ此問題タル百年以前ヨリ既ニ歐洲ニ

裁判所構成法

於テ議論アリタル所ニシテ今日迄ニ學者ノ論難辯議セル所極メテ多シト雖モ未タ敢テ議論ノ一定シタリト云フニアラス唯之ヲ實際ニ徵スル時ハ今日ノ歐洲諸國ハ多クハ合議制ヲ採用シ傍ラ單獨制ヲ保存スルヲ見ル又我邦ニテモ從來控訴院及ヒ大審院ニハ合議制ヲ行ヒ始審裁判所即チ今ノ地方裁判所以下ニハ單獨制ヲ採用シ來リタルニ現行ノ裁判所構成法ニテハ最下級ニ屬スル區裁判所ノ外ハ總テ之ヲ合議制ト爲シ地方裁判所ノ如キモ三名ノ判事ヲシテ一事件ノ審理判決ニ當ラシメタリ是ニ於テカ合議制單獨制可否ノ議論ハ我邦ニ於テモ實ニ實際上ノ大問題トナリ既ニ第一議會以來構成法ノ改正案ヲ提出スルニ至リ其改正案ノ主トスル所モ實ニ地方裁判所ノ合議制ヲ廢スヘシト云フニアリ故ニ今日ニ在テ此問題ヲ決スルハ最モ有用ニシテ且有益ノコトナルヲ見ルヘシ

諸君子ハ上ニ言ヘルコトアリ一タヒスルハ二タヒスルノ誤リナキニ若カスト是レ實ニ自明ノ理ニシテ爭フヘカラサルコトナルカ之ト同シク一人ノ見ルハ三人ノ見ルニ若カスト云フコト又説明ヲ待タスシテ明カナルコトナル可シ所

謂三人行必有師焉ト云フカ如ク多數ノ人相集レハ各自其智能ヲ交換シテ相互ノ長短ヲ補ヒ能ク事ノ得失利害ヲ知ルコトヲ得ヘシト云フハ古今東西トナク何人モ抱持スル所ノ常情ニシテ裁判ニ合議制ヲ採用ス可シト云フモ亦實ニ觀易キ普通ノ概念ニ起因スル所ノモノタリ

今夫レ數人ニシテ裁判ニ從事スル時ハ其間自ラ多少ノ意見ヲ異ニスルコトアルヘク意見ヲ異ニスレハ討議シ論究スヘク討議論究スルノ結果ハ能ク眞理ヲ明カニシ錯誤ヲ來スコトナカルヘシ即チ眞理ナルモノハ實ニ討議ニ現表スルモノニシテ甲者ノ短所ハ乙者之ヲ補ヒ乙者ノ短所ハ甲者之ヲ補充シテ互ニ協力スルノ結果能ク確實ノ裁判ヲ下スコトヲ得ヘシ加之ノミナラス裁判ニ尤モ嫌疑スヘキハ賄賂請托ノ弊ナリトス蓋シ才識非凡ニシテ經驗豐富ナル裁判官ト雖モ荷モ私請ヲ容レ苞苴ノ爲ニ左右セラル、ニ於テハ裁判官トシテ寸毫ノ借値モナシト云フテ不可ナルナシ寧ロ凡庸淺識ノ裁判官カ虚心平氣事ヲ裁判スルノ遙カニ優レルノ若カス何トナレハ凡庸ノ裁判官尙良心アリ良心ニ從テ裁斷スル或ハ正鵠ヲ得サルコトアリトスルモ甚シキ不公平不條理ノ裁判ヲ下

スコトハナカルヘキモ殊更ニ本心ヲ曲クテ裁判ヲ下スニ至リテハ其底止スル所實ニ知ルハカラサルモノアレハナリ其然リ一人ノ裁判官ニ賄賂ヲ贈リ之ニ請托スルハ事秘密ニ屬シテ或ハ行ハレ易カルヘキモ數名ノ裁判官ニ就テ其中ノ一人ニ請托スルモ實効ヲ見ルコト能ハス縱シヤ請托セントスルモ他ノ監察ヲ恐レテ容易ニ之ヲ聽クコトヲ爲ササルヘシ況ンヤ數人ノ裁判官ニ請托セントスルニ至テハ必スヤ巨額ノ費用ヲ要スヘキカ故ニ訴訟人ハ躊躇シテ之ヲ爲スコト能ハサルヘク縱シヤ之ヲ爲サントスルモ數名ノ裁判官中ニハ又公平廉直寸毫モ心ヲ曲ケサルノ人ナキニ非ス故ニ何レノ途賄賂請托ノ困難ナルヲ見ル可シ賄賂請托ニ依リテ其心ヲ枉クルコトナク公明正大虚心平氣以テ裁判ヲ下サハ其裁判ハ以テ能ク公平ナルコトヲ得ヘシ之ヲ要スルニ衆裁判官互ニ熟議ヲ遂クルノ結果ハ能ク裁判ノ錯誤ヲ防止シ互ニ監視スルノ結果ハ情實ニ流レス與横ニ涉ラス能ク裁判官ノ私曲ヲ防止スルコトヲ得可シソレ錯誤ヲ防止スルハ裁判ノ確實ヲ得ル所以ニシテ私曲ヲ防止スルハ裁判ノ公平ヲ維持スル所以ナリ而シテ裁判ノ公平ト確實トハ司法權ノ組織ヲ定ムルニ於テ實ニ立

合議制ヲ  
不可トス  
ル理由

法者ノ隨一ニ着目スヘキ点ナリトス

然レトモ合議制ト雖モ亦短所ナキニ非ス從テ種々ノ非難ヲ免レス甚シキニ至リテハ合議制ハ到底有害無益ノ制度ナリト極論スル者アルニ至ルコトハ實ニ偏見タルヲ免レス予ハ今茲ニ第一議會以來提出セラレタル改正案ノ理由ヲ假リ來リテ反對論者ノ論點ヲ示シ就テ予ノ意見ヲ述ヘントス其合議ヲ不可ナリトスル理由左ノ如シ

- 一 合議ニ依リテ裁判ヲ爲ス時ハ事務ヲ澁滯セシムルノ弊アリ
- 二 合議制ニテハ裁判官其責任ヲ輕ンスルノ弊アリ
- 三 賄賂請托ノ弊ハ單獨制ヨリモ却テ合議制ニ於テ入易キヲ見ル
- 四 合議制ナル時ハ多數ノ裁判官ヲ要スルカ故ニ從テ多額ノ經費ヲ要ス
- 五 我邦ノ現狀ニテハ甘シテ不適任ナル裁判官ヲ任用シ置カサルヘカラス
- 六 俸給ヲ十分ナラシメ賢明ナル裁判官ヲ得ント欲スルモ經費不足ニシテ其事ヲ行フヲ得ス

第五第六ノ理由ハ我邦ノ現狀ニ係ル頃々後ニ讓リテ第一ノ理由ヨリ研究セン

第一點 合議制ハ果シテ事務ヲ溢滞セシムルノ弊アルヤ否ヤ單獨制者ハ曰ク凡ソ訴訟ハ迅速ニ裁決スルコトヲ要ス然ルニ合議制ハ却テ之ヲ遲緩ナラシムルノ弊害アリ夫レ一事件ヲ裁判スルニ當リテ其裁判官ノ數多キトキハ多キ程倍々時日ヲ費ス可キハ免ル能ハサルノ數ニシテ多數ノ裁判官互ニ熟議スルハ即チ合議制ノ利益ナリト云フト雖モ若シ夫レ各事件毎ニ異議百出シテ一回ノ會議之ヲ決定スル能ハス二回三回ヲ重ネ延期ニ延期ヲ重ナルトセハ其結果徒ラニ訴訟事件ノ裁決ヲ遲延シテ當事者ニ尠カラサル迷惑ヲ及ス可シ若シ又之ニ反シテ其裁判官中更ニ辯論討議スルコトナク互ニ相一致スルノ慣習アリトセンカ是レ其弊ヤ強テ一致センカタメニ濫リニ自己ノ意見ヲ任ケテ他ノ說ニ雷同スルモノニ外ナラス是レ豈合議制ノ本旨ナランヤ故ニ合議制ノ本旨ヨリ見テ衆裁判官互ニ意見ヲ戰ハスモノトセハ合議ノ結果ハ事務ノ溢滞ヲ來スヘク甚シキニ至テハ訴訟ノ本案ハ之ヲ措キテ空シク枝葉ノ議論ノタメニ一場ノ討論ヲ裁判官ノ間ニ見ルコトトナラン訴訟審理ノ目的豈之ニ依リテ達セリト云フコトヲ得ンヤト

成程合議裁判ハ事務ヲ溢滞セシムルノ弊アルコトハ合議制ノ一ノ短所タルニ相違ナシ蓋シ一人ノ專決スルト三人ノ共議ヲ以テ決スルトハ時日ヲ要スルノ點ニ於テ幾分ノ多少アルハ萬事ニ通シテ然リ合議制ノタメニ單獨制ヨリモ時日ヲ要スルハ數ノ免レサル所ナリト雖モ敢テ又然ラサルモノアリ蓋シ事件ノ重大ニシテ錯雜セルモノニ至リテハ一人カ之ヲ判別ニ苦シミ多岐疑惑ノ間ニ時日ヲ徒消スルハ實際ニ屢々見ル所ナルカ若シ他ニ同シク其事ニ當ルモノアリテ共ニ評議論定スル時ハ所謂甲者ノ短所ハ乙者之ヲ補充シ乙者ノ短所ハ甲者之ヲ補充シ互ニ協力スルノ結果却テ迅速ニ判定ヲ下スコトヲ得ルコトナシトセズ且ツ之ヲ訴訟法ニ見ルニ民事刑事ヲ通シテ受命判事ノ制ノ如キアルハ大ニ事件ノ取調ヲ簡易ナラシムルコトヲ得ヘシ反對論者ハ徒ラニ會議ニ會議ヲ重テテ討論ノタメニ却テ本案ノ訴訟ヲ拋棄スヘシト云フモコハ實ニ極端論タリ第百十九條以下ニ見ル如ク裁判ノ言渡及評議ニ付テハ一定ノ規則アリ論者ノ如キ極端ノ弊ヲ見ルハ蓋シ稀ナルヘキナリ去リナカラ予ハ敢テ合議制ハ單獨制ヨリモ一般ニ事務ヲ迅速ニ處辨スルモノト云ハス否ナ一層之ヲ遲緩

ナラシムルハ合議ノ本旨ヨリシテ必然免ル能ハサル所タルヲ認ム且訴訟ナル  
 モノハ凡テ迅速ニ處決スルヲ要スルヲ認ムヘシト雖モ予ノ考ニテハ吾人ノ生  
 命ニ關シ自由ニ關シ財產榮譽ニ關スル重要ノ事件ニ付テハ之ヲ裁決スルノ速  
 ニシテ愈ナランヨリハ寧ロ遅クシテ精ナランコトヲ望マサルヲ得サルヘキヲ  
 信スルナリ概言スレハ合議制ハ單獨制ヨリモ多ク時日ヲ要スルト云フト雖モ  
 之ヲ要スルモ決シテ論者ノ言ノ如ク他ニ得ル所ナキニアラス事ヲ鄭重ニスル  
 ハ精確ヲ過タサル所以ニシテ鄭重ニスルニ時日ヲ要スルハ又免レサル所ナリ  
 トス

第二點 合議制ニテハ果シテ裁判官其責任ヲ輕ンスルノ弊アリヤ否

反對論者ハ曰ク裁判官ノ能ク其職ヲ守リテ正實ナルハ一般ノ輿論及法律ニ對  
 シテ有スル責任ニ在リテ存ス然レトモ責任ナルモノハ一人ニシテ事ニ當ルト  
 數人之ヲ分擔スルトニ依リテ勢之ヲ見ルニ輕重ノ差ナキ能ハス今夫レ數名ノ  
 裁判官訴訟ヲ擔當スル時ハ人民ハ裁判官ノ多數ナル一點ニ眩惑シテ之ヲ妄信  
 スルノ傾向アルヨリシテ其裁判ハ自己ノ勢力ヲ恃ミ知ラス識ラス不正ニ陥ル

ニ至ルヘシト雖モ單獨制ニ至テハ此ノ如キ弊害ナシ其裁判官ハ唯自己一身ノ  
 責ヲ以テ局ニ當リ其信スル所ニ從テ裁判ヲ爲スノミ勢力ヲ恃ムカ如キコトハ  
 絶テアルナシ且ツ夫レ合議制ニテハ裁判官ハ自己ノ爲シタル裁判ノ責任ヲ他  
 ニ譲リテ以テ之ヲ遁ル、ノ口實ヲ與フルノ弊アリ乃チ其裁判ハ一人ノナシタ  
 ル所ニアラサルカ故ニ若シ人アリ其裁判ノ不正不當ナルヲ抗擊スルモ之ニ于  
 與シタル裁判官ハ將ニ答ヘテ言ハンは是レ余ノ本心ニアラサルモ強固ナル反對  
 論ニ制セラレ遂ニ抵抗スルコト能ハサリシト焉ソ其裁判官ハ多數ノ説ヲ贊  
 成シタルモノナルコトヲ果シテ斯ノ如クンハ縱令裁判其物ニ不正ノ廉アルモ  
 各口實ヲ設ケテ遂ニ其責任ノ歸スル所ナキニ至ラント

論者ノ説一應理アルカ如キモ又極端論タルヲ免レス責任ハ數人ニ歸スルカ故  
 ニ各自ノ責任ハ一人人事ニ當ルカ如ク重キヲ得ストハ甚タ解スルニ苦ムナリ即  
 チ數人事ニ當レハ逆其間ニ責任ノ岐ル、モノト云フコトヲ得ス苟モ其事ニ于  
 與スル以上ハ其間ニ連帶ノ責任ノ存スルハ明カナルコトタリ既ニ責任ノ存ス  
 ル以上ハ廉耻ヲ顧ミサル裁判官ハイザ知ラス苟モ多少德義心アルモノハ相當

ノ思慮ヲ費シテ事ニ當ルヘキナリ否之ヲ吾人ノ本性ニ見ルニ凡ク人ノ共同事ヲ執ルニ當リテ勝ツコトヲ希フハ自然ノ性情ナリ多數ノ裁判官同一事件ヲ擔當スルトキハ相競フテ其技術ヲ較ヘ敢テ人後ニ立サランコトヲ期シ可シト雖モ單獨事ニ當ルトキハ斯ノ如キ競争心ヲ生スルコトナシ反對ノ議論ニ遭遇セサルカ故ニ輒ク自己ノ當初ノ觀念ニ放任シテ敢テ又深ク究ムルコトヲ爲サス輕忽ニ裁判シテ著シキ錯誤ヲ來スコトアリ然リ吾人カ腦裡ニ浮フ當初ノ觀念ナルモノハ必スシモ最良ノ觀念ニアラス去レハ合議制ハ裁判官ニ競争心ヲ惹起シ競争心ノ結果ハ却テ裁判官ヲシテ其責任ヲ重ンセシムルコトニ歸着スヘキナリ責任ヲ他ニ讓ルト云フハ實際ニハ有リ勝ノコトナルモ、コハ獨立心ナキ庸愚ノ裁判官ニ付テ見ルヘキノミ苟モ自ラ願ミテ裁判官ノ地位ヲ知ルモノハ斯ノ如キ卑怯ノコトアルヘカラス况ンヤ其責任ハ各裁判官ノ有スル所ニ係ル之ヲ他ニ讓ラントスルモ道理上許サ、ルノコトナルオヤ(第百廿一條第二項)予ハ尙ホ云ハントス若シ夫レ他ト共同事ニ當ルカ爲ニ其責任ヲ輕スルモノトセハ獨リ裁判官ノミナラス苟モ多數合議ノ法ニ依ル時ハ必スヤ此弊アリト云

ハサルヘカラス其結果立法權モ之ヲ衆議ニ附スルノ却テ害アリト云ハサルヲ得サルニ至ル可シ豈斯ノ如キ理アラシヤ

第三點 合議制ハ單獨制ヨリモ却テ賄賂請托ノ弊行ハレ易キヤ否ヤ

論者ハ曰ク多數ノ裁判官事ニ當ルヤ其中自ラ一人ノ勢力者アルヘシテ勢力アル裁判官ノ意見ハ容易スク他ノ附和雷同ヲ得ルカ故ニ訴訟人ニシテ其要求ヲ容レシメント欲セハ就中勢力アル裁判官ニ依頼シ之ヲ籠絡スレハ足レリト、コハ甚タ穿チタル議論ニシテ予モ答辯ニ苦シム若シ夫レ他ノ願使ニ默從シテ願ルナキモノ裁判官ノ常狀ナラハイサ知ラス法官ハ決シテ幫間ニアラス苟モ一個獨立ノ人間ト見ル以上ハ又自己ノ意見ナクンハアラス而シテ構成法第百二十二條ヲ見ヨ「評議ノ際各判事意見ヲ述フルノ順序ハ官等ノ最モ低キモノヲ始メトシ裁判長ヲ終リトス官等同シキトキハ年少者ヲ始メトシ受命ノ事ニ付テハ受命判事ヲ始トス」ト裁判長ニ籠絡セラレテ其意見ニ默從スルコトモナカルヘキナリ

論者ハ又曰ク多數ノ裁判官カ會同會議スル場合ニ於テハ自己ノ意見ヲ陳述セ

ス又ハ之ヲ陳述スルノ止ムヘカラサル時ハ半ハ之ニ陳述シテ半ハ之ヲ陳述セサルコトアリ例ヘハ原告ノ請求スル所ノ相當額ハ一千圓ト信スルニモ拘ラヌ五百圓ナリト陳フルトセヨ是其裁判官ハ他ノ請托ヲ容レテ私カニ爲ニスル所アルニ由ルモノニシテ其意見ハ實ニ裁判ノ全部ニ影響シ來ル可シ何トナレハ正當ナル說ニ一個ノ同意ヲ失ハシムレハナリ是レ一人ニテハ行レ難キモ裁判官ノ多數ナルヨリ多數ノ裡ニ隱レテ隱然行フ卑劣手段ノ弊害ナリト成程一人ニ請托スルノミニテ時ニ斯ル結果ヲ生スルコトアルヘシト雖モ是レ實ニ稀有ノ例ノミ間接ノ影響ノミ知ラスヤ多數ノ裁判官ハ互ニ相牽制シ相監督シテ其間自ラ私曲ヲ防遏シ公平ヲ維持スルニ於テ無限ノ効力ヲ有スルコトヲ且ツ第百二十四條ニ見ヨ「裁判官ハ決シテ自己ノ意見ヲ表スルコトヲ拒ムコトヲ得ス」又第百二十三條ニ見ヨ「裁判ハ過半数ノ意見ニ依ル若シ金額ニツキ意見三說以上ニ分レ其說各過半数ニ至ラサルトキハ過半数ニ至ルマテ最多額ノ意見ヨリ順次寡額ニ合算ス刑事ニ付テハ同シク被告人ニ不利ナル意見ヨリ順次利益ナル意見ニ合算ス」ト故ニ論者ノ弊トスル所ノ如キハ益々其例ヲ見ルノ

稀ナルヲ知ル可シ

要スルニ一人ニ請托スルト三人ニ請托スルト何レカ易キ未タ智者ヲ俟テ後知ラサルナリ賄賂請托其力ヲ逞スルコト能ハサルハ合議制ノ單獨制ニ優ル長所ナルハ實ニ爭フヘカラス然ルニ彼レ改正案ニテハ此長所ヲ擧ケテ却テ合議制廢止ノ理由ト爲シタリキ所謂坊主ヲ惡ムモノ袈裟ヲ嫌フノ類ニシテ甚タ謂レナキノ事タリ

第四點 合議制ハ單獨制ヨリモ經費ヲ要スルコト多シ

論者ハ曰ク合議制ハ多數ノ裁判官ヲ要ス多數ノ裁判官ヲ要スルカ故ニ俸給トシテ國庫ノ負擔スル所大ナラサルヲ得ス今若シ此等多數ノ裁判官ニ與フル所ノ俸給ニシテ不充分ナランカ能者ハ去テ復其職ニ止マラス其地位ニ戀々トシテ之ヲ守リ之ヲ望ムモノハ不能者ノミ不肖輩ノミ果シテ斯ノ如クハ善良適正ナル裁判ハ得テ望ムヘカラス夫レ千圓ノ俸給ヲ受クル裁判官ハ二千圓ノ俸給ヲ受クルモノヨリハ學識經驗ニ道理上劣等ノモノタラサルヘカラス然ルニ今此千圓ノ俸給ヲ受クル裁判官三人アラハ總額三千圓ニ達スヘシト雖モ此三千



圓ヲ受クル三人ノモノハ果シテ能ク二千圓ヲ受クル一人ノモノヨリモ善良ナル裁判ヲ爲シ得ルヤ甚疑ハシ千圓ノ人物ハ依然千圓ノ人物ニシテ三人依ルモ五人集ルモ到底二千圓ノ人物ノ上ニ出ツルコト能ハサルヘキナリ若シ此弊ヲ矯メテ賢明ナル裁判官ヲ網羅センカタメニ充分ナル俸給ヲ與ルトセンカ其經費ノ莫大ナル到底國庫ノ能ク支フル所ニ非サル可シ故ニ多數ノ裁判官ヲ置クノ利害ハ面倒ナル議論ヲ要セス簡單ナル計算上ニ於テ業ニ已ニ明確ニシテ又爭フヘカラスト

論者ノ言ハ實ニ痛絶ナリ快絶ナリ余輩如何ニ此点ニ付テ合議制ヲ辯護セント欲スルモ殆ント其辭ナシ殊ニ之ヲ我邦ノ現狀ニ比較シ來ル時ハ一層有力ノ議論タルヲ見ルナリ憲法ハ立チ國會ハ開ケ今ヤ經費節減民力休養ハ爲政家カ目下ノ急務トシテ着目シ論辯スル所タルニ一方ニハ法官ノ所奉ハ極メテ薄キノミナラス司法部内ニハ言フヘカラサル破綻ヲ呈シ能者職ヲ屑トセス庸者之ヲ墨守スルノ現狀ヲ見テハ論者ノ言ハ實ニ時事ヲ痛言シタルモノトシテ予輩ハ之ヲ首肯スルモ之ヲ拒否スルニ辭ナシ然リト雖モ予輩ハ尙左ノ言ヲ以テ聊カ

辯明スル所アラントス

合議制ニ依ルトキハ一名ノ裁判官ノ代リニ多數ノ裁判官ヲ要シ從テ多少經費ノ増加ヲ見ルハ固ヨリ事實ナリ然レトモ多額ノ經費ヲ要スルノ一事ハ決シテ合議制度ヲ廢スルノ理由トナラス何トナレハ單ニ經費ノ一點ニ付テノミ論スルトセハ陸海軍モ廢ス可シ警察モ廢ス可シ豈獨リ裁判所ノ組織ニ就テノミ思慮ヲ費スコトヲ要センヤ抑モ國家ニハ之ニ要スルノ機關アリ機關ヲ運轉スルニ經費ヲ要スルハ必然ノコトニシテ唯經費ヲ支出シテ依テ受クル所ノ報酬ハ支出シタル經費ヲ償フニ至ルヤ否ヤ是實ニ極ムヘキノ點ナリトス夫レ吾人カ生命自由財產榮譽ハ法律ノ賜ナリ而シテ其法律ヲ執行スルモノハ實ニ司法權ナリトセハ司法權ノ貴重ナル又爭フヘカラス此貴重ナル司法權ノ組織ヲシテ完全ナラシメ善良適正ナル裁判ノ下ニ吾人カ生命自由財產榮譽ノ安全ヲ享受セント欲セハ吾人ハ決シテ經費ノ一點ニ付テ躊躇スヘキニアラス須ラク其事ノ必要ト不必要ト將タ利害得失ヲ極メテ以テ取捨撰擇スル所ナカルヘカラス且夫レ吾人一私人カ一家ノ經濟ヲ整理セントスルカ須テク先ツ入ヲ計リテ後

出ルヲ計ラサルヘカラスト雖モ一國ノ財政ニアリテハ又然ラサルモノアリ或  
ル程度迄ハ能ク出ルヲ計リテ後入ルヲ計ルヘキモノトス換言スレハ斯々ノ支  
出ヲ要ス故ニ其丈ノ租稅ヲ徵收ヒサルヘカラスト云フニ在リ是レ一家ト一國  
ト趣ヲ異ニスル所ニシテ經費ノ一點ニノミ躊躇スヘカラスト云フモ亦此餘裕  
ノ存スレハナリ

論者カ千圓ノ人物ハ依然千圓ノ人物ナリ二千圓ノ人物ニ劣ルトノ説ハ實ニ名  
論ナリト雖モ合議制ノ主意ハ決シテ優等ナル裁判官即チ二千圓ノ裁判官一名  
ヲ置ク代リニ劣等ナル千圓ノ裁判官三名ヲ置クト云フニハアラス均シク同等  
ノ裁判官トシテ一名ヨリハ三名事ヲ見ルノ勝レルノ若カサルヨリ來ルモノタ  
リ爲メニ經費ヲ要スルハ争フヘカラスト雖モ須ラク先ツ其事ノ要不要將タ利  
害得失ニ從テ取捨セサルヘカラスト尙ホ其經費ヲ要スルト云フ點モ一般ニ多額  
ヲ要スル逆排斥スヘキニアラス其國ノ貧富ヨリ國民生計如何ヲ顧ミ果シテ能  
ク國力ノ堪フル所ナリヤ否ヤヲ極メサルヘカラスト而シテ後國力到底之ニ堪フ  
ル能ハストセンカ則チ止ム如何ニ必要ニ如何ニ有利ノ事業タリトモ之ヲ論シ

之ヲ究ムルコトヲ須ササル可キナリ論シテ茲ニ至レハ諸君ハ如何ナル判斷ヲ  
下サントスルカ裁判ノ確實ト公平トハ司法權ノ組織ニ最モ尊フ所ナリ而シテ  
合議制ハ單獨制ヨリモ能ク此目的ヲ達スルニ近キヲ見ル凡ソ訴訟ハ迅速ニ裁  
決スルコトヲ要ス然レトモ合議制ハ單獨制ヨリモ時日ヲ要シ訴訟費用ヲ増加  
セシムルハ免ル能ハス且ツ之ヲ一國ノ經濟上ヨリ見ルトキハ單獨制ト合議制  
トハ經費ノ上ニ於テ著シク多少ノ差アリトス斯ノ如ク比較シ來ルトキハ合議  
制モ一概ニ可トシテ取ル可カラス單獨制モ一概ニ排斥ス可キニ非ス宜シク兩  
制ヲ折衷シ其宜ヲ制スルニ在ランノミ

現行構成法ニテ區裁判所ヲ單獨制トシ地方裁判所以上ニ合議制ヲ採用セルモ  
亦此趣意ニ外ナラス區裁判所ハ概シテ輕微ノ事件ヲ取扱フ所ニシテ困難錯綜  
セル事件ヲ見ルハ甚稀ナリ而シテ此等輕微ノ事件ハ輕微ナル丈ケ夫レ丈ケ迅  
速ニ之ヲ裁決セサル可カラス時日費用ヲ重ネテ訴訟人ヲシテ其負擔ニ堪ヘサ  
ラシムルコトアル可カラス之ニ反シテ地方裁判所以上ニ至リテハ一層重大ノ  
事件ヲ管轄スルモノナルガ故ニ多少事務ヲ澁滯シ經費ヲ増進スルモ須ラク台

議制ニ依リテ裁判ノ確實公平ヲ維持シ行カサル可カラストハ爲セルモノタリ  
彼ノ歐洲諸國ノ制度ニ見ルモ亦然リ總体ニ合議制又ハ單獨制ヲ採用スルモノ  
ハ之アルコトナシ

改正案ニ  
於ケル  
合議制廢  
止ノ理由

曩キニ一言セル如ク構成法改正案ニテハ我國ノ現狀ヨリ論シテ合議制廢止ノ  
理由トシテ左ノ二点ヲ指摘シタリ

- 一、我邦ノ現狀ニテハ甘シテ不適任ナル裁判官ヲ任用シ置カサルヘカラス
- 二、俸給ヲ十分ナラシメ賢明ナル裁判官ヲ得ント欲スルモ經費不足シテ其事  
ヲ行フヲ得ス

此ノ第一点ノ主意ハ合議制トスレハ多數ノ裁判官ヲ要スルモ今日適任ノ裁判  
官ハ其數ニ應スルニ足ラス故ニ不適任者ト知リツ、モ舉テ以テ其數ニ充テサ  
ル可カラスト云フニ在リ我司法部内ノ現狀果シテ斯ノ如キヤ否ヤ或者ノ言ニ  
曰ク我國ノ裁判所ハ一級毎ニ時代ノ變遷ヲ代表セリ大審院ハ幕府時代ニシテ  
控訴院ハ一新時代トモ見ル可ク地方裁判所以下ニ至リテ漸ク近世ノ裁判時代  
ヲ見ルト無稽ノ言一笑ニ附シ去ルノ外ナシト雖モ兎ニ角新分子舊分子相混

合シテ舊分子必スシモ法律ニ暗キニ非ス新分子必スシモ經驗ニ淺キニモ非サ  
ルカ雲霞ノ如キ多數ノ裁判官中ニハ不適任者ナキニハ非サル可シ要ハ人材陶  
汰ノ宜キヲ得ルヲ望ムニ在リ後身有爲ノ士ハ當ニ其技能ヲ司法部内ニ現スニ  
於テ躊躇セサル可シ

第二ノ點ハ今日裁判官ノ俸給ナリ之ヲ十分ナラシメテ一方ニ賄賂ノ弊ヲ除キ  
一方ニ賢明ノ裁判官ヲ得ント欲スルモ合議制ニテハ多數ノ裁判官ヲ要スルカ  
故ニ經費不足シテ之ヲ行フコトヲ得スト云フニ在リ

今日裁判官ノ俸給ハ實ニ不充分ナリ不充分ナルカ故ニ人材ヲ得ルニ苦ムハ尤  
モナル次第ナリ然レトモ其不充分ナリト云フノ點モ實際ニ就テ考フレハ矢張り  
比較的ノ語ニシテ均シク官吏テアリナカテ司法官ノミ俸給ヲ低減シタリト云  
フカ大ニ一般ノ感觸ヲ害シタルニ相違ナシ凡ソ物其平ヲ得サレハ鳴ルト云フ  
如ク司法部内ノ不平モ一般官吏トノ權衡ヲ失スルト云フモノ主動ノ原因タリ  
故ニ目下ニ在リテハ此不權衡ヲ治スルハ最モ急務ナルヲ信ス而モ論者ノ言ノ  
如ク司法官ノ俸給ヲ一層充分ナラシムルハ望マシキモ三名ノ代リニ一名ノ判

事ニ澤山ノ月給ヲ與ヘ以テ賄賂ノ弊ヲ防クト直ニ合議制ヲ單獨制ニ代ヘヨト  
 ハ如何ナルモノカ此處經費トノ關係上究ム可キノ點ナリトス尤モ改正案ト雖  
 モ敢テ全然合議制ヲ廢スルニハ非ス地方裁判所ニ限リテ合議制ヲ廢シ控訴院  
 大審院ニハ依然合議制ヲ保存セリ何故ナルカ或ハ地方裁判所ハ概シテ第一審  
 ノ判決ヲ下スニ過キス確定ノ判決ヲ下スモノハ控訴ニ對シテ控訴院アリ上告  
 ニ對シテハ大審院アリ故ニ其間ニ輕重ノ差ヲ存スルハ敢テ謂ハレナキニ非ス  
 ト云フヤヲ知ラスト雖モ斯ノ如キハ苟モ法律ヲ知ル者ノ口ニス可キ所ニ非ス  
 控訴上告ニハ之ヲ申立ツルノ期間アリ若シ其期間ニ之ヲ申立テサルハ第一  
 審ノ判決モ亦確定ノ判決タル可キナリ若シ第一審ノ判決ニ對シテハ必スヤ常  
 ニ上訴スヘキモノナリトセハ論者ノ區別ヲ設クルモ或ハ謂レナキニ非サル可  
 シト雖モ如何ニセン是レ事實上法律上有得可キノコトニ非サルオヤ否ナ成ル  
 可ク上訴ノ手段ニ依リテ訴訟ヲ延滞セシムルコトナク當事者ヲシテ訴訟ノ失  
 費ヲ加重セシムルコトナキヲ要ス換言スレハ成ル可ク當事者ヲシテ第一審ノ  
 判決ニ甘心シ首服セシムルコトヲ計ラサル可カラス之ヲ計ルハ第一審ノ判

司法裁判  
所ノ管轄

決ヲシテ公平ニ且確實ノモノヲラシメサル可カラス而シテ其裁判ノ公平ハ衆  
 裁判官相監視スルノ結果ニ成リ其裁判ノ確實ハ衆裁判官互ニ熟議ヲ遂クルノ  
 結果ニ得ルコト予カ上陳スル所ノ如シ故ニ合議制ヲ控訴院以上ニ限リタルハ  
 決シテ他ニ理由アルニ非ス又經費節減ノ一理由ニ外ナラサルナリ  
 今ヤ總論ノ部ヲ終ルニ臨ミテ司法裁判所ノ管轄ノコトニ付キ一言シ置カサル  
 可カラス而シテ是レ亦司法權獨立ノ原則ニ基クモノニ外ナラス  
 從來司法裁判所ノ管轄ヲ論スルモノニ二說アリ一ハ事件ノ性質ヨリ立論スル  
 モノニシテ他ハ職務ノ性質ヨリ立論スルモノナリ  
 裁判所ノ職務ノ性質ヨリ論スル者ハ曰ク司法權ノ職務トスル所ハ裁判ヲ爲ス  
 ニ在リ又裁判ヲ爲スノ一事ニ止マル故ニ行政上ノ職務ニ付テハ全ク無關係ノ  
 モノナリト雖モ苟モ爭訟ニ關スル以上ハ爭訟ノ目的當事者ノ資格并ニ其爭  
 フ所ノ利益ノ性質如何ヲ問ハス司法裁判所ハ實ニ之ヲ審理スルノ專權ヲ有ス  
 可シ其故ニ人民相互ノ間ニ起リタル訴訟ニ對シテ裁判權ヲ有スルハ勿論行政  
 官廳カ當事者タル可キ訴訟ニ對シテモ亦裁判ヲ下スコトヲ得可シ加之立法權カ

或ハ其職務ヲ濫用シタリトシ或ハ違憲ノ法律ヲ制定シタリトシテ立法權ニ對シテモ尙審判ヲ下スコトヲ得ヘシト斯說ヲ以テスルトキハ同一ノ事項モ法律ノ制定ニ關スルト訴訟以外ニ於テ法律ヲ適用スルニ關スルト爭訟ノ審理ニ關スルトニ依リテ或ハ立法的タリ行政的タリ司法的トナル可キナリ然レトモ此ノ說タルヤ著シク司法裁判所ノ管轄權ヲ擴張シ司法權ヲ以テ他ノ立法行政ノ權力ノ上ニ置カントスルモノニシテ政權分立ノ原則ニ反シ同時ニ我憲法ノ容レサル所タルハ論ヲ埃タス憲法第五十七條ニ曰ク「司法權ハ天皇ノ名ニ於テ裁判所之ヲ行フ裁判所ノ構成ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム」第六十條ニ曰ク「特別裁判所ノ管轄ニ屬スヘキモノハ司法裁判所ニ於テ管轄スルノ限ニ非ス」ト此故ニ我帝國ニ於ケル司法裁判所ノ管轄權ハ全ク事件ノ性質ニ基因スルモノニシテ一方ニ在リテハ民事刑事ヲ包括シテ悉ク之ヲ管轄シ行政裁判所ハ毫末モ之ニ容喙スルコトヲ許サス司法裁判所ヲ以テ私權ノ保護者ナリトスルハ實ニ之ヲ言ヘルモノタリ然レトモ他ノ一方ニ在リテハ司法裁判所ノ管轄權ハ立法事項及行政事項ト全ク無關係ニシテ毫末モ之ニ干預スルコトヲ得ス裁判

司法權ニハ  
立法權ニハ  
干渉スル  
能ハス  
云フヨリ  
生ズル結  
果

所ノ構成ハ一ニ司法權ハ立法權行政權ト相分立スルノ原則ヨリ來レル者ナリ  
司法裁判權ハ立法權ニ干渉スル能ハスト云フヨリシテハ下ノ如キ結果ヲ生ス  
一、裁判所ハ其受理シタル事件ニ付判決ヲ下スモ一般ニ對シテ規律的條例的ノ判決ヲ下スコトヲ得ス  
換言スレハ裁判官ハ一事件ニ付判決ヲ下シ今後同様ノ事件ニ對シテハ其効力ヲ及ホス可シト云フコトヲ得ス蓋シ立法權ハ社會ノ公益ニ注意シ公益公益ノ全体ニ關シテ其措置ヲ爲スモノナレハ立法者ノ制定シタル法律ハ固ヨリ規律的ノモノニシテ一般ニ之ヲ遵奉スルノ義務アリ又同種類ノ事實ニハ悉ク適用セラル可キモノナリト雖モ司法權ハ然ラス人民個々ノ利益ヲ監督シ其利益ヲ侵害シ紛爭スルニ當リテ之カ裁決ヲ爲スモノナルカ故ニ其判決ハ唯當事者ト其爭訟事件ノミニ限リ効力ヲ有スルモ決シテ之ヲ他ノ同種ノ事件ニ及ホスコトヲ得ス然ラズシテ判決モ規律的條例的ノ効力アリトヒン乎是レ立法權ノ領域ヲ侵害スルモノニシテ法律ノ適用ヲ任トスル裁判所ノ決シテ爲シ能ハサル所トス

二、裁判所ハ法律ノ適用ヲ拒ムコトヲ得ス

裁判官ハ法律ノ不備不明及ヒ欠點等ヲ口實トシテ訴訟ヲ受理セス又ハ之カ審理判決ヲ遲滯遷延セシムルコトヲ得ス若シ此ノ義務ヲ怠ルトキハ裁判拒絶ノ罪ヲ免レサルモノトス(刑法第二百八十三條)蓋シ裁判官ニシテ法律ノ適用ヲ拒ムヲ得ンカ司法官ナキト何ツ擇ハン司法官ナキ良法律モ亦唯徒法死律ニ歸センノミ此故ニ法律ニシテ其目的ヲ達セント欲セハ之ヲ適用スル者ナカル可カラズ適用ニシテ其果ヲ舉ケント欲セハ之ヲ適用スル者ヲシテ決シテ之ヲ拒絶スル能ハサラシムルコトヲ要ス然ラサレハ司法權ハ容易ニ立法權ヲ左右シ之ヲ輕重スルコト、ナリ從テ立法權ノ行使ヲ妨害スルニ歸スヘキナリ

三、裁判所ハ法律ノ違憲ナルヤ否ヤヲ審察スルノ權利ヲ有セス

是實ニ政權分立ノ原則ヨリ來ル最モ重大ナル結果ナリトス若シ夫レ裁判所ハ違憲ノ法律ナリヤ否ヤヲ審察シテ法律ノ執行力ヲ拒止スルコトヲ得ルトセン乎各裁判所各裁判官ハ其認定スル所ニ從ヒテ解釋シ容易ニ法律ノ執行力ヲ停止スルヲ得ルニ至ルヘキナリ果テ然ラハ立法權ノ効用ハ如何ニシテ之ヲ達ス

ルコトヲ得ヘキ乎(尤モ此点ニ付テハ公法上著シキ議論アリト雖モ茲ニ之ヲ論セス)

司法權ハ行政事項ニ干涉スル能ハスト云フヨリシテ又下ノ如キ結果ヲ生ス

司法權ハ行政事項ニ干涉スル能ハスト云フヨリシテ又下ノ如キ結果ヲ生ス

一 司法裁判所ハ行政官廳ノ管轄ニ專屬ス可キ處分ヲ命スルヲ得ス例ハ

土木工事ヲ命令シ又ハ警察上ノ處分ヲ命令シタリト假定セヨ何人モ之ヲ以テ其職權外ト見做サ、ルモノハアラサル可キナリ

二 裁判所ハ行政處分ノ執行ヲ妨害シ又ハ之ヲ無効ナリト宣言スルコトヲ得ス

三、司法裁判所ハ行政裁判所ニ屬スル爭訟ニ付テハ全ク管轄權ナシ是レ上

陳セル憲法ノ明言スル所ナリ蓋シ行政事務ニ付テハ特別ノ識見ヲ要スルモ司法裁判官ハ概シテ此識見ヲ有セスト云フモノ行政裁判所ヲ設置スル一ノ理由ナリトス加之司法裁判所ノ管轄權ハ其職務ノ性質ヨリ來ルモノニ非スシテ事件ノ性質ヨリ來ルモノト云フ原則ヨリ見ルモ行政事務ニ付テ行政裁判所ノ存スルハ能ク此ノ原則ニ適合スルモノト云フ

可キナリ

一事件ニ付テ司法裁判所ハ其管轄權内ノモノナリト主張シ行政裁判所モ亦自己ノ管轄事件ナリトシ或ハ司法裁判所ハ其管轄外ノ事件ナリトシ行政裁判所モ亦管轄外ナリト主張スルコトナシトセス蓋シ一事件カ純然タル民事又ハ刑事ナリヤ或ハ行政上ノ事件ナリヤヲ判別スルハ往々ニシテ困難ヲ感スルコトナシトセス果シテ如何ニシテ之ヲ決定スヘキカ此點ニ付テハ歐洲諸國多クハ權限爭議裁判所トリビユナール、ド、コンフリーナル者アリテ存ス本邦未タ此ノ種ノ裁判所ナシ輒近ノ議會ニ於テ政府ヨリ此ノ種ノ法案ヲ提出セルモ通過セスシテ消滅セリ

政權分立ノ原則ハ司法裁判所カ立法事務及ヒ行政事務ノ執行ヲ妨害スルコトヲ禁スルノミナラス立法權及行政權ニ對シテ司法權ヲモ保護スルモノナリ故ニ第一、縱令不規則ニ言渡サレタル裁判ナリト雖モ立法權ハ之ヲ破棄スルノ權ヲ有セス之ヲ破棄スルハ上訴ノ途ニ依リテ上級裁判所ノ職權ニ入ル可キモノトス况シテ行政權ニ在テハ毫モ之ニ干與スルコトヲ得サルヤ勿論ナリ第二、裁

判言渡ヨリ生メル利益ハ一ノ既得ノ權利タリ新法ハ舊法ノ下ニ判決セラレタル事物ヲ侵害スルコトヲ得ス然ラサレハ法律ノ効ヲ既往ニ及ホスモノニシテ是レ法例第二條ノ許サ、ル所ナリトス尤モ是レ法律適用上ノ原則ニシテ敢テ法律ノ制定ニ關スルモノニ非ス換言スレハ司法官ヲ羈束スル法則ナルモ立法官ヲ拘制スルモノニ非ス立法官ハ萬能力ヲ有ス法律ヲ制定スルニ於テ何事ノ之ヲ拘束スルモノナシト雖モ而モ社會ノ公益上德義トシテ此法則ニ依遵セサル可カラス第三裁判官ハ終身官ニシテ刑法ノ宣告又ハ懲戒裁判ニ依ルニ非サレハ其職ヲ免セラレムコトナシ此點ニ付テハ既ニ上ニ詳述セリ故ニ茲ニ再說セス

余ハ以上ヲ以テ總論ヲ説明シ了リタリ以下其編章ニ移リ順次ニ講說セントス

現行構成法ハ全部ヲ四編ニ別テリ第一編ニテハ裁判所及檢事局ニ關スルコトヲ定メ第二編ニハ裁判所及檢事局ノ官吏ニ關スルコトヲ定メ第三編ニハ司法事務ノ取扱方ヲ定メ第四編ニハ司法行政ノ職務及ヒ監督權ノコトヲ規定シ通

### 第一編 裁判所及ヒ檢事局

司法官ナル名義ノ内ニハ獨リ判事ノミナラス檢事モ亦包含セラレヘシト雖モ判事ト檢事トハ全ク其職務ヲ異ニシ性質ヲ異ニス檢事ノ本分ハ國家ノ公益ヲ保護スルニ在リ故ニ或ハ原告官トナリ訴訟ヲ提起シ若クハ司法官廳ヲ代表シテ訴訟ヲ辯護シ又必要ナル場合ニ於テハ民事ノ訴訟ニモ干與スルノ職務ヲ有ス之ニ反シテ裁判官即チ判事ハ原被告兩造ノ間ニ立チテ訴訟ヲ裁判スルモノニシテ檢事トハ全ク其權限其性質ヲ異ニスルモノタリ予カ是迄司法權ハ分立セサル可カラズ司法官ハ獨立セシメサルヘカラスト縷々セシモ決シテ檢事ヲ包含セルニアラス司法權ハ即チ裁判權ノコトニシテ司法官トハ裁判官即チ判事ヲ指セルモノナリ檢事ニ至リテハ或ル點ニ付テハ判事ト同様ノ規定ニ從ヒ他ノ行政官吏ヨリ多少其官職上ノ保證ヲ有スルト雖モ判事ノ如ク終身官ニアラス其性質ヨリ云フトキハ純然タル一ノ行政官吏タルニ過キス從ヒテ裁判權

ヲ扱フ裁判所ト檢察權ヲ行フ檢事局トハ全ク別物ニシテ又互ニ獨立スル者ナリ故ニ立法者ハ裁判所及檢事局ト表題シテ以テ一ハ他ノ附屬物ニ非サルコトヲ明ニセリ

### 第一章 總則

總則トシテ立法者ハ本章ノ下ニ於テ裁判所及ヒ檢事局一般ノ組織ヲ規定シ尙ホ司法裁判所相互ノ間ニ於ケル管轄定ノコトヲ規定セリ請フ三類ニ分チテ之ヲ説明セン

#### 第一項 裁判所

裁判所ニハ通常ト特別トノ二アリ通常裁判所トハ普通一般ノ民事及ヒ刑事ヲ裁判シ併セテ司法行政ニ關スル一般ノ事務ヲ擔任スル所ニシテ第一條之ヲ列記ス曰ク

#### 第一 區裁判所

#### 第二 地方裁判所

裁判所構成法



### 第三 控訴院

#### 第四 大審院

是レナリ特別裁判所トハ通常裁判所ノ管轄スヘキ事件ニ付キ特ニ或ル種類ニ限リテ之ヲ擔當スルモノニシテ特別法ノ制定スル所ニ係リ裁判所構成法ノ關スル所ニアラス而シテ現在此種ノ裁判所トシテハ唯軍法會議即チ陸海軍裁判所ノ一アルノミ軍法會議ハ軍人軍屬ニ對スル犯罪ヲ糺明裁判スル所ニシテ軍人軍屬ノ爲メニハ特ニ陸海軍刑法ノ如キアリテ法律ヲ異ニスルノミナラス之ヲ適用スル者モ亦異ニスヘキ必要アルニ由ル第二條末段ニ但シ法律ヲ以テ特別裁判所ノ管轄ニ屬セシメタルモノハ此ノ限ニアラストハ即チ之ヲ云ヘルナリ行政裁判所ノ如キ會計檢査院ノ如キモ亦特別裁判所ト稱シ得ヘキモ本條但書ノ所謂特別裁判所中ニ含蓄セラル、モノニ非ス何トナレハ但書ニ云フ所ノ裁判所トハ通常裁判所ヲ外ニシ民事刑事ヲ裁判スル法衙ヲ指示セルモノナレハ彼ノ行政裁判所ノ如キ民事刑事ヲ裁判セサル裁判所ハ既ニ其基礎即チ根本タル裁判權ノ及フ區域ヲ異ニスル者ナレハ本問題ノ範圍外トス

第三條ニ曰ク地方裁判所、控訴院及ヒ大審院ヲ合議裁判所トシ云々ト所謂合議裁判所トハ合議制ニ從フテ裁判スル裁判所ノ謂ヒナリトス現行裁判所構成法ニ依レハ原則トシテハ總テ合議制ヲ採用セルカ如シト雖モ合議制ハ地方裁判所以上ニ限り區裁判所ハ單獨裁判官ニテ裁判スルコト、定メタリ即チ合議制ト單獨制ト兩制ノ利害得失ヲ斟酌シテ兩ナカラ之ヲ採用セル者ニシテ區裁判所ハ常ニ第一審ノ判決ヲ下スニ過キス又其事件モ輕微ノモノナルカ故ニ一名ノ判事ヲシテ之ヲ擔當セシムルモ更ニ審ナク且ツ裁判費用ト時日トヲ省クノ利益アリ然レトモ重大ナル事件ヲ擔任シ且事實ノ覆審ヲ爲シ又ハ上告ヲ審判スル所ノ地方裁判所控訴院大審院ニハ最モ鄭重ヲ要スルカ故ニ多數ノ判事ヲシテ裁判セシメサルヘカラス是レ此等ノ裁判所ニ合議制ヲ採用スル所以ナリ而シテ合議裁判所ニ於ケル裁判官ノ員數ノ如キモ裁判所ノ階級ニ從ヒテ順次之ヲ遞加セリ(本法第三十二條第四十一條第五十三條)

總テ合議裁判所ニテハ一個若クハ二個以上ノ民事部及ヒ刑事部ノ設置アリテ民事刑事共ニ數名ノ判事ニテ裁判ヲ爲スコト大体ノ組織ナリト雖モ地方裁判

所以上ノ裁判所ハ如何ナル場合ニ於テモ必ス數名ノ判事列席シテ裁判事務ヲ取扱フモノニアラスシテ或ル場合ニ於テハ一名ノ判事ニテ處分スル事アリ例ヘハ受訴裁判所ニ於テ證據調ヲ爲ストキ裁判所ノ部員一名ニ之ヲ命スルカ如キ(民事訴訟法第二百七十三條)刑事ノ豫審ハ一名ノ判事之ヲ擔當スルカ如シ是レ即チ第三條但書ノアル所以ナリ

新ニ裁判所ヲ設置シ又ハ廢止シ若クハ其管轄區域ヲ改メ又ハ之ヲ變更スルハ時勢ノ變遷ニ於テ避ク可カラサルモノアリト雖モ之ヲ以テ行法官ノ爲ス所ニ一任スルカ如キハ人民ニ不便ヲ感セシムルノミナラス大ニ司法權ノ消長ニ關スル者ナリ故ニ之ヲ定ムルハ必ス法律ニ依ラサルヘカラス(裁判所構成法第四條)

然レトモ此ニハ例外アリ裁判所構成法施行條例第三條ニヨレハ區裁判所ノ管轄區域ヲ爲ス町村ノ變更ハ之ヲ區裁判所管轄區域ニ及ホスモノトスト此故ニ若シ行政上ノ便宜ニ依リテ從來甲ノ區裁判所ノ管轄タリシ郡内ノ或ル町村ノ全部若クハ一部カ乙ノ區裁判所ノ管轄タル郡内ニ編入セラル、カ如キ場合ニ

裁判所ノ職員

於テハ特ニ法律ヲ以テ裁判所ノ管轄區域ヲ定ムルコトヲ要セス當然其町村ハ乙區裁判所ノ管轄ニ入ルヘキモノタリ

今ヤ進ンテ裁判所ハ如何ナルモノヨリ組織セラル、ヤ見ルニ通常裁判所ハ左ノ職員ヨリ成ル

第一 判事

判事ハ訴訟事件ヲ裁判スルモノニシテ裁判所ニ在リテ主要ノ地位ヲ占ムルコト固ヨリ論ナシ何トナレハ裁判所ハ訴訟ヲ裁判スルニアルヲ以テ其判定者タル判事ノ主要ナルコト勿論ナリ而シテ判事ノ員數ハ各裁判所ヲ通シテ同一ナルヲ得ス合議裁判所ナルト單獨ナルト將タ亦事務ノ繁簡トニ從ツテ増減ヲ見ルハ當然ノコトナルカ故ニ豫メ法律ヲ以テ一定スルコトヲ得ス故ニ第五條ニ於テ各裁判所ニ相應スル員數ノ判事ヲ置クト一般ノ規定ヲ爲シ其人員ノ増減ハ舉テ之ヲ勅令ニ委カス(明治二十四年七月勅令第三百三十四號 參照)

第二 書記課

裁判所構成法

書記課ハ裁判所書記ヨリ成リ左ノ事務ヲ掌ルモノトス

一、文書ノ往復

二、會計事務

會計事務ニ付テハ司法大臣ハ特ニ專任ノ官吏ヲ置クコトヲ得第八條第

三項

三、訴訟記録ノ調製保存(第八條第一項)

四、特ニ此法律(裁判所構成法)ニ定メタル事務(本法第九十一條第三百十三

條)

五、他ノ法律ニ定メタル事務(即チ刑事訴訟法民事訴訟法等ニ定メタル事

務ヲ云ヘルモノナリ)

第三 執達吏

執達吏ハ裁判ヲ執行シ又ハ訴訟書類ヲ送達スルヲ其職務トス是レ執達吏ノ名ノ依テ來ル所乎而シテ其所掌ノ大要ヲ舉クレハ概テ左ノ如シ

一、裁判所ヨリ發スル文書ヲ送達スルコト

二、裁判所ノ裁判ヲ執行スルコト 差押處分、公賣處分等ヲ云フ

三、本法并ニ他ノ法律ニ定メタル特別事務(本法第九十八條第九十九條執

達吏規則及訴訟法等參照)

然レトモ此ノ執達吏ヲ置クハ區裁判所ニ限ル否ナ執達吏ハ區裁判所ノ支配下ニ屬スルモノトス蓋シ民事裁判ノ執行ハ總テ區裁判所ニ專屬スル事務ニシテ其執行ニ當ルモノハ執達吏トス又文書ノ送達ノ如キモ管ニ區裁判所ノ文書ノミナラス各裁判所ヨリ發スル所ノ文書モ亦總テ執達吏之ヲ送達ス元來是等ノ事務ヲ區裁判所ニ委スル所以ハ區裁判所ハ其當事者ノ居住地ニ接近スルカ故總テ迅速ニ其事務ヲ行フコトヲ得ルカ故ナレハ執達吏トシテ其執行若クハ送達ノ機關タル者ノ區裁判所ニ屬スヘキハ當然ナリ故ニ民事ノ呼出狀其他訴訟書類ノ送達又ハ民事訴訟法第三百八十二條以下ノ規定ニ從ヒ督促手續ニ依ル支拂命令ヲ債務者ニ送達スルカ如キ又ハ同法第四百九十七條以下ニ從ヒ爲スヘキ強制執行ノ處分ノ如キ皆執達吏ノ職掌ナリ刑事ニ付テモ書類ノ送達又罰金料ノ徵收等ノ職務アリ但シ警察官ヲ以テ執行ス

ル場合ハ此ノ限ニアラス(本法第九十八條第二項)

第四、廷丁

廷丁ハ開廷ニ際シテ諸般ノ事務ヲ準備スルノ任ニ當ル(本法第百二條)

以上職員ニ付キ其職員タルニ要スル條件并ニ職員トシテ爲ス可キ本務等ノ詳細ニ至リテハ第二編以下ニ至リテ説明セントス

第二項 檢事局

檢事局

檢事ハ裁判所ノ傍ニ在リテ國家ヲ代表シ公益ヲ保護スルノ任ニ當ルモノナリ故ニ刑事ニ在テハ自ラ原告官トシテ公訴ヲ提起シ刑ノ適用ヲ求メ刑ノ執行ヲ監視シ民事ニ在リテモ公益ノ保護スヘキ必要アル場合ニ於テハ訴訟ニ干與シ又司法事件行政事件ニ付キテハ公益ヲ代表シテ監督事務ヲ行フモノナリ此ヲ以テ檢事ハ裁判所ノ職員ヲ知ルニ足ル是レ本法第六條第一項ニ各裁判所ニ檢事局ヲ附置ストアル所以ナリ請フ此ノ點ニ付キ下ニ細説スル所ヲ見ヨ

(甲) 刑事ニ關スル檢事ノ職務

第一 公訴ヲ提起スルコト

若シ犯罪アリテ起訴スヘキモノト思料スルトキハ國家ガ犯法者ニ對スル制裁タル刑法上ノ處分ヲ受ケザル爲メ裁判所ニ向ツテ公訴ヲ提起セサルヘカラス公訴ノ何物タルコトハ諸君ノ既ニ刑事訴訟法ニ於テ詳悉セラル、所ナレハ茲ニ又贅辯セサルモ一言以テ其何タルヲ明ニセンニ蓋シ公訴權ナルモノハ國家ガ犯法者ニ對スル制裁ヲ要請スルモノニシテ國家ニ犯法ノ制裁アレハ之ヲ訴追スルノ權アル亦明カナリ其國家ノ有スル訴追權ヲ稱シテ公訴權ト云フナリ而シテ其目的タル實ニ罪跡ヲ證明シテ刑ノ適用ヲ求ムルニ在リ而シテ檢事ハ公益ヲ代表スルノ職權アルモノナレハ其職權トシテ國家ヲ代表シ以テ此訴權ヲ行フモノトス(刑事訴訟法第一條)

其一 公訴ノ取扱上必要ナル手續ヲ爲スコト  
即チ犯罪ヲ捜査シ其證據ヲ蒐集スル捜査處分檢證處分ノ如キ又豫審ヲ請求シ豫審ノ決定ニ對シテ意見ヲ付スル等ハ概ネ犯罪ノ証憑ヲ蒐集スルニ過キス恰モ民事ニ於テ原告ガ起訴セントスルニ當リ豫メ其證據ヲ取調フルト毫

モ異ナルコトナシ蓋シ檢事ハ刑事ニ在テハ常ニ原告官ノ位置ニアルモノナ  
レハ此等ノ事務ニ當ルハ其本然ノ職務ナリトス

其二 法律ノ正當ナル適用ヲ請求スルコト

被告人ニ對シテ法律ニ依リテ適當ナリト思料スル刑ノ適用ヲ請求ス是レ公  
訴即チ制裁要請ノ主眼トスル所ナリ

第二 判決ノ適當ニ執行セラル、ヤヲ監視スルコト

若シ夫レ判決ニシテ適當ニ執行セラレザランカ犯罪者ニ對スル制裁タル刑罰  
ハ其目的ヲ達スルコト能ハス故ニ檢事ハ常ニ判決ノ執行ヲ監視セサルヘカラ  
ス今一例ヲ擧クレハ刑ノ執行ニハ必ス檢事ノ立會監視ヲ要シ(刑法附則第一條)  
又隨時監獄ヲ巡視スルカ如キ(監獄則第四條)受刑者カ服役ノ模様改過遷善ノ如  
何ヲ視察シテ特赦ヲ上申シ特赦ノ上申ニ意見ヲ附スルカ如キ此レ即チ判決ノ  
執行ヲ監視スルモノナリ

(乙) 民事ニ關スル檢事ノ職務

檢事カ民事ノ訴訟ニ干與スルニ權利上ノモノト義務上ノモノトアリ義務上ノ干

與トハ檢事ハ必ス其訴訟ニ干與レテ自己ノ意見ヲ陳述セサルヘカラサル場合  
ニシテ權利上ノ干與トハ其之ニ干與スルハ全ク檢事ノ意見内ニ存シ荷モ之ニ  
干與スルノ必要アリト認ムルトキハ其訴訟公開ノ節通知ヲ求メ其公廷ニ己レ  
ノ意見ヲ陳フルヲ得ル場合ナリトス故ニ權利上ノ干與ニ付テハ時ト場合ニ從  
ヒ立會ヲ爲スモノナレハ豫メ如何ナル事件ニ立會フヘキヤハ一定スルコトヲ  
得ス

義務トシテ檢事ノ干與スル場合ハ民事訴訟法第四十二條ニ之ヲ列記セリ即チ  
左ノ如シ

第一 公ノ法人ニ關スル訴訟

第二 婚姻ニ關スル訴訟

第三 親子若クハ養親子ノ分限其他總テ人ノ分限ニ關スル訴訟

第五 無能力者ニ關スル訴訟

第六 養料ニ關スル訴訟

第七 失踪者及ヒ相續人虧缺ノ遺産ニ關スル訴訟

第八 證書ノ偽造若クハ變造ノ訴訟  
第九 再審

何故ニ右等ノ訴訟ニ干與セサルヘカラサルヤト云フニ凡ソ此等ノ訴訟タル皆  
間接若クハ直接ニ公益ニ干係スルモノナルニ由ル公ノ法人ニ關スル訴訟ノ公益  
ニ關スルハ論ナシ婚姻夫婦財産契約人ノ身分ニ關スル法律ハ私法中ニ在リテ  
モ實ニ公共ノ秩序安寧ニ關スルモノタリ無能力者失踪者ハ國家ノ宜シク保護  
スヘキ所タリ偽造ノ訴ノ如キハ事固ヨリ直接ニ刑法ト關係ス即チ國家ノ刑罰  
權ニ關係シ再審ニ至リテハ固ヨリ重大ノ事件ニシテ繫ル所極メテ大ナルモノ  
トス(民事訴訟法第四百六十七條以下)故ニ此等公益ニ關スル訴訟ニ付テハ公益  
ヲ代表スル檢事ハ必ス之ニ干與シテ其意見ヲ開陳セサルヘカラス  
檢事ハ一己人ノ民事訴訟ニ干與スルノミナラス一私人ヨリ司法官廳ニ對シ訴  
訟ヲ起シタルトキハ其官廳ヲ代表シテ民事訴訟ヲ爲スコトアリ是レ公益ノ代  
表者タル職權ヲ有スルカ故ナリ(本法第四百四十二條)

(丙) 司法及行政事項ニ關スル監督事務

檢事ハ司法及行政事項ニ付其職權ニ屬スル監督事務ヲ行フ其監督ノ詳細ハ第  
四編ニ規定セルヲ以テ之ニ讓ル  
檢事カ監督權ノ及フ所ハ自カラ區域アリテ存ス即チ其屬スル裁判所ノ階級ニ  
由リ其以下ノ檢事ヲ監督ス又其配下ニ屬スル司法警察官即チ警察官林務官市  
町村長ヲ監督ス  
以上三種ノ事務ヲ行フニ當リテハ檢事ハ裁判所ニ對シテ獨立シテ之ヲ行フ(第  
六條第二項)即チ毫モ裁判所ノ指揮監督ヲ受ケサルナリ然レトモ獨立トハ裁判  
所ニ對スル獨立ニ止マルモノニシテ政府ニ對シテハ常ニ其命令ニ從ハサルヘ  
カラス

檢事局ノ構成ノ要素ハ

(一) 檢事

(二) 書記課

既ニ檢事ノ何タル事ハ以上ニ詳論シ書記課ノ何物タル事ハ裁判所ノ構成ニ付  
テ説明スル所ヲ參考セヨ且其事務ニ多少ノ差異アルモ書記ノ職分ヲ知ルノ容

易ナルヲ以テ茲ニ復説セス

第三項 管轄裁判所ノ指定

本法第十條ハ管轄裁判所ノ指定ヲ要スル場合並ニ之ヲ指定スヘキ裁判所ノコトヲ規定セリト雖モ同條ハ敢テ悉ク各場合ヲ擧ケテ網羅シタルモノニ非サルカ如シ(此點ニ付テハ民事訴訟法第二十六條乃至第二十八條刑事訴訟法第二十五條乃至第三十三條ヲ參照アラントコトヲ望ム)今法文ノ規定ニ付キ之ヲ見ルニ管轄裁判所ノ指定ヲ要スル場合ハ四アリ

第一 權限アル裁判所ニ於テ法律上ノ理由若クハ特別ノ事情ニ因リテ裁判權ヲ行フコトヲ得サルノミナラス之ニ代ルヘキ裁判所モ亦之ヲ行フコト能ハサル場合(第一項)

權限アル裁判所トハ通常訴訟ニ於テ管轄權ヲ有スル裁判所ト云フ義ニシテ彼ノ被告ノ住所ノ地ノ裁判所ノ如キ是ナリ此裁判所ニ於テ法律上ノ理由ニ依リテ裁判ヲ行フヲ得サルトキトハ即チ裁判官カ忌避(民事訴訟法第三十二條及第三十三條)刑事訴訟法第四十條及同第四十一條若クハ除斥(民

裁判所ノ指定

事訴訟法第三十二條)セラレテ其裁判ニ與カルコトヲ得サル場合ヲ云ヒ特別ノ事情トハ天災又ハ事變ニ由リ交通ヲ遮斷セラレタル如キ場合ニシテ例ヘハ戰爭、大洪水、惡疫流行ノ爲メ交通ヲ遮斷セラレタルカ如キ是ナリ此等ノ理由ニ依リ管轄權限ヲ有スル裁判所裁判權ヲ行フ能ハサルトキハ第三三條ノ規定ニ從テ毎年地方裁判所長ノ前以テ定メタル代理順序ニ從テ之ヲ代理攝行スルモノトス然ルニ其代理スヘキ裁判所若クハ判事ニ上ト同一ニ裁判事務ヲ行フコトヲ得サル原因アル場合ニ於テ管轄ノ指定ヲ上級裁判所ニ申請スヘキモノトス

或ル者ハ此第一項中ニ且ツ云々トアルヲ以テ一箇ノ裁判所カ法律上ノ理由若クハ特別ノ事情ノ爲メニ裁判ヲ行フヲ得サル場合ト又之ニ代ハルヘキ裁判所モ同シク裁判權ヲ行フヲ得サル場合トヲ別視シ此二箇ノ場合ニハ各相獨立シテ管轄裁判所ノ指定ヲ求ムルコトヲ得ト云ヘリ是レ法律解釋ノ當ヲ得タルモノニアラスト信ス何トナレハ前ニ説明セシ如ク一箇ノ裁判所ニハ必ス之ニ代ハルヘキ裁判所若クハ判事ヲ豫定シアリ(第十三條)

テ若シ権限アル裁判所ニ於テ差支アルトキハ豫定シアル裁判所ニ於テ之ヲ代理シ裁判事務ヲ取扱フ可キカ故ニ上級裁判所ヲシテ特ニ管轄裁判所ヲ指定セシムルノ必要ナキコト明ナリトス從テ其管轄ノ指定ヲ申請ス故ニ此第一ノ場合ハ通常管轄權ヲ有スル裁判所カ裁判事務ヲ取扱フコトヲ得サルノミナラス尙且其之ヲ代理スル裁判所モ亦同一ノ理由ヲ以テ其裁判事務ヲ取扱フコトヲ得サルトキナリト解スルヲ以テ正當トス

第二 裁判所管轄區域ノ境界明確ナラサルカ爲メ其權限ニ付疑ヲ生シタル場合

裁判所ノ管轄區域ハ多クハ行政區畫ニ準據シ一定シアリト雖モ行政區畫ヲ變更シ從テ地籍ノ不定不明ナル如キ場合ニハ管轄區域モ亦不明ナルコトナシトセス斯ル場合ニ於テ何レノ裁判所管轄權ヲ有スルヤハ亦上級裁判所ノ指定ヲ以テ之ヲ定メサルヘカラス

管轄區域ノ境界明確ナラサル場合ノミナラス不動産カ數箇ノ裁判所ノ管轄區内ニ散在スル場合モ亦然リトス(民事訴訟法第二十六條)刑事ニ付テハ

如何若シ數箇ノ裁判所ノ管轄區域内ニ於テ犯罪アリタル時ハ最初豫審其他ノ訴訟手續ニ着手シタル裁判所ヲ管轄裁判所トスト雖モ若シ同時ニ豫審ニ着手シタル裁判所二箇以上アル時ハ何レヲ以テ其管轄裁判所ト爲スヘキヤハ亦疑ノ生スル場合ニシテ此場合ニ於テモ又上級裁判所ノ指定ヲ受クヘキモノトス

第三 法律ニ從ヒ又ハ二以上ノ確定判決ニ因リ二以上ノ裁判所裁判權ヲ互有スルトキ

本項ノ場合ハ其管轄權ヲ互有スルニ法律ニ基因スルモノト確定判決ニ由ルモノトアリ

先ツ法律ニ基ク場合ヨリ説明センニ例ヘハ甲乙兩裁判所ノ管轄區域ノ中央ニ於テ犯罪アリタル場合ノ如キハ即法律上二以上ノ裁判所カ裁判權ヲ互有スル場合ナル可シ何トナレハ甲乙ノ裁判所ハ共ニ管轄權ヲ有シ一方ヲ捨テ他ヲ採ルヲ得サレハナリ此場合ニ於テハ其管轄ヲ定ムル爲メニ上級裁判所ノ指定ヲ必要トス



又第一項ノ場合ニ例示セシ數箇ノ裁判所内ニ於テ數罪ヲ犯シタル場合ノ如キモ又本項ノ適例タルヘシ現行法ニ依レハ是初豫審又ハ公判ニ着手シタル裁判所ヲ管轄裁判所ナリトストアレトモ若シ同時ニ豫審又ハ公判ニ着手シタリトセハ尙其指定ヲ要スルモノトス

民事ニ在テモ亦一ノ不動産カ甲乙兩裁判所ノ管轄ニ跨ルトキハ何レヲ管轄裁判所ト爲スヘキヤハ管轄上ノ疑問ナレハ之ヲ指定セシムルノ要アルヘシ

次ニ確定判決ニ依リテ管轄ノ互有即牴觸スル場合ヲ説明センニ例ヘハ甲乙二人間ニ或ル訴訟起リ甲ハ之ヲ東京地方裁判所ニ訴ヘ乙ハ此訴ニ對シ管轄違ノ抗辯ヲ爲シ裁判所ハ乙者ノ申立ノ如ク管轄違ヲ言渡シタリ然ルニ甲ハ之ニ對シテ東京控訴院ニ控訴シタルニ控訴院ハ東京地方裁判所ノ管轄ナリト判決シ其判決ハ確定セリ然ルニ其後甲乙兩人死亡シ甲ノ相續人ハ前判決ノ存スルヲ知ラスシテ乙ノ相續人ヲ相手取り横濱地方裁判所ニ訴ヘ出テタルニ原被告兩造ノ間ニ管轄ノ爭論起リ辯難ノ未横濱地方裁判

所ハ相當管轄ナリトノ言渡ヲ爲シ其判決確定シタリトセヨ此場合ニ於テハ二箇ノ裁判所ノ管轄權ハ確定判決ニ依リテ牴觸スル場合ニシテ又其指定ヲ申請スルノ必要アリトス然レトモ斯ル場合ハ實際ニ稀有ナリト信ス

刑事ニ於テハ斯ル場合少シトセス蓋シ刑事訴訟ノ原告者ハ常ニ檢事ニシテ檢事ハ各裁判所ニ散在スルヲ以テ其職務ハ同一ナリト雖モ其取扱フ人ヲ異ニスルカ故ニ各自ラ管轄ナリト信スル裁判所ニ起訴シ遂ニ確定ノ判決トナリ管轄權ノ牴觸ヲ見ル事多シトス

第四 二以上ノ裁判所權限ヲ有セストノ確定判決ヲ爲シ又ハ權限ヲ有セストノ確定判決ヲ受ケタルモ其裁判所ノ一ニ於テ裁判權ヲ行フヘキ場合はレ前項ト正反對ノ規定ニシテ前項ハ積極的牴觸ナレモ本項ノ場合ハ消極的ニ牴觸スルモノナルカ故ニ前項ニ説明セシ所ヲ反對ニ思考セハ自ラ炳然タラン

以上四箇ノ場合ニ於テ管轄裁判所ノ指定ヲ爲スハ其關係スル裁判所ヲ併セテ管轄スル直近上級ノ裁判所ナリトス故ニ麴町區裁判所ト芝區裁判所ト牴觸ノ

場合ニ於テハ東京地方裁判所ハ此兩區裁判所ヲ管轄スル直近上級ノ裁判所ナ  
 レトモ芝區裁判所ト横濱區裁判所ト其權限ノ牴觸スル場合ニハ其管轄指定ヲ  
 爲ス裁判所ハ東京控訴院ナリトス此場合ニ於テ東京地方裁判所ハ芝區裁判所  
 ヲ管轄スト雖モ横濱區裁判所ハ横濱地方裁判所ノ管轄スル所ニシテ東京地方  
 裁判所ノ管轄ニアラス又芝區裁判所ハ横濱地方裁判所ノ管轄ニアサルヲ以  
 テ此場合ニ於テ東京控訴院之ヲ管轄スルモノトス  
 予ハ以上ヲ以テ本編第一章裁判所及檢事局並ニ裁判所ノ一般ノ組織管轄指定  
 ヲ説明シ了レリ

我立法法者ハ本編第二章以下第五章ニ於テ各種ノ裁判所ニ付キ其特別ノ組織  
 ト各種ノ裁判所ノ權限トヲ規定セリ各種ノ裁判所ノ特別組織ニ付テハ法文明  
 瞭ニシテ別ニ之ヲ説明スルノ必要ナシト雖モ其特別ノ權限ニ至リテハ大ニ研  
 究スルノ價值アルモノナリ

諸君ハ既ニ民刑訴訟法ニ付キ研究セラレタルナランカ裁判所ノ管轄ニハ土地  
 ニ依ルモノト事物ニ依ルモノトノ二種アリ而シテ其土地ニ關スル管轄ノ事ハ

各訴訟法ニ之ヲ規定シ事物ノ管轄ノミ本法之ヲ規定セリ何故ニ斯ク之ヲ規定  
 スル法律ヲ異ニスルカ抑モ事物ノ管轄ハ訴訟事件ノ性質若クハ其價額ニ依リ  
 テ異ナル可キ者ニシテ事物ノ價額及ヒ其性質ノ異同アルヨリ之ヲ取扱フ手續ニ  
 モ亦輕重寬嚴ノ異同ナキヲ得ス故ニ事物ノ管轄ハ裁判所ニ下級ト上級トノ區  
 別ヲ生シタル所以ノ根本ニシテ主トシテ裁判所ノ構成ニ關シ其權限ノ廣狹ヲ  
 定ムルモノナルカ故ニ裁判所ノ權限ヲ規定スル本法ニ之ヲ定メタルモノナリ  
 事物ノ管轄既ニ定マリ地方裁判所又ハ區裁判所ノ權限ニ屬スル明カナリトス  
 ルモ果シテ何レノ區裁判所又ハ何レノ地方裁判所之ヲ管轄スルカ即チ同級ノ  
 裁判所中何レノ地方裁判所ニ屬スルカ之ヲ被告人ノ住所ニ訴フヘキヤ將タ又  
 物件ノ所在地ナルヤハ土地ノ管轄ニ屬シ毫モ裁判所ノ構成ニ關スル問題ニア  
 ラス寧ロ訴訟手續ノ一部ト見ル可キモノナルカ故ニ之ヲ其各訴訟法ニ規定セ  
 ル所以ナリ

## 第二章 區裁判所

本章ヲ左ノ二節ニ分ツ

第一節 區裁判所ノ特別組織

第二節 區裁判所ノ權限

### 第一節 區裁判所ノ特別組織

區裁判所  
特別組織

區裁判所ノ特別組織ハ構成法第十一條以下ノ規定スル所ニシテ即チ

第十一條 區裁判所ノ裁判權ハ單獨判事之ヲ行フ

判事二人以上ヲ置キタル區裁判所ニ於テハ司法大臣ノ定メタル通則ニ從

ヒ其裁判事務ヲ各判事ニ分配ス

此事務分配ハ毎年地方裁判所長前以テ之ヲ定ム

區裁判所判事ノ取扱ヒシ事ハ裁判事務分配上其ノ事他ノ判事ニ屬シタリ

トノ事實ノミニ因リ其効力ヲ失フコトナシ

判事二人以上ヲ置キタル區裁判所ニ於テハ司法大臣ハ其一人ヲ監督判事

トシ之ニ其ノ行政事務ヲ委任ス

第十二條 事務分配一タヒ定リタルトキハ司法年度中之ヲ變更セス但シ一

人ノ判事ノ分擔多キニ過キ又ハ判事轉退シ又ハ疾病其他ノ事故ニ因リ久

ク欠勤スル者アル等引續キ差支ヲ生シタル場合ハ此限ニ在ラス

第十三條 區裁判所ノ判事差支アルトキハ毎年地方裁判所長ノ前以テ定メ

タル順序ニ從ヒ互ニ相代理ス但シ監督判事ノ職務ハ其裁判所ノ判事官等

ノ順序ニ從ヒ之ヲ代理ス

一ノ區裁判所ニ於テ法律上ノ理由若クハ特別ノ事情ニ因リ事務ヲ取扱フ

コトヲ得サルトキハ之ニ代ルヘキ他ノ區裁判所ハ前項ニ同シク毎年以前

テ之ヲ定ム

以上ハ即チ區裁判所ニ特別ナル組織ニシテ法條明晰特ニ之カ説明ヲ爲スノ必

要ナシ

### 第二節 區裁判所ノ權限

區裁判所ノ權限ハ民事ニ關スル裁判權刑事ニ關スル裁判權及ヒ非訟事件ニ關

裁判所構成法

スルモノアルヲ以テ左ニ順次ニ説明セン

第一 民事ニ關スル裁判權第十四條

區裁判所カ民事事件ノ裁判權ハ其訴訟物ノ價額ニ依リテ定マルモノト訴訟價額ニ依ラスシテ其訴訟事件ノ性質ヨリ來ルモノトアリ先其價額ニ依テ管轄權ノ定マル場合ヨリ説明センニ

甲 訴訟物ノ價額ニ依テ管轄ノ定マル場合

區裁判所ハ百圓ヲ超過セサル金額ニ關スル請求又ハ價額百圓ヲ超過セサル物ニ關スル請求ニ付キ管轄權ヲ有ス例ヘハ百圓又ハ其以下ノ價額ニ於ケル管金催促預ケ金取戻又ハ百圓未滿ノ動産又ハ不動産ニ關スル請求等ノ如シ然レトモ訴訟ナルモノハ必スシモ常ニ原告ヨリ請求シ被告之ニ答辯スルト云フ單純ナルモノニ非ス時トシテハ被告人ヨリ反訴即チ反對給付ヲ主張スルコトアリ例ヘハ原告カ被告ニ對シ貸金八十圓ノ辨濟ヲ請求シタルニ被告ハ又其答辯ト同時ニ原告ニ對シ損害要償トシテ金八十圓ノ辨償ヲ請求シタルトキノ如キ是ナリ而シテ反訴ハ原告ノ請求ニ對スル一ノ攻撃防禦ノ方法トシテ提起ス

ルモノナルカ故ニ本訴ニ合算スヘキモノニアラス若シ之ヲ合算セシカ八十圓ノ訴訟モ遂ニ區裁判所ニ提起スルヲ得サルニ至ル茲ニ至テ攻撃防禦ノ方法タル反訴ノ性質ニ牴觸スルモノト云ハサルヲ得ス故ヲ以テ民事訴訟法第四條第二項ニ於テ本訴ト反訴ノ訴訟物ノ價額ハ之ヲ合算セスト規定セ)

第一 元金ト利子ト同時ニ請求スルトキハ之ヲ合算スヘキヤ例ヘハ元金

八十圓ニシテ利息二十五圓ヲ請求スルトキニ於テハ之ヲ合算シ百五圓トシテ請求スヘキヤ又利息ハ之ヲ合算スルヲ要セサルカ此場合ニ於テハ主タル請求即チ元金八十圓ヲ以テ訴訟價額トシ果實即チ之ヨリ生スル利子ヲ合算セス(民事訴訟法第三條第二項)

第二 債權ノ擔保又ハ債權ノ擔保ヲ爲ス質若クハ抵當等カ訴訟物ナルトキハ其債權ノ額ニ依ル可キヲ本則トスルモ若シ其質若クハ抵當物ノ價額之ヨリ少キトキハ其額ニ依ル(同法第五條第一號)

第三 地役(民法財産編第二百十四條以下)カ訴訟物ナルトキハ要役地ノ地役

ニ依リ得ル所ノ價額ニ依ル但シ地役ノ爲メ承役地ノ價額ノ減シタル額カ要役地ノ地役ニ依リ得ル所ノ價額ヨリ多キモハ其減額ニ依ル(同條第二號)

第四 賃貸借(民法財産編第百十三條以下)永貸借(同上第百五十五條以下)ノ契約ノ有無又ハ其時期カ訴訟物ナルトキハ爭アル時期ニ當ル借賃ノ額ニ依ル但一ケ年ノ借賃ノ二十倍ノ價カ右ノ額ヨリ寡ナキトキハ其二十倍ノ價ニ依ル(同條第三號)

第五 定時ノ供給(民法財産取得編第百六十四條以下)又ハ收益ニ付テノ權利(民法財産編第四十四條以下)カ訴訟物ナルトキハ一ケ年收入ノ二十倍ノ額ニ依ル但收入權ノ期限定マリタルモノニ付テハ其將來ノ收入ノ總額カ二十倍ノ額ヨリ寡キトキハ其額ニ依ル(同條第四號)

是レ皆其訴訟物ノ價額ノ算定ヲ要スル場合ニシテ其算定ニ依リテ百圓以上ノ訴訟ナルトキハ區裁判所ノ管轄ニ屬セスシテ合議體ノ第一審即チ地方裁判所ニ屬スヘキモノトス故ニ此算定ノ方法ハ地方裁判所ト區裁判所トニ共通ノモノナリ

然ラハ其價額ハ何時ニ之ヲ算定スヘキモノナリヤ債權ニシテ金錢ノ返還ヲ受クルニ付テハ自ラ一定ノ利率アルヲ以テ其算定ノ時期如何ニ依リ訴訟價額ニ左ノミ變動ナシ然レトモ若シ其請求シ得ントスル所ノモノ、價額カ常ニ一定不變ニアラスシテ時々商價變遷ニ伴フトセハ其價額算定ノ時期如何ハ大ニ權利者ノ利不利ノ別ル、所タリ我訴訟法ニ於テハ價額ノ算定ハ起訴ノ日時ニ於テスヘキモノト定メタリ(民事訴訟法第三條第一項)是レ一ノ便法ニシテ若シ之ヲ其權利創生ノ時ニ於ケル價額ニ依ルヘントセハ其煩雜云ハン方ナク往々ニシテ其價額ヲ精査シ得サルノ不都合アルニ由ル

(乙) 價額ノ多寡ニ依ラサル訴訟即チ專屬的管轄  
法律ハ價額ノ多寡ニ依ラス或ル五種ノ訴訟ヲ區裁判所ノ管轄ニ屬セシム他ナシ其事件ノ性質或ハ急速ノ處分ヲ要スルアリ或ハ輕微ニシテ鄭重ナル訴訟手續ヲ要セサルアリ若クハ其訴訟ニ付キ土地ノ慣習狀況ヲ察知スルノ必要アル等ヨリシテ區裁判所ヲ以テ之ヲ管轄セシムルノ地方裁判所ノ鄭重ナル訴訟手續ヨリ大ニ勝ルモノアレハナリ五種ノ訴訟トハ

一 建物ノ受取、明渡、使用、占據、若クハ修繕ニ關スル訴訟又ハ賃貸人ト賃借人トノ間ニ起リタル訴訟

此等ノ訴訟ハ毫モ基本權ヲ爭フモノニアラスシテ輕微ノコトニ屬スルノミナラス殊ニ急速ノ裁決ヲ要スルモノトス

二 不動産ノ經界ノミニ關スル訴訟

是レ亦本權ニ毫末ノ關係ナク只其經界ヲ爭フモノニシテ之ヲ區裁判所ニ管轄セシムルハ其土地ノ狀況慣習ニ敏キヲ以テナリ

三 占有ノミニ關スル訴訟

是亦前者ト同一ノ趣旨ニ出ルモノトス(財産編第九十九條以下)

四 雇主ト雇人トノ間ニ雇期限一年以下ノ契約ニ關リ起リタル訴訟

雇期限一年以下ノ訴訟ハ輕微ニシテ地方裁判所ヲ煩スノ必要ナシ

五 賄料又ハ宿料又ハ旅人ノ運送料又ハ之ニ伴フ手荷物ノ運送料旅店若クハ飲食店ノ主人又ハ運送人ニ旅人ヨリ保護ノ爲メ預ケタル手荷物金錢又

ハ有價物ニ付旅人ト旅店若クハ飲食店ノ主人トノ間ニ又ハ旅人ト水陸運

送人トノ間ニ起リタル訴訟

是等ノ訴訟ハ旅人ヲ相手トスル訴訟ニシテ事極メテ急速ヲ要シ且輕微ノ事件ナルヲ以テ之ヲ區裁判所ノ管轄ニ屬セシム

第二 刑事ニ關スル裁判權

刑事ニ關スル裁判權

刑事ニ關シテハ區裁判所ハ第一違警罪第二或ル定限迄ノ輕罪事件ヲ管轄ス構成法實施前ニ在テハ治安裁判所(當今ノ區裁判所)ハ單ニ違警罪ニ付キ管轄權ヲ有シタリシカ斯克テハ地方裁判所ハ輕微ノ輕罪事件ヲモ管轄セサルヘカラサルノ手數煩雜ナルノミナラス當事者ニ取テモ費用時日ノ損失大ナルモノアルヲ以テ之ニ定限ヲ置キ輕罪事件ノ一部ヲ區裁判所ニ屬セシム加之舊時ニ在テハ重罪事件ハ各控訴院ノ管轄スル所ナリシカ之ヲ控訴院ノ管轄ナリトスルトキハ徒ラニ被告人ヲ留置スルノ不經濟不得策ナルヲ以テ新法ハ之ヲ地方裁判所ノ常屬事件トシ從テ地方裁判所ノ管轄事件多キヲ致セシヲ以テ其管轄ノ一半ヲ新法ハ區裁判所ニ委子タリ而シテ其管轄スル刑事事件ハ左ノ如シ

第一 違警罪 警警罪ノ處斷法ニ付テハ特例ノ存スル者アリテ即チ明治十

八年第三十一號布告違警罪即決例ナル者アリテ違警罪ニ付テハ先ツ警察署ニ於テ之ヲ處分セシメ而シテ被告其處分ヲ不當トシ正式ノ裁判ヲ申請セシトキ始メテ治安裁判所之ヲ裁判シタリ此特別規則ハ新法施行條例第九條ヲ以テ尙之ヲ適用シ得ル者トセリ是レ畢竟違警罪ナルモノハ刑罰ヲ科ス可キ犯罪ト云ハンヨリハ寧ロ警察取締上ノ非行ト見ル可キモノナルヲ以テ之ヲ審判々決ノ正式ニ從ハシムルノ利益ナク亦之ヲ一々裁判官ノ前ニ訴フルトセハ判事ノ數ヲ増加シ經費ヲ加重スルノ不利益アレハナリ

第二 輕罪 區裁判所ノ管轄スル輕罪事件ハ左ノ如シ

(甲) 本刑五十圓以下ノ罰金ヲ付加シ若クハ付加セサル二月以下ノ禁錮又ハ單ニ百圓以下ノ罰金ニ該ル輕罪  
即チ之ヲ解拆スレハ

い 本刑五十圓以下ノ罰金ヲ付加スル二月以下ノ禁錮ニ該ル輕罪

例ハハ刑法第二百三十一條同法第二百四十三條同第二百四十九條ニ該當スル事件ノ如キ是ナリ

ろ 罰金ナキ本刑二月以下ノ禁錮ニ該ルモノ

例ハハ刑法第三百一條ノ如シ

は 本刑百圓以下ノ罰金ニ該ルモノ

刑法第三百三十六條末段同第三百三十七條末段同第五百十條及ヒ同第六十條ノ如キ是ナリ

(乙) 刑法第二編第一章ヲ除キ其他ノ輕罪ニシテ本刑二百圓以下ノ罰金ヲ付加シ若クハ付加セサル二年以下ノ禁錮又ハ單ニ三百圓以下ノ罰金ニ該リ其情前ニ説明ヒシ甲號ノ刑ヨリ更ニ重キ刑ニ處スルコトヲ要セスト認メ地方裁判所若クハ其支部ノ檢事局ヨリ區裁判所ニ移付シタルモノ

本項ノ場合ハ本刑ノ範圍廣ク重キ點迄達スルモ其最低點ハ甲種ノ規定ニ該當スルカ又之ニ該當スルニアラサルモ宥恕若クハ酌量ヲ以テ減輕セラレ從テ甲種ノ刑期ノ範圍ニ入ルヘキモノトシテ地方裁判所又ハ其支部ノ檢事局ヨリ移送セラレタルモノナルトキハ區裁判所ハ之ヲ管轄セサルヘ

カラス而シテ此場合ヲ分拆スレハ即チ

い 本刑二百圓以下ノ罰金ヲ付加スル二年以下ノ禁錮ニ該ルモノニシテ減等セラレテ區裁判所ノ管轄スヘキ輕罪事件ノ定限内ニ入ルモノ

刑法第四百十一條同法第五百十一條及ヒ同法第五百十二條ノ犯罪ニ對シ宥恕又ハ酌量ヒラルヘキ情狀アルモノ、如シ

ろ 罰金ヲ付加セサル二年以下ノ禁錮ニ該ルモノニシテ前項ト同一ノ情狀アルモノ

刑法第四百十二條第一項同第五百十五條及ヒ同第七十一條ニ於ケル犯罪ニシテ減等ノ情狀アルモノ

は 三百圓以下ノ罰金ニ當ルヘキモノニシテ又減等セララルヘキモノ

刑法第二百五十一條及ヒ第三百十七條ノ犯罪ニシテ減等セララルヘキモノ

法律ニ區裁判所ニ屬スヘキ事件ニシテ刑法第二編第一章即チ皇室ニ對ス

ル犯罪ヲ除ケリ是レ實ニ例外ト云フヘシ夫レ皇室ニ對スルノ犯罪タル我國体上輕々ニ看過スヘカラサルモノアルヲ以テ之ヲ審判スルニハ尤モ鄭重ニ其犯狀ニ付テハ最モ詳密確瞭ニ審案シ苟モ不敬ノ些々タルモノモ之ヲ假サス嚴重ニ之ヲ處罰スルノ必要アルヲ以テ之ヲ區裁判所ノ簡易ナル訴訟手續ノ下ニ裁判セシメサルナリ

此乙種ノ刑罰ニ該當スヘキ犯罪ナリト思量シ地方裁判所若クハ其支部ノ檢事局ヨリ事件ヲ區裁判所ニ移付シタルトキハ區裁判所ハ一應事件ヲ受理スヘキモノトス然レトモ裁判官ハ檢事ノ意見ニ左右セラル、モノニアラサルヲ以テ檢事ハ酌量スヘキ情狀アリトスルモ判事ハ其減等ノ情狀ナシトスルコトアルヘク又犯罪ノ見解ヲ誤リ區裁判所ノ管轄外ノ事件トスル事アルヘシ(例ハ屋外竊盜トシテ移付セラレタル事件ヲ屋内即チ通常ノ盜罪トスルノ類)又事實審理ノ末他ノ犯罪ヲ發見スルコトアル可シ或ハ却テ加重ノ情狀ヲ發見スル事アルヘシ斯ル場合ニ於テ其事件區裁判所ノ管轄ニアラスト思料スルトキハ管轄違ノ判決ヲ爲シ事件ヲ管轄地方裁判所ニ移送ス



右ノ事件カ再ヒ其地方裁判所ニ起訴セラレタルトキハ地方裁判所判事ハ其事  
 件區裁判所ノ管轄事件ナルコトヲ發見スルモ直ニ之ヲ判決ス地方裁判所ハ區  
 裁判所ノ管轄事件ニ付テハ審理判決スルノ能力アレハナリ  
 然レモ此乙種ノ犯罪ニ付キ檢事ノ思量ニ依リ區裁判所ニ移送セシムルノ制度  
 ハ果シテ實際ニ其弊害ナキカ一タヒ區裁判所ニ移付セラレテ直ニ事件落着ス  
 レハ可ナルモ裁判官ノ認定ニ依リテ更ニ又地方裁判所ニ移付セラレサルヲ得ス  
 トセハ被告人ハ其管轄ノ定マラサル間空シク拘留ニ日子ヲ費サ、ルヲ得ス但  
 シ拘留日數永キニ渉ルモ之ヲ刑期ニ算入スレハ未タ其不利益タル甚シカラスト  
 雖モ現行法ニ於テハ拘留日數ヲ刑期ニ算入セス加之區裁判所ハ各地ニ散在シ  
 地方裁判所ト相距ルノ遠キ實ニ數十里ニ及フモノアリ被告人ニ不利ナル此ノ  
 如キハナシ而シテ檢事ノ認定ノ如何ニ依リテ斯ノ如ク少ナカラサル不利益ヲ  
 受クルニ至テハ未タ俄ニ贊同ヲ表スルヲ得サル所トス此制度ハ獨乙ニ起レリ  
 然レトモ獨法ノ下ニ於テハ未タ曾テ如此弊害ノ醸生セルコトヲ聞カス、ソハ獨  
 法ニ依レハ檢事一タヒ事件ヲ區裁判所ニ移付スルヤ後ニ其管轄ノ定限以外ナ

非訟事件  
 ニ關スル  
 權限

ルコトアルモ或ル特例ノ場合ヲ除クノ外其事件ニ付テハ區裁判所ニ於テ之ヲ  
 審理判決スルニ由ル嚴正ナル理論ヨリセハ獨法ノ制未タ裁判權ノ行用ニ誤ル  
 所ナシトセス然レトモ被告人ニ利益ニシテ又國家經濟ニ益スル所アルヲ以テ  
 之ヲ一ノ便法トシテ解スルハ尙解シ得ラレサルニアラス然レトモ我構成法ノ  
 規定ニ至リテハ然ラス恰モ一班ヲ採テ全豹ニ及ホサ、ルモノニシテ彼レカ例  
 外トスル所却テ我ノ本則トナリ裁判權ノ消長ト相容レサルニ至レルハ頗ル遺  
 憾トスル所ナリ

以上ノ訴訟ニ付テハ區裁判所ハ單ニ第一審即チ始審ノ裁判ヲ下シ終審裁判ヲ  
 爲ス權ナシ

第三 非訟事件ニ關スル權限

裁判所ハ私權ノ保護者ナリトハ古來法律上ノ格言トシテ吾人ノ常ニ耳ニスル  
 所ナリ此故ニ裁判所ハ單ニ訴訟ニ對シテ判決スルニ止マラス或ル場合ニ於テ  
 ハ私權行使ニ付キ監督シ及ヒ私人ノ利益ヲ保護スルモノトス  
 各人ノ權利關係明瞭ナラサレハ常ニ其間紛議ノ絶ユルコトナケン之ヲ癒止セ

ンニハ後日ニ備フヘキ確實ノ證據ヲ整備スルノ要アリ而シテ其私人間ノ權利關係ニ付キ利益ノ存否ヲ詳悉スルハ法律ニ精ハシキモノニ如クハナシ故ニ裁判所ハ當事者ノ行爲ニ付キ其權利ヲ明確ニスル爲メ證據ヲ保全シ又私益ヲ保護スル爲メニハ財産ノ自由處分ヲ監視スルノ必要アリ

以上ハ裁判所カ訴ニアラサル事件新法ニ所謂非訟事件ヲ裁判所カ擔當スルニ對テノ理由ニシテ而シテ之ヲ區裁判所ニ專掌セシムルニハ尙他ニ特別ノ理由ノ存スルモノアリ(一)區裁判所ハ人民ニ直接ニ關係アルコト(二)區裁判所ハ各地ニ散在シ能ク人民ノ時々ノ需用ニ應スルヲ得ルコト(三)單獨制ナルカ故ニ其手數費用ヲ省略スルノ利便アルコト是レナリ

區裁判所ノ權限ニ屬スル非訟事件ノ種類ハ左ノ如シ

- 第一 未成年者、瘋癲者、白痴者、失踪者、其他法律又ハ判決ニ依リテ禁治産ヲ受ケタル者ノ後見人又ハ管財人ヲ監督スルコト
- 一、未成年者 ハ私權行使ノ能力ナキ幼年者ニシテ我民法人事編ハ成年ノ期ヲ滿二十年トセリ故ニ其年限ニ滿タサルモノハ假令事實上私權行

使ニ付キ充分ナル能力ヲ有シ成年者ニ異ナルコトナキモ一般ニ幼者ハ其利益ニ疎キ者ナルカ故ニ法律ハ之ヲ親權ノ下ニ服從セシメ若クハ後見ニ依リ其利益ノ一般私人ニ於ケル平等ノ關係ヲ保タシム(人事編第四百九十九條以下)然レトモ或ル特別ノ場合ニハ其私權ノ行使ヲ許ス(アリ)

二、瘋癲者 我人事編第二百二十二條ニ所謂心神喪失ノ常況ニ在ル者ニシテ其財産ノ管理ニ付キ一般能力者ト異ナリテ働モスレハ自他ノ利害ヲ忘レ其不利益ヲ顧ミサルヲ以テ之ヲ民事上ノ禁治産者トシテ其財産ノ管理及ヒ處分ヲ禁セリ是レ精神病ノ原因ニヨリ私權ノ行使ヲ禁スル一ノ處分ニ基クモノトス

三、白痴者 是レ亦心神ノ耗弱若クハ其發達ノ充分ナラサルモノニシテ自己ノ利益損失ニ付キ辯別スル所ナシ之ニ財産ノ處分管理ヲ委スルハ國家經濟ニ大ニ影響スルヲ以テ之ヲ民事上ノ禁治産者ニ准シテ保佐ニ付ス(人事編第二百三十二條及ヒ同第二百三十三條)

四、失踪者 トハ其住所及ヒ居所ヨリ亡失シ又ハ音信絶ヘテ生死分明ナラ

サル人ヲ云フ此失踪者ニ付テモ又其財産アリ財産アルニ之ヲ改良保護セサルハ國家ノ經濟上少カラサル損失ヲ受クルヲ以テ失踪ノ推定ヲ受ケタルモノアルハ區裁判所ハ之ニ代理者ヲ命シ之ヲ管理保護セシム  
(人事編第二百六十九條第二百七十一條)

五、判決又ハ法律ニ依リテ治産ノ禁ヲ受ケタル者 法律ニ依テ治産ノ禁ヲ受ケタル者トハ前第二第三ノ場合ニ説明セル所ニシテ而シテ其判決ニ依ルモノトハ刑法第四十三條ニ所謂重罪ノ刑ニ處セラレシ者ハ終身治産ノ禁ヲ受ケ又輕罪ノ刑ニ處セラレシ者ハ刑期中治産ヲ禁セラル、モノトス是等ノ者ニ對シ其財産ヲ自ラ治ムル事ヲ禁スルハ若シ此等ノ者ヲシテ自由ニ財産ヲ處理セシメハ刑罰ノ痛苦タル實ヲ得サルノミナラス或ハ略ハスニ利ヲ以テシテ刑罰ヲ逃避スルコトナキヲ期セス國家刑罰權ヲ完フスル能ハサルニ至レハナリ

### 第二 不動産又ハ船舶ニ關スル權利關係ヲ登記スル事

不動産又ハ船舶ニ關スル權利ノ存否變更ハ第三者ノ權利關係ヲ創始スルニ付

キ重要ナル關係ヲ有スルヲ以テ之ヲ登記スルノ必要アリ蓋シ登記ハ公示ノ方法ニシテ之ニ依テ何人モ其權利關係ノ狀況ヲ知ルノ利益ヲ與フルニアリ(登記法及ヒ財産編第三百四十八條以下及ヒ商法第二編海商法參照)

第三 商業登記及特許局ニ登録シタル特許意匠及ヒ商標ノ登記ヲ爲スコト商業ノ登記トハ我商法第十一條第二項ニ規定スル所ニシテ即未成年者カ商ヲ爲スニ當リテハ商業上獨立シテ權利ヲ得義務ヲ負フモノナレハ之ト取引スル第三者ニ獨立營業ヲ爲スノ能力アルヤ否ヲ知ラシムルハ第三者ヲシテ安全ニ取引シ得ルノ安心ヲ買ヒ又未成年者ノ爲メニ取引シタル第三者ノ損害ヲ免ル、事ヲ得ルノ利益アリ其他同法第十四條第一項同第十八條第一項同第二十二條ノ如キ皆商取引ヲ爲ス者ノ爲メニ其地位身分及ヒ其商取引ヲ爲スノ能力及ヒ計算上ニ不整理ナキコトヲ知ラシムル目的ニシテ皆一ノ公示方法ニ過キス故ニ一タヒ此登記ヲ終ルヤ第三者ハ其登記ヲ知ラサルコトヲ口實トシテ其責ヲ免ル、コトヲ得ス又之ヲ知ラサリシコトヲ主張セントスル者ハ自己ノ過失ニアラスシテ他ノ事柄ニ基クコトヲ証明セサルヘカラス

特許意匠ノ登記トハ例ヘハ特許局ニ於テ意匠ニ關スル登録ヲ受ケタル者ニシテ其寫書ヲ區裁判所ニ出サシメ更ニ之カ登記ヲ爲シ他日他人ニ賣買又ハ讓與スルニ當リ争訟ヲ防クカ爲メ其權利ノ所在ヲ明確ニスルニアリ

### 第三章 地方裁判所

#### 第一 地方裁判所ノ特別組織

地方裁判所ノ特別組織

地方裁判所ノ特別組織ハ本法第十九條ニ規定セリ曰ク

地方裁判所ヲ第一審ノ合議裁判所トス

各地方裁判所ニ一若クハ二以上ノ民事部及ヒ刑事部ヲ置ク

故ニ地方裁判所ハ區裁判所ノ如ク單獨制即チ一人ノ判事ヲ以テ裁判セスシテ其裁判ニ與リ又ハ之ヲ判決スルニハ常ニ三人ノ評議決定ヲ以テスヘキモノナリトス而シテ其三人ノ判事ヲ以テ組織シタル一團ヲ稱シテ部ト云フ

地方裁判所ハ本法ニ所謂通常裁判所ナルモノニシテ而シテ民事刑事ヲ裁判スルモノナルコトハ前既ニ説明セシ所ナリ故ニ地方裁判所ニ於テハ其ノ民事及

ヒ刑事ヲ裁判スルニ民事部及ヒ刑事部ヲ置クモノトス

而シテ地方裁判所ニ於テハ其事務取扱ニ付キ長官ヲシテ之ヲ指揮セシム恰モ區裁判所ニ監督判事ヲ置キ其事務取扱ヲ監視スルニ異ナラス其之カ事務處辨ニ付キ監督ヲ爲シ及ヒ其廳ノ行政事務ヲ取扱フモノヲ置ク所以ハ一ニ司法事務ノ運轉ヲ能クシ又廳中一般ノ支配ヲ統一ニ出テシメ諸般ノ整理ヲ爲サシメントスルニアリ而シテ其任ニ當ルハ何人ナルカハ第二十條ニ規定セリ

各地方裁判所ニ地方裁判所長ヲ置ク

地方裁判所長ハ裁判所ノ一般ノ事務ヲ指揮シ其行政事務ヲ監督ス

地方裁判所ノ各部ニ部長ヲ置ク部長ハ部ノ事務ヲ監督シ其分配ヲ定ム

ト是ナリ

而シテ地方裁判所ハ他ノ裁判所ト異ナリ一ノ特別ナル手續ヲ要スルモノアリ即チ豫審ノ制度是ナリ

蓋シ豫審ハ稍ヤ複雑難澁ノ事件ニ付キ最先ニ犯罪ノ證據ヲ蒐集スルノ處分ニシテ他ノ裁判所ニ此必要ナキハ地方裁判所ハ或ル特別ナル輕微ノ事件ニ對ス

ルモノヲ除クノ外第一審トシテ先其裁判ヲ下ス所ナリ而シテ犯罪ノ證據タル  
 ヤ一度ヒ蒐集シ得ハ容易ニ湮滅ニ歸スルコトナケレトモ未タ其犯狀ノ知レサ  
 ル間ニ於テハ被告タル者常ニ之ヲ隱匿消滅シテ其罪跡ヲ蔽ハントスルガ故ニ  
 其犯罪アルヲ知ルヤ直ニ之ニ着手セサレハ終ニ其犯跡ノ證スヘカラサルニ至  
 ルモノアリ彼レ第二審ノ裁判所ハ第一審ニ於テ得タル證據ヲ採テ之ヲ糺明ス  
 ルモノナルカ故ニ證據ヲ蒐集スルノ必要ハ既ニ去レリ只其要アルハ第一審ト  
 ス然レトモ豫審處分タル人ノ罪證ヲ蒐集シ之ヲ幽閉スルト否トノ別ル、所ナ  
 レハ事ノ至重大ナル言ヲ埃タス其處分ノ適否ハ實ニ無辜ノ良民ヲ縲絏ノ裡  
 ニ泣カシムルノ不正ヲ生シ又兇漢惡徒ヲシテ白日ニ横行セシムルノ危險アリ  
 故ニ豫審ハ丁重ニシテ深切ナラサルヘカラサルハ勿論又之ニ機敏斟酌ヲ要ス  
 ルコト實ニ大ナルカ故ニ之ヲ多數判事ノ合議評決ニ委スルトセハ迅速果斷ノ  
 處置ハ到底得テ望ムヘカラス是レ構成法カ其第二十一條ニ於テ豫審ヲ以テ一  
 人ノ判事ノ專任トナセル所以ニシテ同條ニ曰ク

司法大臣ハ毎年各地方裁判所ノ判事一人若ハ二人以上ニ其裁判所ノ裁

地方裁判  
所ノ裁判  
權

權ニ屬スル刑事ノ豫審ヲ爲スコトヲ命ス  
 豫審ハ常ニ地方裁判所ニノミ存シ區裁判所ニ此設ケナキハ區裁判所ノ事件タ  
 ル犯罪ノ性質單純ニシテ事實明瞭ナルヲ以テ別ニ豫審ノ制ヲ設ケテ其證據ヲ  
 蒐集スルノ必要ナキニ由ル  
 第二 地方裁判所ノ裁判權  
 地方裁判所ハ一般ノ裁判所ナリ又普通ノ裁判所ナリトス詳言スレハ法律カ他  
 ノ裁判所ニ屬スルモノタルコトヲ定メタル外一切ノ民事刑事ニ付キ第一審ノ  
 裁判權ヲ有スルモノナリ

民事ニ關  
スル裁判  
權

第一 民事ニ關スル裁判權  
 地方裁判所ハ左ノ二項ノ特別ナル場合ヲ除キ第一審トシテ總テノ事件ヲ管轄  
 ス(第二十六條第一號)  
 (イ) 區裁判所ノ權限ニ屬スル事件  
 (ロ) 本法第三十八條ノ規定ニシテ即チ皇族ニ對スル民事訴訟ニ付テハ第  
 一審第二審共ニ東京控訴院ノ管轄トス

裁判所構成法

右ノ外商法ニ定メタル破産事件ニ付テハ價額ノ多寡ニ關セス總テ地方裁判所ニ於テ之ヲ管轄ス

第二審トシテハ

一 區裁判所ノ判決ニ對スル控訴

二 區裁判所ノ決定命令ニ對スル法律ニ定メタル抗告

諸君ハ既ニ訴訟法ニ於テ判決決定命令ノ如何ナルモノナルカヲ研究セラレタルナラン然ラハ此ニ重テ説明スルノ要ナキモ之ヲ概言スルニ判決トハ本案ニ對シ口頭辯論ヲ經テ下ス所ノ判定ヲ云ヒ決定トハ口頭辯論ヲ經スシテ裁判所カ或ル事柄ニ付キ評定シタル結果ヲ云ヒ命令トハ訴訟進行上ニ關スル諸種ノ處分ヲ云フモノナリ而シテ其判決決定及ヒ命令ニ對スル控訴及ヒ抗告ハ民事訴訟法ノ説明ニ譲リ茲ニハ陳ヘス

第二 刑事ニ關スル裁判權

第一審トシテ地方裁判所ハ左ノ二種ノ者ヲ除ク外一切ノ刑事々件ヲ管轄ス

イ 區裁判所ニ屬スル事件

ロ 大審院特別權限ニ屬スル事件 是レ刑事訴訟法第三百十條以下ニ規定スル所ニシテ(本法第五十條第二號)即チ刑法第二編第一章及ヒ第二章ニ掲ケタル重罪并ニ皇族ノ犯シタル罪ニシテ禁錮又ハ更ニ重キ刑ニ處スヘキ事件

第二審ノ裁判權ヲ有スルハ曰ク

イ 區裁判所ノ判決ニ對スル控訴

ロ 區裁判所ノ決定及ヒ命令ニ對スル法律ニ定メタル抗告

第三 非訟事件ニ關スル裁判權

非訟事件ノ裁判權ハ本法第二十九條ニ規定セリ即チ地方裁判所ハ非訟事件ニ付キ區裁判所カ下シタル決定及ヒ命令ニ對シ法律ニ定メタル抗告ニ付キ更ニ決定若クハ命令ヲ與フルノ權ヲ有スルモノトス

第四章 控訴院

凡ソ訴訟ノ民事タルト刑事タルトヲ問ハス二回ノ審理ヲ以テ其局ヲ結フモノ

裁判所構成法

刑事ニ關スル裁判權

非訟事件ニ關スル裁判權

近世一般ニ採用スル制度ニシテ此制度ノ當否ハ曾テ總論ニ於テ説明ヒン所ニシテ第二審ノ要ハ第一審裁判ノ誤謬ヲ矯正シ時々ノ免レ難キ私曲ヲ梳掃シ公平ノ裁判ヲ得ヒシムルニ存ス蓋シ一回ノ審理ハ必スシモ常ニ正鵠ヲ過クサルモノト云フヲ得ス殊ニ地方裁判所ハ控訴院ヨリモ一等ヲ下ル裁判所ニシテ從テ亦一步人民ニ直接セルモノナルカ故ニ時々地方ノ感情ニ制セラレ風潮ニ誘ハレノ嫌ナキ能ハス感情風潮ニ誘惑セラレテハ到底裁判ノ正鵠ヲ得ル能ハス是レ裁判ニ上級審ノ設ケアル所以ニシテ往時司法制度ノ發達セサル時代ニ於テモ既ニ不完全ナカラモ覆審制ノ備レルヲ見ル可シ蓋シ其要アレハナリ然レトモ控訴ノ制度ヲ非議スルモノ亦之ナキニ非ス

或ハ曰ク覆審ノ制ヲ設ケルハ控訴ノ裁判ヲ以テ一審ニ優ルモノト看做スニ在リト雖モ果シテ其控訴ノ裁判ノ善良ナルヤ否ヤハ得テ速斷ス可キニ非ス一概ニ之ヲ善良ナリ優等ナリトスルハ事實ヲ究メサルノ暴論ト云フノ外ナシト此論タル第一審裁判ト第二審裁判ト其基礎ニ異ナル所アルヲ知ラスシテ覆審制度ヲ非議スルモノニ外ナラスシテ實ニ無稽モ甚シト云フ可シ論者知ラスヤ

其事件ニ于與スル判事ニ經歷ノ深淺ト員數ニ多少ノ別アル事ヲ荷モ其事件ニ干與スル裁判官ノ經驗ニ富ミ又其員數ニ多ヲ加ヘタリトセバ是レ等ノ者カ下シタル判決カ之ヲ第一審ノ經驗モ幾ク員數モ少ナキ判事ノ判決ニ比シ果シテ如何ン假シ其裁判官ハ第一審第二審共ニ同一ナル學識ト經驗トヲ積ミ且其員數ニ差等ナシトスルモノニタヒスルハ一タヒスルヨリハ精且密ナルヘキハ爭フヘカラサル事實ナルヲヤ

或ハ曰ク覆審制ハ第一審ノ裁判官ヲシテ其責任ヲ輕カラシムルモノナリ不衡平ノ裁判ヲ下スモ第二審ノ之ヲ更正スルアルヲ以テ輕々ニ粗糲ノ判決ヲ下シ願ミサルヘシト

論者ノ言ヤ宜シ然レトモ是レ亦皮相ノ見タルヲ免レヌ未タ以テ覆審制ヲ非議シ得タリト云フヲ得ス何トナレハ自己ノ下シタル判決ニ付キ自ラ其責ニ任スヘキハ當然ニシテ若シ然ラストセハ何人カ其責ヲ負フヘキヤ苟モ庸愚斗肖ノ裁判官ニ非サルヨリハ斯ノ如キ誤認アラサルヘシ然リト雖トモ裁判官中果シテ庸愚斗肖ノ輩ナシトセス若シ之レ有リトセハ眞ニ例外タルノミ例外ハ只其

全部ニ對スルノ一端ノミ一端ヲ舉テ全部ヲ推スハ論理ノ許サ、ル所ナリ且夫  
 レ上級裁判官ノ爲メニ自己ノ下シタル判決ヲ破却セラレサルヲ求ムルハ下級  
 裁判官ノ常情ニシテ此觀念ノ覆審制度ヲ待テ初メテ發スル所ノモノナリ若シ  
 覆審制ナキカ却テ下級裁判官ハ恣ニ專横ノ裁判ヲ下シ恬トシテ顧ミサルニ至  
 レヘシ  
 或ハ又云ハン下級裁判所ノ判決常ニ其正鵠ヲ得上級裁判所ハ只之ヲ認可スル  
 ニノミ止マランカ遂ニ覆審制度ヲ設ケタルノ利益ナシ元來覆審制ヲ設ケタル  
 所以ハ第一審ノ判決ニシテ不當ナルモメヲ匡濟セシムルニ在レハナリト  
 然レトモ第一審ノ判決ハ常ニ正確ナルハ期シ難キノコトナルノミナラズ覆審  
 制度ノ目的ハ第一審誤謬ヲ正スニ在ルカ故ニ第一審ノ判決ニシテ常ニ正鵠ヲ  
 過キサルハ亦是レ覆審ナル上級審アルノ賜ト云ハサル可ラス何トナレハ所謂  
 刑ハ刑ナキヲ期ス司法ノ法術ヲ設クルハ訴ナキニ至ラシムルノ深意ナレハナリ  
 換言スレハ覆審制度ノ存スルニモ拘ハラズ當事者カ自ラ第一審ノ判決ニ甘ん  
 スルハ取モ直サズ覆審制度アリテ生スル結果ト見ルモ不可ナルナケレハナリ

控訴院ノ  
特別組織

以上覆審制度ヲ非難スル論者ノ說ハ一モ其根據ヲ有セザルモノナリ只徒ラニ  
 辨ヲ好ムノ輩ノ爲ス所ニシテ予輩ノ之ヲ探ラサル所ナリ

第一 控訴院ノ特別組織

控訴院ハ合議裁判所ノ第二審ニシテ其裁判ヲ爲シ及ヒ審問ヲ爲スハ第一審ト  
 異ルコトナキモ其判事ニ多少經驗ノ深淺アルト員數ニ差異アルノミ(第四十條  
 及第六十九條)今其特別ナル組織ヲ示サンニ

控訴院ニ於テ審問裁判スヘキ事件ハ五人ノ判事ヲ以テ組立タル部ニ於  
 テ之ヲ審問裁判ス

是レ其地方裁判所ト其組織ニ異ル所ナリ又地方裁判所ニハ豫審ノ特別ナルモ  
 ノアレトモ控訴院ハ判事ニ付テハ第一審ノ裁判ヲ爲サ、レハ豫審ノ必要ナシ  
 是レ前ニ説明セシ所ナリ

第二 控訴院ノ裁判權

控訴院ハ民事刑事ニ通シ左ノ事件ニ付キ裁判權ヲ有ス

第二審トシテハ

裁判所構成法

控訴院ノ  
裁判權



甲 地方裁判所ノ第一審判決ニ對スル控訴

乙 地方裁判所ノ決定及命令ニ對スル法律ニ定メタル抗告

右ノ如ク控訴院ハ本則トシテハ第二審ノ判決ヲ爲スモノナルモ此他尙ホ

甲 區裁判所ノ判決ニ對スル控訴ニ付キ爲シタル地方裁判所ノ判決ニ對スル上告

乙 區裁判所ノ決定ニ對シ地方裁判所カ下シタル決定ニ對スル抗告

ニ付キ裁判權ヲ有スルカ故ニ區裁判所ノ判決ニ對シテハ上告審ニ位スルモノナルコトヲ知ル可シ而シテ是レ從來我邦ニ其例ナキ所ニシテ從テ學者間ニ議論アル所ナリ今其一般ニ唱導スル所ヲ諸君ニ紹介セン

從來上告ハ事ノ細大輕重ヲ問ハス專ラ大審院ノ管轄スル所ナリシカ新法ハ區裁判所ノ管轄事件ニ限リ各控訴院ニ上告ヲ爲スヲ得セシム抑モ如何ナル理由ニ基クヤ

蓋シ上告ノ要ハ一國ヲ通シテ法律適用ノ盡一ヲ求ムルニ在リ各其所ヲ異ニスルニ從ヒ其解釋亦區々ニ出ルトモハ法律ノ効力ニ關スル瑣事ニアラス故ニ其解

釋ハ必ス一途ニ出テシメ全國ヲ通シテ法律適用ノ同一轍ナラシメサルヘカラス上告ノ要ハ茲ニ在リテ存ス然レハ之ヲ全國只一ノ大審院ニ擔當セシムルハ能ク法律ノ統一ヲ圖ルヲ得ヘケン然ルニ其事小ニシテ又輕易ナル區裁判所事件ト雖モ法律適用ノ問題ニ至テハ其事ノ大ニシテ又難重ナルモノニ異ルナシ然ルヲ之ヲ全國ニ七個ノ控訴院ニ取扱ハシムルハ果シテ上告ノ趣旨ニ叶フヤ否ヤ甲控訴院ト乙控訴院トハ其見ル所ヲ異ニシ從テ法律適用ノ一統ニ出テサルヤ明ナルカ故ニ法律ノ統一ヲ求ムル上告ノ趣旨ニ適フモノニアラスト云ハサルヲ得ス

或ハ云ハク控訴院ヲシテ上告ヲ審判セシムルモ彼是法律ノ適用ヲ異ニスル如キコトアル可ラス何トナレハ控訴院ハ大審院ノ判決ヲ標準シ大審院ノ判決ハ法律ノ際ニ付キ下級裁判所ヲ拘束スルノ力アレハナリト(第四十八條)然レトモ此論ハ其本據ヲ誤ル若シ夫レ大審院ノ取扱フ所控訴院ノ取扱フ所ト同一ナラシカ論者ノ言ノ如クナル可シト雖モ控訴院ノ上告ニ付キ審判スル所ハ大審院ノ關スル所ニ非ス何トナレハ區裁判所ノ所掌事件ハ單ニ金額ニ於テ地方裁判

所ノ所掌ト異ルノミナラス全ク其性質ヲ異ニスルモノアリ經界ニ關スル訴訟  
 占有訴訟屋外盜ノ如キ然リ大審院ノ判決ニ上ル可キモノニ非ス從テ控訴院ハ  
 大審院ノ判決ヲ標準トスル途ナカルヘケレハナリ途ナキカ控訴院ハ各其見ル  
 所ニ從テ區々ノ判決ヲ下ス可ク其結果甲地方ノ人民ハ事ヲ受クルトスレハ乙  
 地方ノ不幸ノ判決ヲ受ケ全國區々ノ判例並存スルコトハナレ可キナリ  
 或ハ亦言ハン全國唯一ノ大審院ニ上告セシムルトセハ輕微ナル事件ニ付テハ  
 訴訟人ハ其費用ニ堪ヘス遠隔ノ地ニ在ルモノ十分權利ノ伸暢スヘキモノアル  
 ニ費用ト手數ヲ費スノ少カラサルヨリ終ニ枉ケテ權利ヲ主張スルコトヲ爲サ  
 ス又之ヲ爲ス能ハサル可シ然レトモ今日交通ノ日ヲ遂フテ益々容易ナルニ當  
 リテハ斯ノ理由ハ毫モ其價值ナシ地方ノ控訴院ニ出ルモ大審院ニ至ルモ僅々  
 旅費ノ上ニ差異アルノミ其費用ヲ要スルハ五十歩百歩ナルノミ况ンヤ全國唯  
 一ノ大審院ノ判例一定セハ法律適用ノ統一ヲ得テ殊更ニ上告ヲ爲スモノ、少  
 キニ至ルヘキハ想像シ得可キコトナルオヤ然ルヲ好ンテ其統一ヲ避ケントス  
 ルハ適當ナル法律ノ規定ト云フヲ得ス

果シテ然リトセハ何故ニ此不正不利ノ制度ヲ採用セシカ我立法者ハ曰ク舊時  
 ニ在テ重ニ公益ヲ主眼トシ從テ法律統一ノミヲ目的トセシ大審院ナルカ故ニ  
 事ノ最大ト輕易トヲ問ハス苟モ法律ニ違背スルモノアレハ直ニ採テ之ヲ破毀  
 セシモ新法ハ其基礎ヲ異ニシ先ツ私人ノ權利關係ノ利害ヲ考察シ不法ノ判決  
 ノ爲メニ權利ヲ傷害セラル、ニアラサルヨリハ上告ヲ許サズ故ニ新法ハ主ト  
 シテ私人ノ利益ヲ保護シ傍ラ可成的法律解釋ノ統一ヲ得ントスルカ故ニ各控  
 訴院ノ權限ニ區裁判所管轄事件ノ上告ヲ付加セリト果シテ我構成法制定ノ精  
 神ハ茲ニ在ルカ余ハ信ス大審院ヲシテ尙之ニ當ラシメハ益此二ノ目的ヲ達ス  
 ルニ最大ノ利益アルヲ余ハ熟々案スルニ此制度ハ直ニ獨逸法ヲ翻譯シタルヨ  
 リ來リタルモノニアラサルカ  
 構成法ハ獨逸法律ニ採擇スル所多シ獨逸帝國ハ數箇ノ聯邦ヨリ成リ各聯邦各  
 其法律ヲ異ニセリ從テ甲邦ノ法律ハ乙邦ニ適用スヘカラス故ニ上告ヲ其聯邦  
 ノ上級裁判所ニ於テ審理セシムルハ其理リアリ即各其法律ヲ異ニスルカ故ニ  
 其法律統一ノ專任タル裁判所ヲ異ニスルハ法律解釋ヲ一途ニ出テシムルモノ

ナリ而シテ獨逸帝國一般ニ行ハル可キ法律ニ關スル上告ハ帝國唯一ノ裁判所ナル帝國裁判所ニ於テ其上告ヲ審判セリ益々其上告審ヲ異ニシタル理由ヲ知ルニ足ル

夫レ然リ獨逸聯邦ノ裁判所ト帝國裁判所ト其上告ヲ受理スルニ異ルモノアルヲ究メス只聯邦裁判所ハ我控訴院ノ如ク各地ニ散在シ帝國大審院ハ又彼ノ帝國裁判所ト其趣異ルコトナシトシ直ニ之ヲ移植セントス過タサラント欲スルモ得カラス是レ余カ控訴院ニ上告ノ裁判ヲ爲サシムル制度ヲ非難スル所以ナリ  
終リニ控訴院ハ皇族ニ對スル民事訴訟ニ付キ特別權限ヲ有ス(第三十八條)是レ一般臣民ト異ナリ丁重謹慎ヲ要スルカ故ニシテ而シテ獨リ東京控訴院ニ其管轄ヲ限リタルハ皇族ハ多ク東京ニ在住セラル、カ故ナラン

### 第五章 大審院

大審院ハ司法裁判所中最高ノ裁判所ニシテ主トシテ第二審ノ判決ニ對スル上告

ヲ裁判スルニ在リトス

蓋シ一回ノ審理ハ或ハ事實ノ點ニ於テ盡サ、ルナキヲ保セス故ニ控訴審ヲ置キ事實ノ覆審ヲ爲サシム故ニ事實ハ二回ノ審理ヲ經テ明確ナルヲ得能ク誤リナキヲ期シ得ルモ法律適用ニ付テハ未タ誤リナシトセス私權ノ保護ヲシテ全カラシメント欲セハ更ニ又法律適用ノ點ニ付キ當事者ノ爲メ救正ノ手段ナカル可ラス

且夫レ一國ヲ通シテ法律ノ適用ヲ一途ニ出テシメシニハ又裁判所ノ畫一ヲ圖ルノ必要アル論ヲ跋タス區々法律適用ヲ異ニシ彼是其裁判ヲ變更スルニ於テハ法律ノ統一ナル解釋ヲ望ムモ全ク畫餅タルヲ免レス人民ハ法律ニ適用ノ區々ニシテ異ルアレハ其適從スル所ヲ知ルニ苦ム可シ茲ニ至テ法律ノ方ハ權利ノ保護財產ノ安全ヲ顧ムニ薄弱ノ具トナラン

此故ニ大審院カ上告ノ裁判權ヲ有スルハ正ニ二個ノ必要ヨリ來ルヲ見ル(一)法律ニ違背シ又ハ不當ニ適用シタル裁判官ノ錯誤ヲ匡正シ以テ當事者ニ最終ノ救正手段ヲ與ウルコトニ裁判所ノ畫一及ヒ不變ヲ期スルコト是レナリ

然レトモ前ニ説明セシ如ク大審院ハ事實ノ點ニ付テハ控訴院ノ事實認定ヲ標準トシ其事實ヲ該當スヘキ法律ノ適用如何ヲ審究スルニアルヲ以テ大審院ノ審理裁判ヲ爲スニハ左ノ二點ニ注意セサル可ラス

第一 大審院ハ訴訟ノ事實ヲ審理セス事實ハ原裁判官(控訴院)ノ審理ノ末記

明シ認定セル所ヲ以テ確實不變誤リナキモノトシ之ヲ探テ標準ト爲ス

大審院ハ只其確定シタル事實ニ對シ果シテ法律適用ノ正否ヲ鑑査スルモノナルカ故ニ控訴院ニ於テ爲シタル事實ノ認定ヲ以テ標準ト爲ス故ニ若シ大審院カ訴訟ノ事實ニ進入シ裁判ヲ爲スコトアラシカ是レ越權ノ裁判ニシテ固ヨリ不法タルヲ免レス然レトモ大審院ノ上ニ之ヲ匡正スル裁判所ナキヲ以テ此場合ニ於ケル其不法不正ノ判決ヲ輿論公儀ノ制裁ヲ受クルノミ

例ヘハ甲乙二人間ニ訴訟ノ行爲アリテ甲者ハ乙者ニ對シ損害賠償ヲ求メタルニ原裁判所ハ乙者ハ甲者ニ損害ヲ蒙ラシメタルモ是レ乙者カ權利ノ實行ニ過キスシテ從テ之レヨリ生スル損害ナシトシテ甲者ノ請求ヲ斥ケタリトセンニ甲者ハ此判決ニ對シ上告シ果シテ乙者ノ行爲カ權利ノ實行ナリヤ否ヤヲ論究

スルニ當リテハ此權利ノ實行ナルヤ否ヤハ法律ノ解釋ヨリ來ルモノナルカ故ニ控訴院カ甲者ノ請求ヲ排斥シタル理由不備ナレハ大審院ハ之ヲ代ニ若クハ他ノ裁判所ヲシテ新ニ審究セシムルコトヲ得ヘシ反之原裁判所ハ甲者ノ請求ハ之ヲ證明スルノ證據ナシトシテ排斥シタルモノナランニハ大審院ハ之ヲ棄却スルノ外ナカルヘシ何トナレハ證據ノ擧否ハ事實審ニ屬スル事ナレハナリ又契約履行ノ訴ニ於テ原裁判所ハ其契約ハ成立條件ヲ欠クモノトシテ履行ヲ要求スルヲ得ストシタルトキハ大審院ハ之ニ對シ其契約ハ履行ニ依リテ消滅シタルモノナリト判決スルヲ得ス之ヲ要スルニ控訴審ノ裁判官ハ證書及ヒ契約ヲ解釋シテ事實及ヒ意思ノ點ニ付キ認定スルニハ最高權ヲ有ス

第二 大審院ニ於テ法律ニ違背又ハ法律ノ適用ヲ誤リタルヲ理由トシテ原判決ヲ破毀スルトキハ更ニ辨論及ヒ裁判ヲ爲サシムルカ爲メ原院又ハ同等ノ裁判所ニ其事件ヲ移送ス(民事訴訟法第四百四十八條刑事訴訟法第二百八十六條)但シ民事訴訟法第四百五十一條ノ場合ニ於テハ大審院自ラ審判判決ヲ爲ス是レ本項原則ニ對スル一ノ例外ナリ

夫レ斯ノ如ク大審院カ前判決カ法律ニ違背シ若クハ法律ヲ不當ニ適用シタリト爲ストキハ之ヲ前院若クハ他ノ同等ナル裁判所ニ移付ス而シテ其移付ヲ受ケタル裁判所ハ更ニ其事件ノ裁判ヲ爲スニ當テハ大審院カ法律ノ點ニ付テ表シタル意見ニ牴觸スルヲ得ス何トシテハ若シ大審院カ破毀シタル法律上ノ點ニ付テ其移付ヲ受ケタル裁判所ハ更ニ異ル判決ヲ爲シ得ルトセハ折角上告審ヲ置キ法律解釋ニ盡一ナラシメタル旨趣ニ反スルモノアレハナリ第四十八條ハ即チ此精神ニ基キ規定ナリ曰ク

大審院ニ於テ裁判ヲ爲スニ當リ法律ノ點ニ付キ表シタル意見ハ其訴訟一切ノ事ニ付キ下級裁判所ヲ羈束スト

是レ裁判所ノ統一ヲ圖ルニ付キ固ヨリ欠クヘカラサル所ナリ然レトモ其羈束ノ効力ハ絶對無限ノモノニアラス若シ之ヲ絶對ナリトセハ裁判官ノ獨立即チ裁判官ハ法律解釋ニ付キ獨立權ヲ有スルトノ法律ノ精神ニ反スルモノナリ今條文ニ就テ之ヲ解釋センニ

一 羈束セラル、ハ其訴訟事件ヲ移付セラレタル下級裁判所ニ限ル故ニ其

移送ヲ受ケサル他ノ裁判所ハ縱令大審院ノ判決ニ依ラサルモ毫モ違法ニアラス

二 羈束力ヲ有スルハ只法律ノ點ニ付テ表シタル意見ニ限ル事實ノ點ニ付テハ控訴院ハ其認定ノ最高權ヲ有スルモノニシテ大審院ト雖トモ其事實ノ點ニ付テハ之ヲ羈束スルヲ得ス又羈束スルノ必要ナシ故ニ控訴院ハ事實ノ點ニ付テハ前判決ヲ變更スルモ自由ナリ

三 羈束ノ効力アルハ只其移送ヲ受ケタル事件ノミ 故ニ假令其事件ト類似ノ事件ト雖トモ移送事件ヲ外ニシテハ控訴院ハ大審院ノ判決ニ羈束セラル、コトナシ

法律ノ適用ヲ盡一ニスルノ結果大審院ノ判決ハ斯ノ如ク至重ノ効力ヲ有スルカ故ニ一事件ヲ判決スルニ當リテヤ須ラツ周到慎重ノ注意ヲ要シ輕忽ニ裁判スヘカラス若シ輕忽ニ判決シテ容易ニ前例ヲ覆シ前後矛盾ノ判決ヲ見ルカ如キコトアラシ司法權ノ威嚴ヲ損シ信用ヲ失墜セシムルノミナラス人民ハ法律ノ疑義ニ付キ裁判所ノ結局ノ意見ヲ知ルコト能ハス下級裁判所モ其模範スヘ

キ準繩ヲ知ルノ難キ遠ニ其裁判ヲ爲スニ苦シマサルヲ得ス何トナレハ其判例ニシテ一定セス時々刻々變更アリトセハ何人モ自己ノ下シタル判決ノ破却セラレンコトヲ望マサルモノハアラサルヘシ故ニ其判決ヲ爲スニ躊躇スヘシ茲ニ至テ判例ハ一定セス國法ノ解釋ノ眞否之ヲ知ルニ由ナケン故ニ大審院ノ判決ヲ下ス固ヨリ鄭重ヲ要スルノミナラス又其判決ノ前後矛盾セサルコトヲ要ス

大審院カ一々ヒ下シタル判例ヲ覆サントスルニ當リテハ更ニ一層ノ慎重丁寧ヲ要スルハ論ヲ俟タス此故ニ若シ前例ヲ變更スルノ必要アル場合ニ於テハ其事件ヲ取扱フ部ヨリ之大審院長ニ報告シ其事件民事ナルトキハ民事ノ總部聯合シテ之ヲ審問判決シ若シ刑事ノ事件ナルトキハ刑事ノ總部聯合シテ審問裁判シ民刑交渉事件ナルトキハ民事刑事ノ總部聯合シテ之ヲ審問スヘキモノトス(第四十九條)

大審院ノ特別組織

第一 大審院ノ特別組織

大審院ハ司法裁判所最高ノ裁判所ニシテ法律適用ノ統一ハ一々之ニ依テ發表

セラレ司法機關ノ重要ナル部分ナルヲ以テ之ヲ組織スル判事ニ經驗ヲ要シ及ヒ其員數ヲ増セリ(第五十三條及第七十條)而シテ其事務取扱ハ廳中行政事務ヲ取扱フ者ノ如何ハ法文ニ規定スル所ナリ

第四十三條 大審院ヲ最高ノ裁判所トス

大審院ニ一若クハ二以上ノ民事部及刑事部ヲ置ク

第四十四條 大審院長ヲ置ク

大審院長ハ大審院ノ一般ノ事務ヲ指揮シ其行政事務ヲ監督ス

大審院ノ各部ニ部長ヲ置ク部長ハ部ノ事務ヲ監督シ其行政事務ヲ監督ス

督ス

第四十五條 大審院ノ事務ノ分配並ニ代理ノ順序ハ毎年部長ト協議シ大

審院長前以テ之ヲ定ム

第二 大審院ノ裁判權

大審院ハ民事刑事ニ通シ終審トシテ左ノ事件ヲ裁判ス

一、控訴院カ第二審トシテ爲シタル判決ニ對スル上告

大審院ノ裁判權

二、東京控訴院カ皇族ニ對スル民事訴訟ニ付キ爲シタル第二審ノ判決ニ對スル上告(第三十八條)

三、控訴院ノ決定及ヒ命令ニ對スル法律ニ定メタル抗告

以上ハ大審院カ終審トシテ裁判權ヲ有スル事件ナルカ尙大審院ハ第一審ニシテ而シテ同時ニ終審ノ裁判ヲ爲スコトアリ是レ構成法第五十條ニ掲クル所ニシテ曰ク

第一審ニシテ終審トシテ刑法第二編第一章及ヒ第二章ニ掲ケタル重罪並

ニ皇族ノ犯シタル罪ニシテ禁錮又ハ更ニ重キ刑ニ處スヘキモノ、豫審及

裁判

前ニ説明セシ如ク此等ノ犯罪及ヒ其犯人ハ身分及ヒ其罪質カ國家尊信ノ係ル所ナルヲ以テ殊ニ之ヲ大審院ヲシテ裁判セシム余ハ先ニ豫審ハ地方裁判所ニ特別ナル規定タルヲ説明セリ而シテ之ト同時ニ又豫審ハ上級審ニ設クルノ必要ナキコトヲ説明セリ然ルニ上訴ヲ管轄スル最高裁判所タル大審院ニ此特例アルハ或ハ豫審ハ上級審ニ必要ナルカ如キモ是レ思ハサルノ甚シキノミ

檢事局

夫レ大審院ヲシテ或ル特別ノ刑事々件ニ付キ第一審ノ裁判ヲ爲サシムルトセハ曾テ説明セシ如ク犯罪ノ搜查ニ檢證若クハ臨檢等必ス證據ノ蒐集ノ必要ナル明ナリ故ニ大審院ニ或ル事件ニ付テノミ其豫審ヲ爲サシムルハ決シテ上級審ニ豫審ノ必要ナシトノ一般法律上ノ理由ニ反スルモノニアラサルナリ以上ヲ以テ余ハ裁判官憲ノ説明ヲ了ヘリ而シテ以下各裁判所ニ附置セラル、檢事局ノ組織ヲ説明セントス然レトモ其檢事局ノ組織及ヒ檢事ノ職務ハ既ニ前ニ説明セシ所アルヲ以テ本條ニ於テハ只其條文ヲ挿入セハ自ラ瞭然タルベシ先今區裁判所ノ檢事局ヨリ順次大審院ノ檢事局ヲ一言センニ

一、區裁判所檢事局 本法第十八條ニ規定セリ曰ク

各區裁判所ノ檢事局ニ檢事ヲ置ケ  
區裁判所檢事局ノ檢事ノ事務ハ其地ノ警察官憲兵將校下士又ハ林務官之ヲ取扱フコトヲ得

司法大臣ハ適當ナル場合ニ於テハ區裁判所判事、試補又ハ郡市町村ノ長ヲシテ檢事ヲ代理セシムルコトヲ得

二、地方裁判所検事局 本法第三十三條ニ規定セリ曰ク

各地方裁判所ノ検事局ニ檢事正ヲ置ク

檢事正ハ檢事局ノ事務ヲ分配指揮シ及ヒ監督ス但檢事局ノ其他ノ檢事ハ事務取扱ニ付何等ノ事件ニ拘ハラズ特別ノ許可ヲ受ケスシテ檢事正ヲ代理スルノ權ヲ有ス

三、控訴院検事局 本法第四十二條ニ規定セリ曰ク

各控訴院ノ檢事局ニ檢事長ヲ置ク

檢事長並ニ其他ノ檢事ノ職權ニ付テハ地方裁判所檢事局ノ規定ヲ適用ス

四、大審院検事局 本法第五十六條ニ規定ス曰ク

大審院ノ檢事局ニ檢事總長ヲ置ク

檢事總長並ニ其他ノ檢事ノ職權ニ付テハ地方裁判所檢事局ノ規定ヲ適用ス

以上ハ裁判所ニ附置セラレタル檢事局ノ組織ニ關スルモノニシテ其檢事ノ職務及ヒ其事務取扱ヒニ付テハ本法ノ總則及ヒ後編ノ規定ニ依リ別ニ説明スル

ノ要ナケレハ諸君ハ後編講スル所ヲ以テ其詳細ヲ研究セラレンコトヲ乞フ

## 第二編 裁判所及檢事局ノ官吏

立法者ハ第一編ニ於テ裁判所及檢事局ノ組織并ニ權限ヲ規定シ次テ本編ニ至リ之ヲ組織スル職員ノ就任資格服務規定ヲ定メタリ裁判所及ヒ檢事局ノ職員トハ即チ判事、檢事、裁判所書記、執達吏及ヒ廷丁トス第一章ハ判事、檢事ニ共通ノ法則ニシテ以下各職員毎ニ一章ノ規定ヲ下セリ請フ序ヲ逐フテ下ニ分説セン

### 第一章 判事、檢事ニ任セラル、ニ必要ナル

#### 準備及資格

準備ト云ヒ資格ト云フ異字同義ヲ表明スルノ嫌ナキニ非サレモ強テ之ヲ區別センカ準備トハ其資格ヲ得ル以前ニ屬スル事柄ニシテ資格ハ準備ヲ盡シテ初メテ生スルモノナリト云フコトヲ得可シ

判事、檢事ニ任セラル、ニハ第一回ニ於テ學術競争試験ニ及第シ第二回ニ於テ



實務試験ニ合格シタルモノナラサルヘカラス判事檢事タルニ斯ル周密ナル試問ヲ要スルハ判事檢事ハ主トシテ法律適用ノ重任ニ當ルモノナルカ故ニ學識ニ實務ニ十分經驗ヲ積ミタルコトヲ公認セラレタル者ニアラサレハ未タ以テ此重任ニ當ラシムルニ足ラス深遠高妙ノ學識モ實務ヲ知ラサル者ニアリテハ之ヲ適用スルニ地ナカル可キハ最モ親易キノ道理ナレハナリ(第五十七條)但シ三年以上帝國大學法科教授若クハ辯護士ノ職務ニ從事シタル者ニ在テハ試験ヲ要セス直ニ判事檢事ニ任補スルコトヲ得(第六十五條)此規定タル實ニ例外ニ屬ス否ナ寧ロ恩惠ナリ大學ノ教授カ學識ニ於テ其資格アリト認ムルコトヲ得ルハ可ナリトスルモ三年以上教授ノ職ニ在リシ者果シテ裁判ノ實務ニ何程ノ練習經驗ヲ與フルカ學生ニ學識ヲ授ケツ、而シテ裁判ノ實務ヲ自ラ習得レタルモトスルハ少シク解スルニ苦ム所ナキヲ得ス

(甲) 第一回試験

此試験ハ判事檢事タルニ必要ナル學識ヲ有スルヤ否ヲ試問スルモノニシテ其規則ハ明治二十四年司法省令第三號ヲ以テ定メラル該規則ニ依レハ第一回競争

試験ニ應セント欲スル者ハ先ツ一定ノ資格ヲ具備スルコトヲ要ス其資格ニ積極及消極ノ二種アリ(同則第五條及ヒ本法第六十六條参照)積極資格トハ必ス具足セサル可カラサル資格ノ謂ニシテ即チ左ノ如シ

- 第一 帝國ノ男子ニシテ成年以上ノ者ナルコト
  - 第二 判事檢事ト爲ルニ要スル學業修習證書ヲ有スルコト
- 本項ハ左ノ三種ノ内其一種ノ卒業證書ヲ有スルヲ以テ足ル

- (い) 第一若クハ第三高等中學校ニ於テ法學科ヲ卒業シタル者
- (ろ) 文部大臣ノ認可ヲ經タル學則ニ依リ法律學ヲ教授スル私立學校ノ卒業證書ヲ有スル者
- (は) 外國ノ大學校又ハ之ト同等ナル學校ニ於テ法律學ヲ修メ卒業證書ヲ有スル者

又消極的ノ資格ハ其一ニタモ該當セサルコトヲ要スルモノニシテ本法第六十六條之ヲ掲ク

- 第一 重罪ヲ犯シタル者、但シ國事犯者ニシテ復權シタル者ハ此限ニアラ

第二 定役ニ服スヘキ輕罪ヲ犯シタル者

第三 身代限ノ處分ヲ受ケ負債ノ義務ヲ免レサル者

以上二種ノ資格ニ照シテ不都合ナキ者ハ茲ニ初メテ判檢事登用試験ノ受験者タル資格ヲ有スルモノニシテ而シテ第一回ノ學術競争試験ニ及第シタル者ハ第二回試験ヲ受クルノ前試験トシテ三ヶ年間裁判所及檢事局ニ於テ實地練習ヲ爲ス事ヲ要ス(第五十八條)

然レトリ帝國大學法科卒業生ハ法律學專攻ノ公認ヲ經判事檢事タルニ要スル學識ニ欠クル所ナケレハ之ヲ試験ニ任用スルニ當リ學術競争試験ヲ爲スノ必要ナキカ故ニ直ニ探テ試験ト爲ス事ヲ得ヘシ然レトモ其實地運用ノ點ニ關シテハ未タ練習ノ實跡ナキモノナレハ事ニ當テ誤リナキヲ保セス故ニ尙試験及第者ト同シク三ヶ年事務練習ヲ要セリ(第六十五條第二項)

分 試補ノ職

試補ノ職分

試補ハ實務練習ノ爲メニ勤務スルモノナレハ裁判ニ干預シ若クハ檢察事務ニ

當ル事ヲ得サルヲ以テ本則トス然レトモ試験トシテ一ヶ年以上修習シタル者ハ多少實務ニ付テ辯識スル所アルヲ以テ之ニ司法事務ノ助行ヲ命スルモ敢テ不可ナルナシ此故ニ現ニ其修習ヲ監督スル判事ニ於テ司法事務ノ助行ヲ爲サシメ差支ナシト思料シ之ニ司法事務ノ助行ヲ命スルトキハ試験ハ其裁判所ニ於テ司法事務ヲ取扱フコトヲ得ヘク又豫審判事若クハ受命判事ノ職務ヲモ助行スルヲ得(第六十條)然レトモ試験ハ如何ナル場合ニ於テモ取扱フコトヲ得サル事務アリ是レ本法第六十一條ニ列舉スル所ニシテ

第一 訴訟事件ト非訟事件トニ拘ラス裁判ヲ爲ス事

第二 證據ノ取調但シ豫審判事若クハ受命判事ノ附屬トシテ之カ取調ヲ爲

ストキハ此限ニアラス

第三 登記ヲ爲ス事

以上三種ノ事務ハ凡テ人民ノ權利ニ重大ノ關係ヲ有スルモノナレハ若シ之ニ錯誤アラシカ當事者ノ權利ノ伸暢ニ影響ヲ及ホス尠少ナラサルヲ以テ未タ充分實務ニ練達セサル試験ニ之ヲ取扱ハシムルハ敢テ是等ノ危險ナシトセサル

ヲ以テ法律ハ一般ニ之ヲ禁セリ

又試補ハ合議裁判所長又ハ區裁判所ノ判事若クハ監督判事ニ於テ裁判所書記ノ取扱フヘキ事務ノ臨時取扱ヲ命セラルハ事アリ然レトモ試補ハ書記ノ職ヲ以テ主トスル者ニアラサルカ故ニ其署名ヲ要スル場合ニ際セハ特別ノ許可ヲ受ケサルヘカラス(第九十二條)或ハ試補ハ判檢事ノ候補者ニシテ其實習スル所唯判檢事ノ職務上必要ノ事務ノミ然ルニ其配下ニ屬スヘキ書記ノ職務ヲ臨時ト雖モ之ニ取扱ヲ命スルハ事理ノ本末ヲ失フモノナリト云フカ如キハ要スルニ服務者不滿ノ余言ニ過キス試補ハ實務ノ見習中ニ在ル者ニシテ判檢事ニアラス而シテ他日判事又ハ檢事ニ任補セラレタル日ニ於テ書記ノ事務ニ適センカ裁判事務ノ抄運ニ手數ト時日ヲ省キ裁判速行ノ便益アリトス而シテ此規定ハ將來試補ノ増加スル場合ニ於テハ當ニ臨時ノミナラス其修習期限中其一部ハ書記ノ職務ヲモ取扱ハサルヲ得サルニ至ラン是レ既ニ獨乙ニ於テ實例ノ徵スヘキモノアリ

免補試ノ罷

試補ノ罷免

試補ハ未タ法官タルノ資格ヲ得サルモノニシテ上官ノ指揮監督ニ從ヒ實務ヲ練習シ第二回實務ノ試問ニ登第スルノ準備中ニ在ルモノナレハ司法大臣ハ試補タル者ヲ鞭撻シテ精勵セシメ法官ノ良雛ヲ養成セサルヘカラス之ヲ遂行セシムルニハ又後進戒慎ノ爲メニ罷免スルノ必要アリ故ニ其試補タル者職務上若クハ職務外ノ行狀其職務ヲ執ルニ不適當ナルカ又ハ其修習ノ進步不十分ニシテ第二回試問ニ及第ノ見込ナキトキハ直接ノ指揮者即チ現ニ監督スル上官ハ控訴院長檢事長ヲ經由シ司法大臣ニ之ヲ報告セサルヘカラス司法大臣此報告ヲ受ケタルトキハ試補ヲ免スルコトアルヘシ(判事檢事登用規則第二十二條)又司法大臣ハ試補カ第二回試験ニ及第セサルコト若クハ第二回試験ノ成立セサルコトヲ該試験委員長ヨリ報告アリタルトキハ亦試補ヲ免スルコトヲ得然レトモ此後ノ場合ニ於テハ試補カ已ムヲ待サルノ事故アリシコトヲ證明シ試験委員長之ヲ正當ト認メ其旨ヲ司法大臣ニ報告シタルトキハ司法大臣ハ其試補ニ一回限り次期ノ試験迄引續キ修習ヲ爲サシムルコトアルヘシ(同則第三十一條同第十一條及同第十三條乃至第十五條)

此試驗ハ實務ノ練習成績ニ付キ試問スルモノニシテ第一回學術競争試驗ニ及第シ試験補トシテ三年間實務ヲ修習シタル者及ヒ帝國大學法科卒業生ニシテ試験補トシテ實務修習ヲ爲シタル者ノミニ行フ此試験ノ場所及期日ハ司法大臣及ヒ試験委員長ノ定ムル所ナリ(判事檢事登用試験規則第二十三條以下)此二回ノ試験ニ及第シタル試験補ハ判事又ハ檢事ニ任用セラル、事ヲ得(本法第六十二條然レトモ常備判事又ハ常備ノ檢事ニハ人員ノ制限(明治二十四年七月勅令第三百三十四號)アルヲ以テ新任セラレタル判事若クハ檢事ヲ直ニ常備トスルヲ得ス區裁判所又ハ地方裁判所ノ判事又ハ是等ノ裁判所ノ檢事局ノ檢事ニ欠位アルヲ待テ初メテ常備判事又ハ檢事ニ任補セラル、コトヲ得左レハ常備ノ判事檢事ニ欠位ナキ間司法大臣ハ之ニ豫備判事又ハ豫備檢事トシテ勤務ヲ命シ之ヲ司法省又ハ區裁判所若クハ地方裁判所及ヒ此等ノ裁判所ノ檢事局ニ使用スルモノトス(第六十三條)然レトモ新任ノ判事ハ如何ナル場合ト雖モ控訴院以上ノ裁判所ノ判事ニ任補セラル、コト能ハス是レ本編第二章第三章ニ規定スル

所ニシテ是等ノ裁判所ハ上審級ニ位スルヲ以テ之カ判事檢事タル者ハ同一層事務ニ練習シタル者ヲ要スル旨趣ニ基ク豫備判事又ハ豫備檢事勤務中其裁判所ノ常備判事又ハ其檢事局ノ檢事ニ其職務ヲ取扱フ能ハサル事故アルトキハ其差支ノ原因事實上ニ出ツルト(病氣其他ノ事故)ニテ實際裁判ニ預ルヲ得サルトキ)法律上ノモノト(判事又ハ檢事カ職務執行ヨリ除斥セラレ又ハ忌避セラレタルトキ)ヲ問ハス之ニ代ルヘキ判事又ハ檢事アラサルトキニシテ其事件緊急ナリト認ルトキハ裁判所長ハ豫備判事又ハ豫備檢事ヲシテ之ヲ代理セシムルコトヲ得ヘク又司法大臣モ此命ヲ發スルコトヲ得然レトモ合議裁判所ノ判事ヲ代理セシムル場合ニ於テハ同時ニ二人以上ノ豫備判事ヲ填用スルコトヲ得ス(本法第三十二條)此制限アル所以ハ豫備判事ハ缺員ヲ補充スルカ爲メニ豫備セラル、者ニシテ合議部ノ正員ニ非サルニ之ヲシテ合議部ノ過半数ヲ占領セシムルハ主客ヲ轉置シ輕重ヲ前後スルモノナレハナリ此理論ヲ推ストキハ區裁判所ノ單獨判事ニ差支アルモ豫備判事ヲシテ之ヲ代理セシムルコトヲ得サルヤ勿論ナリトス然レトモ豫備檢事ニ付

百十八  
テハ會テ如此制限ナキノミナラス司法官試補ト雖モ檢事代理ヲ命セラレタル  
トキハ獨立シテ其事ヲ行フ

## 第二章 判事

判事檢事ハ其任用セラル、資格準備ニ於テ異ナルナシト雖モ一タヒ任用セラ  
レテ一ハ判事トナリ一ハ檢事トナルヤ其資格身分ニ於テ全ク相異ナル判事ハ  
裁判所ニ於テ司法權ノ行使ニ從事シ檢事ハ國家ヲ代表シテ檢察ノ事務ニ從事  
ス國家ヲ代表シテ檢察事務ニ從事スル檢事ハ裁判事務ヲ取扱フモノニアラサ  
レハ是亦一ノ行政官吏ナリト雖モ判事ハ所謂司法官ニシテ行政官ニアラス司法  
權ヲ運用シテ其獨立ヲ維持スル任ニ當ルモノナリ故ニ憲法第五十八條ハ裁判  
官ノ地位ヲ保證シテ曰ク「裁判官ハ法律ニ定メタル資格ヲ具フル者ヲ以テ之ニ  
任ス」裁判官ハ刑法ノ宣告又ハ懲戒處分ニ由ルノ外其職務ヲ免セラル、コトナ  
シ「懲戒ノ條規ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム」ト故ニ裁判官ハ其任官終身ニシテ 天皇  
ノ大權モ容易ニ之ヲ侵スコトヲ得サルモノトス蓋シ裁判官ニシテ容易ニ轉免

セラル、コトヲ得ルニ於テハ人情其地位ニ掛念スルノ結果一身ノ安危ニ制セ  
ラレテハ權勢威武ノ奴トナリテ公平無私ノ裁判ハ得テ望ム可キニ非サルカ故  
ニ司法權獨立ノ實ヲ擧ケンニハ之カ機關タル裁判官ノ地位ヲ安全ナラシムル  
ニ如クハナシ本法第六十七條及第七十三條ハ即チ此憲法ノ旨趣ヲ貫徹セシ  
ムル所以ノモノニ外ナラス

此故ニ終身官タル裁判官ハ刑事裁判ノ宣告又ハ懲戒處分ニ依ルニアラサレハ  
其意ニ反シテ轉官、轉所、免官、停職、減俸セラル、コトナン刑事裁判ノ宣告ニ由リ  
テ其職ヲ失フハ固ヨリ當然ナリトス懲戒處分ハ裁判官タル者其職務上ノ義務  
ニ違背シ又ハ職務ヲ怠リタルカ官職上ノ威嚴又ハ信用ヲ失フヘキ所爲アリタ  
ル場合ニ於テ之ヲ行フモノニシテ其之ヲ行フニハ懲戒裁判ノ手續ニ依ラサル  
可カラス(明治二十三年八月法律第六十八號判事懲戒法參照)

尤モ轉所ニ至リテハ懲戒ノ處分ニ出テサルモ事實上ノ必要ヨリ之ヲ命セサル  
可ヲサル場合アリ即豫備判事ヲ以テ欠員ヲ補充スルノ必要アル場合ニシテ蓋  
シ豫備判事トシテ勤務中ノ者ニ在テハ本來他ノ欠位ヲ補フ爲メニ備フルモノ

終身官タルノ結果

ナレハ時ニ轉所ヲ命セラル、事アルモ是レ豫備判事タル者ノ當然任補上ノ便宜ニ出ルモノト云ハサルヲ得ス(第七十三條末段)

裁判官カ終身官タルヨリシテ左ノ如キ結果ヲ生ス可シ

第一 判事ノ職タルニ智能的ノ活動ヲ以テ事ニ當ルモノナレハ其身体若クハ精神ノ衰弱ニ依リテ其職務ニ堪ヘサルコトアラシ然レトモ之ヲシテ服職セシムルモ益ナシトテ免官スルハ違憲ノ行爲ナリ故ニ此輩ニ對シテハ司法大臣ハ控訴院又ハ大審院總會ノ決議ニ依リ之ニ退職ヲ命スルコトヲ得(第七十四條)其退職ハ敢テ判事タルノ官ヲ免スルモノニ非ス

第二 新ニ法律ヲ以テ裁判所ノ組織ヲ變更シ若クハ之ヲ廢シタル場合ニ於テ其在勤セシ判事ヲ補スヘキ欠位アラサルトキハ司法大臣ハ之ニ俸給ノ半額ヲ與ヘテ其欠位ヲ待タシムルノ權ヲ有ス(第七十五條)

若シ此規定ナカラシカ判事ハ終身官ナルヲ以テ實際其職務ニ與ラサル場合ニ於テモ猶官等ニ俸給ヲ支給セサルヘカラス斯クテハ國庫ノ經濟ニ容易ナラサル影響ヲ及ホスカ故ニ司法大臣ニ半額ノ俸給ヲ與ヘテ其欠位ヲ待

判事ノ任補

タシムルノ權ヲ與ヘタリ然レトモ行政官吏ニ在テハ大ニ之ニ反シ若シ其奉仕スル官廳ニシテ法律ヲ以テ變更又ハ廢止セラレ其職員ニ冗餘ヲ生スルトキハ悉ク其職務ヲ解カルヘシ是レ亦判事タル終身官ト行政官トノ間ニ其趣ヲ異ニスル一端ヲ窺知スルニ足ル

判事ノ任補

判事ノ任補ニ付テハ大審院控訴院地方裁判所及ヒ區裁判所トノ間ニ異ナル所アルヲ以テ以下之ヲ四箇ニ區別シテ講説セントス

第一 大審院長各控訴院長及大審院部長ノ任補

大審院長ハ帝國最高等裁判所長ニシテ其任務ノ重且大ナル司法權ノ獨立法律ノ統一ハ專ラ大審院ニ依テ發表セラル、モノナレハ之ニ長タル判事ヲ選任スルニハ最モ鄭重ニシテ其人ヲ得ルニ務メサルヘカラサレハ之カ任補ニ付テハ天皇自ラ勅任判事中ヨリ其任ニ耐ユヘキモノヲ拔擢シテ之ヲ補シ給ヒ各控訴院長及ヒ大審院ノ部長ハ司法大臣ノ上奏ヲ待テ之ヲ補職セラレ(第六十八條廿三年勅令第五百十八條)

## 第二 大審院判事ノ任補

大審院判事ハ裁判權實行ノ最上位ヲ占ムルモノナレハ若シ一タヒ其裁判ヲ誤ルコトアラシカ後來ニ其害ヲ遺シ人民權利ノ伸暢ニ重大ナル關係アルヲ以テ其能ク法理ニ通曉シ司法事務ニ練達ノ士ヲ擧ケサルヘカラス故ニ大審院判事タルニハ十年以上判事ノ職ニ在リシ者又ハ十年以上檢事若クハ帝國大學法科教授若クハ辯護士ニシテ判事ニ任セラレタル者タルヲ要ストセリ(第七十條)

## 第三 各控訴院判事ノ任補

各控訴院判事ハ大院審判事ニ比シテ次位ノ裁判官ナリト雖モ亦裁判權實行ニ付テハ上級審ニ位スルヲ以テ之レカ判事タルモノハ亦其辨識ト經驗ハ地方裁判所以下ノ判事ニ比シテ大ニ優ラサルヘカラス此ヲ以テ其判事タルニハ五年以上判事ヲ奉シタル者又ハ五年以上檢事若クハ帝國大學法科教授及ヒ辯護士ニシテ判事ニ任セラレタルコトヲ要セリ(第六十九條)

## 第四 地方裁判所及ヒ區裁判所判事ノ任補

降テ地方裁判所又ハ區裁判所ニ在テハ第二回競争試験ニ及第シ判事ニ新任セ

ラレタル者又ハ三年以上帝國大學法科教授及ヒ辯護士ノ職ニ在リシ者ヲ以テ直ニ其判事ハ任用セララルコトヲ得(第六十五條)

以上各項ノ年數算定ニ付テハ其補職ノ當時マテ同一ノ職務ニ從事シタルコトヲ必要トセス故ニ初メ法科大學教授タリシ者辯護士ト爲リ終ニ判事ト爲ルノ日其年數ヲ通シ其各項ノ年數ニ該當セハ可ナリ(第七十一條)

各判事ハ在職中其官等ニ從ヒ一定ノ俸給ヲ受ク(第七十六條及ヒ明治二十四年七月勅令第三百三十四號判事檢事俸給令)一タヒ支給セラレタル俸給額ハ判事ノ意ニ反シテ減殺セラルコトナシ是レ本法第七十三條ニ明記スル所ナリ

茲ニ於テカ一問題アリ即チ新ニ勅令ヲ以テ既存ノ俸給額ヲ減少シタルトキハ判事ハ之ニ不服ヲ唱フルコトヲ得ルヤ否是ナリ第七十三條ノ明文ニ依レハ判事ハ一タヒ定メラレタル俸給額ハ後ニ命令ヲ以テ其額ニ變更ヲ來タサシムルモ其意ニ反シテ之ヲ減少セラルコトナキカ如シ然レトモ元來俸給額ノ取極ヲ爲スハ一ニ勅令ノ自由ニシテ(第七十六條)毫モ本法ノ預ラサル所勅令カ認メテ高額ニ失スルトモハ隨時ニ之カ變更ヲ爲シ得ヘキ勿論ナレハ勅令カ一般ニ

判事ノ俸給額ヲ減少シタルトキハ判事ハ之ニ不服ヲ唱フルコトヲ得ス第七十三條ノ規定ハ只或ル特定ノ判事ノミニ係ル減俸ノ場合ニ適用スヘキ規定ニシテ一般ニ俸給額ヲ減少セラル、場合ハ毫モ第七十三條ノ精神ニ違フモノニアラス

判事ハ懲戒ノ取調又ハ刑事訴追ヲ初メタルカ故ニ停職シタルトキト雖モ尙引續キ一定ノ俸給ヲ給ス是レ他ナシ判事ニ失職又ハ犯罪ノ嫌疑アリトスルモ未タ其取調ノ結了セサル間ハ果シテ其失職又ハ犯罪アリタルコトヲ確知スヘカラサルヲ以テ其判事タル資格官等ニ傷クル所ナシ其資格官等ニ傷クル所ナケレハ之ニ俸給ヲ支給スルハ當然ナリ(第七十三條第二項第七十八條)

判事ノ職務ト抵觸事項

判事ハ裁判權ノ衡平ト威嚴トヲ保タサルヘカラス若シ其在職中或ハ情勢ノ爲メニ或ハ政治思想ノ爲メニ裁判ノ公正ヲ欠キ其職ヲ曠フスルカ如キ行爲アラシカ司法權ハ是ヨリ崩レ遂ニ立法ノ精神ヲ紊亂スルニ至ルハ免ルヘカラス此ニ至テ司法權ヲ獨立セシメ判事ヲ終身官ト爲シタルハ司法權ヲ維持スルノ目

判事ノ職務ト抵觸事項

的ナルニ却テ之ヲ崩壞スルノ媒介タラントス故ヲ以テ此等ノ嫌アル行爲ハ法律ヲ以テ嚴ニ之ヲ制限スルノ必要アリ是故ニ本法第七十二條ハ判事ノ職務ト抵觸スル事項ヲ列記シ判事ハ在職中之ニ與カルコトヲ得ス

一 政治上ニ關係スル事

二 政黨ノ黨員又ハ政社ノ社員ト爲リ又ハ府縣郡市町村議會ノ議員ト爲ルコト

三 俸給アル又ハ金錢ヲ目的トスル公務ニ就ク事

四 商業ヲ營ミ又ハ其他行政上ノ命令ヲ以テ禁シタル業務ヲ營ム事

第一第二項ニ規定スル所ノ者ハ裁判官ノ獨立ヲ保ツニ政黨ニ左右セラル、ノ恐ヲ避クル爲メニシテ自己ノ政治上ニ干與シタル意見ハ之ヲ裁判上ニ及ボサントシ又其反對者ヲ攻撃スルノ極途ニ訴訟ノ勝敗ニ及フカ如キハ蓋シ人情ノ免レサル所ナレハ判事ニシテ政治上ニ干與シ又ハ議員トナルトキハ果シテ公明平正ノ裁判ヲ下シ得ルヤ疑ナキ能ハス故ニ法律ハ之ヲ禁止セリ帝國議會ノ議員ニ關シテハ本法之ヲ規定セサルモ議院法第九條ニ於テ之ヲ禁セリ亦同一理ニ出ツ其第三第四ノ行爲ハ重ニ金錢上ノ利益ヲ目的トスル行爲ニシテ金錢



上ノ利慾ハ大ニ人心ヲ眩惑セシムルモノニシテ其害ノ裁判權ニ及フノ影響亦前者ニ讓ラサルヘキナリ  
然レトモ或ル公益ヲ專務トスル協會若クハ慈善ノ目的ニ起ル事務ニ關シ又ハ學藝ヲ教授スル等ノ如キハ本項ノ制禁スル所ニアラス例ヘハ判檢事諸君カ本校其他ニ於テ公務ノ傍ラ學生諸子ニ法學ヲ講説スルカ如キハ適例ナリ

### 第三章 檢事

檢事ハ行政機關ノ一部ニシテ社會公益ノ代表者トシテ法律ノ執行ヲ監視シ又ハ司法及行政ノ事務ヲ監督スル任アル官吏タルコトハ前編裁判所及檢事局組織ヲ講述スル際既ニ説明ヲ與ヘタル所ナリ夫レ然リ檢事ハ公益ヲ保護シ及ヒ法律ノ嚴格ニ適用セラルハ否ヲ監視スルノ一官憲ナレハ刑事ニ關シテハ常ニ原告ノ地位ニ立チ亦民事訴訟ニ在テハ職務上意見ヲ述フルノ必要アルトキハ通知ヲ求メ其公開ニ立會フ(第六條刑事訴訟法第一條及民事訴訟法第四十二條)然レトモ檢事ハ如何ナル方法ニ依ルモ裁判事務ニ干涉シ又ハ裁判事務ヲ取

扱フコトヲ得ス若シ此訟求者タル檢事ニ裁判ヲ爲スノ權ヲモ兼子シムルトキハモンテスキュー氏ノ謂ヘル如ク其裁判官ハ正ク壓制官吏トナリ了ル可ク斯クテハ裁判ノ獨立公平ヲ恃ム可カラサルニ至レハナリ(第八十一條)  
第八十條ニ曰ク「檢事ハ刑法ノ宣告(宜シク刑事裁判ノ宣告ト解スヘシ)又ハ懲戒ノ處分ニ由ルニ非サレハ其意ニ反シテ之ヲ免職スルコトナシ」ト蓋シ檢事カ其職務ヲ行フニ當テハ他ノ行政官ト等シク上官ノ指揮命令ニ服従スヘキモノニシテ是レ裁判官ト大ニ其趣ヲ異ニスル所檢事ノ職制上自ラ然ヲサルヲ得サル所ナリト雖モ而モ檢事ハ公益ノ代表者トシテ社會ノ公安ヲ保維スルノ任務ヲ負フモノナルカ故ニ此重大ナル任務ヲ完フセンニハ他ノ一般行政官ト異ナリテ亦其地位ヲ保証シテ安全ナラシメサル可ラス是レ此規定アル所以ナリ  
然レトモ是ヲ以テ直ニ檢事モ亦裁判官ト同シク終身官ナリトスルハ大ナル誤ナリ獨乙學者間ニハ此點ニ付キ多少ノ議論アリト雖モ我構成法ハ決シテ檢事ヲ以テ終身官ナリトスルモノニ非ス本法第八十條カ檢事ヲシテ其意ニ反シテ或ル特例ノ場合ヲ除ク外免職スルコトナシトセシハ前述ノ如ク檢事ハ行政官

憲ノ一部ナリト雖モ主トシテ裁判事務ノ執行又ハ監視等ニ當リ其任務重大ナルカ故ニ其地位ト職分ニ優遇スル所ナケレハ安シテ其職分ヲ盡スヲ得サルヘク從テ公益保護ノ完キヲ得サルヲ憂ヒ此規定アルニ至リタルモノニ外ナラス元來我國体上官吏ノ任免ハ 天皇ノ大權ニ屬シ何人ト雖モ之ニ干涉スルヲ得サルハ大憲ノ明言スル所ナリ然レトモ裁判官ハ司法權ノ司持者ニシテ而モ司法權ノ獨立ヲ圖ルハ一ニ裁判官ヲ待テ初メテ其實跡ヲ顯ハスヘク而シテ其事務タルヤ專ラ吾人權利ノ得喪ニ關スル重大ノ者ナルカ故ニ之ヲ取扱フ裁判官ヲ終身トシ其職分ヲ泰山ノ安キニ置カサレハ到底司法權ノ獨立公平ヲ維持スル能ハサルヨリ憲法ヲ以テ明ニ其終身官ナルコトヲ確保シ任免ノ大權ト雖モ特例ノ場合ヲ除ク外之ニ及ハサルコトヲ示セリト雖モ檢事ハ之ニ異ナリテ其職分トスル所ハ直接ニ吾人ノ權利ニ關係スルモノニ非スシテ寧ロ司法權ノ傍ニ在リテ公益ヲ代表シ公安ヲ維持スルニ在リ他ノ行政官ニ比シテ一步其地位ヲ保證スルノ要アリトスルモ之ヲ以テ裁判官ト同等視ス可キニ非ス故ニ憲法カ敢テ之ヲ保證セサルノミナラス檢事ハ懲戒處分ニ由ルニ非サレハ免職セラ

ハ免職セララルハコトナシト云フモ其懲戒處分ハ純然タル行政上ノ處分ニ屬シ敢テ裁判官ノ如ク懲戒裁判ノ手續ニ由ルモノニ非ス加フルニ裁判官即チ判事ニ關シテハ第七十四條第七十五條ノ如キ規定アルモ檢事ニ關シテハ斯ノ如キ規定ナキノミナラス本法カ檢事ノ地位ヲ保證スルハ免職ノ一事ニ過キス轉所轉官ノ如キニ至リテハ全ク上長官ノ權内ニ存スルモノタリ是レ皆以テ檢事ノ終身官ニアラサルコトヲ知ルニ足ラン

檢事ノ職  
務

檢事ノ職務

檢事ハ公益ノ代表者トシテ犯罪者ニ對シ公訴ヲ提起シ法律ノ正當ナル適用ヲ請求シ及ヒ判決ノ適當ニ執行セラルハヤヲ監視シ又民事訴訟ニ於テ其意見ヲ述フルノ必要アリト認ムルトキハ裁判官ニ對シ審理公開ノ時通知ヲ求メ其公庭ニ臨テ意見ヲ述フルコトヲ得其前者ノ目的ハ若シ犯罪者アルモ公訴ヲ起サス之ヲ等閑ニ付スルトキハ社會ノ安寧得テ期ス可カラズ法律ノ正當ナル適用ヲ請求シ判決ノ適當ニ執行セラルハヤヲ監視セサレハ貴重ノ法律モ遂ニ徒法タルニ至ルヘケレハ檢事タル職任アルモノハ社會公益ノ代表者タル責任ヲ以

テ此職分ニ當ラサルヘカラス其第二ニ屬スルモノハ當事者ノ權利枉屈ノ係ル所其他結婚離婚及ヒ人事上ノ訴訟等皆是レ公ノ秩序ニ關スルモノナルカ故ニ社會公益ノ代表者タル檢事ニ於テ權利保護ノ爲メニ其意見ヲ述フルハ大ニ必要ナリ

檢事ハ其事務取扱ニ付テハ同一体ナリトノ法律上ノ觀念ニ基キ共助ノ方法アリ即チ檢事總長(大審院ニ附置セラレタル檢事局ニ於ケル長官)檢事長(各控訴院ノ檢事局ニ長タルモノ)檢事正(各地方裁判所ノ檢事局ニ長タルモノ)ハ其各管轄區域内ノ裁判所ノ檢事ノ職務ノ範圍内ニ在ル事務ヲ自ラ取扱フ權アルノミナラス又是等上級檢事ハ其管轄區域内ニ於ケル或ル檢事ノ行フヘキ事務ヲ他ノ檢事ニ移シ之ヲ取扱ハシムル權ヲ有ス(第八十三條)是等事務分配ノ指揮ハ皆以テ事務上ノ失誤滯滞ヲ防クニ出ル所ニシテ實ニ檢事ハ一心異体ナリトノ原則ノ適用ニ外ナラス

而シテ檢事は等諸種ノ職務ヲ行フニ當リテハ悉ク躬自ラ之ニ當ルヲ得サルコトアルヘシ蓋シ社會万般ノ事變ニ應スルニ有數ノ人ヲ以テ當ランコトハ云フフヘクシテ實行スルヲ得サル所ナレハ其命令ノ下ニ活動スルノ機關ヲ得テ敏速ニ事ニ處シ變ニ應スルノ企ナカルヘカラス故ヲ以テ司法警察官ナルモノヲ檢事ニ從屬セシメ當ニ其命令ヲ執行セシム而シテ之カ撰任ハ司法省又ハ檢事局及内務省又ハ地方廳ハ協議シテ警察官中各裁判所ノ管轄區域内ニ於テ司法警察官トシテ勤務スヘキ者ヲ定ム(第八十四條)

尤モ司法警察官トシテ其職務ヲ行フモノハ獨リ警察官ノミニ止マラス林務官ノ如キ村長ノ如キ亦司法警察官ノ事務ヲ行フコトアリ(刑事訴訟法第四十七條)

檢事ノ官等及任補

檢事ノ官等及任補  
檢事ハ其官等判事ト同シク勅任又ハ奏任トス其任補ノ順序ハ檢事總長及ヒ檢事長ノ職ハ司法大臣ノ上奏ニ因リ勅任檢事中ヨリ之ヲ補シ其他ノ檢事ハ司法大臣之ヲ補ス唯之ヲ判事ニ比シテ異ナル所ハ既ニ述ヘタル如ク判事ハ一定ノ年限ヲ經ルニ非サレハ控訴院大審院ニ入ルヲ得サルモ檢事ニ至テハ全ク此制限ナキニ在リ然レトモ進級ハ判事ト同一ノ法則ニ依ラサルヘカラス

## 第四章 書記

書記ハ上官ノ命令ニ從ヒ專ラ訴訟記録ノ調製文書ノ整理及ヒ保存、金錢出納ノ事務ヲ取扱フ官吏ニシテ裁判所ノ構成ニ欠クヘカラサル職員ナルヲ以テ各裁判所及ヒ其檢事局ノ事務ノ繁閑ヲ計リ相當員數ノ書記ヲ置クノミナラス(第八條第九十一條及明治二十四年七月勅令第三百三十五號)尙區裁判所ノ各判事及合議裁判所ノ各部ニ一人以上專屬書記ヲ置キ專ラ此等ノ事實ヲ取扱ハシム而シテ二人以上書記ヲ使用スル部若クハ書記課ニ於テハ其事務分掌上之カ指揮監督ヲ爲スモノナケレハ事務取扱ノ整秩ヲ失ヒ從テ事務澁滞ノ恐アルカ故ニ地方裁判所ノ書記課ニ監督書記ヲ置キ控訴院及大審院ノ書記課ニ書記長ヲ置キ亦區裁判所及ヒ檢事局ノ書記課ニ二人以上ノ書記ヲ置キタルトキハ其一人ヲ監督書記トシテ之ニ指揮監督ヲ掌ラシム而シテ其監督及ヒ指揮ヲ爲スニハ一ニ上官ノ命令ニ是レ依ルモノトス(第八十五條及第八十六條)

以下書記ノ任補及ヒ其職務ノ概要ヲ説カン

## 命書記ノ任

## (甲) 書記ノ任命

書記ニ任セラレンニハ(第一)先ツ一定ノ試験ニ及第シタル後(第二)區裁判所及地方裁判所又ハ其檢事局ニ於テ其所屬長官(即地方裁判所長若クハ檢事正又ハ區裁判所ノ一人ノ判事若クハ監督判事或ハ檢事)ヨリ定メラレタル事務見習ノ指揮監督者ニ從ヒ二ケ年ヨリ短カラサル期間事務練習ヲ爲スヲ要ス(第八十九條明治二十四年五月司法省令第四號裁判所書記登用試験規則第十條及同第十二條明治二十年七月勅令第四十七號文官試験規則第三十五條參照)

此二要件ヲ具備スルモノヲ以テ司法大臣ハ書記ニ任補スルモノトス(第八十八條)然レトモ裁判所書記ニモ又員數ニ制限アルカ故ニ單ニ試験ニ及第シ及ヒ事務練習ヲ終ヘタルノミヲ以テ直ニ書記ニ任用スルヲ得ス必ス其欠位ナカレヘカラス(二十四年勅令第三百三十五號)此欠位ナキ間ハ豫備書記トシテ臨時ニ勤務ヲ命セラル、コトアリ(第九十條)豫備書記ハ其臨時勤務ヲ爲ス場合ニ於テハ豫備判事檢事ノ如ク代理タル資格ニ於テ事務ヲ取扱フモノニアラス純然タル書記トシテ其任務ニ當ルモノトス(第九十三條)

余ハ茲ニ至テ書記見習ト司法官試補トノ間及ヒ豫備判事檢事ト豫備書記トノ間ニ其事務取扱上ニ於テ常備トシテ之ニ當ルト及ヒ第二回試験ヲ經ルノ要否ニ付キ一言ノ注意ヒサルヘカラサルモノアリ即チ司法官試補カ本官ニ任セラレハニハ第二回ニ於テ事務練習ノ成績ノ試問ヲ究フセサルヘカラサルニ書記見習ニ至リテハ別ニ試験ヲ要セス只一定ノ年限間事務ヲ見習ヒタルコトヲ以テ足レリ又豫備判事トシテ勤務中ノ者カ裁判事務ニ與ルハ代理トシテ攝行スルモノナルニ豫備書記ハ純然タル書記トシテ事務取扱ヲ爲スモノトス要スルニ此差異アルハ其職務ニ輕重難易ノ別アルカ故ナリ

書記ノ職

(乙) 書記ノ職務

書記ハ訴訟記録ノ調製保存ヲ掌ル裁判所ノ一要職ニシテ常ニ上官ノ命令ニ從ヒテ活動スルモノトシ故ニ裁判所ノ開廷ニ於テハ裁判長ノ命令ニ從ヒ又判事一人即チ區裁判所ニ於ケル單獨裁判ノ場合ニハ其判事ノ命スル所ニ從ヒ又書記カ檢事局ニ勤務スルトキ若クハ臨檢檢証ニ從フ等特別ナル事務ノ取扱ヲ爲ストキニ當テハ受命判事若クハ主務判事又ハ檢事ノ命令ニ從ヒ進退スヘキ

モノトス(第九十一條第一項及ヒ第二項)此他書記ノ事務取扱方法ハ書記ニ關スル規則ヲ以テ司法大臣適宜ニ之ヲ定ム(同條第五項)

書記カ其職務ノ範圍内ニ於テ取扱ヒタル事柄ハ既ニ定リタル事務ノ分配上ヨリシテ其事カ他ノ書記ニ屬スヘキ事務タリシ事實アルモ單ニ之カ爲メニ其效力ヲ失フコトナシ(第八十七條)本來事務分配ノ事ノ如キハ裁判所部内ニ在テ事務ノ整理上便宜ノ爲メ設ケタル分擔法ナレハ甲書記ニ屬スル事務ヲ乙書記カ取扱ヒレトテ毫モ其職權ヲ侵害スルモノニアラス從テ其効力ヲ他ニ及ホサレハナリ然レトモ其他ノ書記カ取扱上ニ失誤アルトキハ其取扱ハ無効ナリトス若シ之ヲシテ有効ノモノトセンカ其事務ヲ受繼テ書記ハ失誤ノ判然タルニモ拘ハラス尙之ヲ續行セサルヘカラサルノ不都合ヲ來セハナリ是法文ニ「其事ノ他ノ書記ニ屬シタル事實」云々トアル所以ナリ

斯ノ如ク書記ノ職務ハ一舉一動皆其上官ノ指揮ニ從ヒ活動スルモノナリト雖モ又一方ニ書記ハ裁判官ノ職務カ公平ニ行ハレタルコトヲ證スル權力及ヒ訴訟上書記ノ専決スル事務ノリ書類ノ送達若クハ判決確定ノ證明(民事訴訟法第

百三十六條同第四百九十九條及ヒ判決正本ヲ下付スルカ如キ是レナリ此職權内ニ關スル事柄ハ上官ト雖モ之ヲ侵スコトヲ得ス即チ書記ノ取扱フ事務ニシテ最モ重要ナルモノハ當事者ノ口述ノ書取又ハ審問書類及ヒ記録等トス此等ノ書類ヲ變更シ又ハ調製スヘキ命令ニシテ書記ハ其命令ヲ正當ナラスト認ムルトキハ其書類ニ自己ノ意見ヲ記シテ之ヲ添フルコトヲ得ヘシ是レ書記ノ正當ナラストスル點或ハ裁判上ニ大影響ヲ及ホスヤ知ルヘカラサルヲ以テ自己ノ意見ヲ記シ訴訟記録ニ添付シテ主任官ノ參考ニ供シ以テ裁判ノ公平ニ行ハレタルヤ否ヲ知ラシムニ在リ(第九十一條第四項)

### 第五章 執達吏

執達吏ハ官吏ナルヤ將タ公吏ナルヤニ付テハ今日ニ於テ尙未決ノ問題ニ屬ス執達吏ヲ公吏ナリトスル論者ハ曰ク

抑モ官吏トハ國家行法權ノ機關ニシテ一定ノ俸給ノ下ニ勞役ニ服スルノ役員ナリ憲法第十條ニ曰ク「天皇ハ行政各部ノ官制及ヒ文武官ノ俸給ヲ定メ及

執達吏ノ性質

ヒ文武官ヲ任免ス」ト故ニ官吏ノ任免ハ天皇ノ大權ニ屬スルノミナラス官吏トシテハ一定ノ俸給ヲ受ケ而シテ其俸給ヲ定ムルハ天皇ノ大權ニ屬スルコト明ナリトス然ルニ彼レ執達吏ニ至リテハ政府ヨリ俸給ヲ受ケス唯其勞務ノ報酬トシテ依頼者ヨリ手数料ヲ受クルニ止ル此一事既ニ其官其官吏ト稱スル能ハサルヲ知ルニ足ル且ツ夫レ執達吏ハ自ラ設立スル役場ニ於テ其職務ヲ執ルモノニシテ一般官吏ト其職務ノ手續ニ於テ異ナルノミナラス執達吏規則第二十二條ニ據ルニ執達吏ハ此規則ニ依ルノ外總テ一般官吏ノ例ニ依ルトアリ若シ其本性ニ於テ官吏タラハ特ニ此條文ヲ挿入スルノ必要ナシ全ク無用ノ贅文ト云ハサルヲ得然レトモ執達吏ノ取扱フ所ハ敢テ一私ノ業務ニ非スシテ公共ノ事ニ屬スルヤ勿論ナルカ故ニ一私人ニ非サルコト明ナリ一私人ニ非ス官吏ニ非ストセハ其取扱フ事務ノ性質ヨリシテ之ヲ公吏ト見ルハ當然ナリト

之ノ官吏ナリトスル論者ハ曰ク

執達吏ノ職務トスル所ハ裁判ノ執行其他當事者若クハ裁判所及檢事局ノ命

令委託ニヨリテ書類ヲ送達シ若クハ拒證書ヲ作ルカ如キ専ラ公認ノ事務ニ當ルノミナラス共事務ハ實ニ裁判事務ノ一部ニ屬スルモノニシテ之ヲ取扱フ執達吏ハ即亦國家行法權ノ機關タルニキカ故ニ其官吏タルニ於テ疑アルヘキニ非ス且ツ夫レ官吏ト一私人トノ間ニ公吏ト稱スル一種ノ役員アリトスルハ未ダ國法學ノ發達セサル往時ニ於ケル陳腐ノ學說ニ屬ス政府ノ任命監督ノ下ニ公共ノ事務ニ當ルモノハ須ラク皆官吏ト看サル可ラス反對論者ハ或ハ俸給ヲ受ケヌトカ或ハ事務ヲ取扱フニ官署ニ於テセサルコトヲ援用セリト雖モ其俸給ヲ受ケヌシテ手数料ヲ以テ報酬ト爲スハ是レ實ニ政府ヨリ俸給ヲ支給スル代リニ一種ノ方法ヲ設ケタルニ過キスシテ其方法ノ異ナルカ爲メニ官吏タル性質ニ變更スヘキ理由ナキノミナラス執達吏規則第九條ニ依リ其収入ニ不足アルトキハ或ル一定ノ額ニ滿シ迄國庫ヨリ不足額ノ補助ヲ爲スコトアルヲ見ルモ亦執達吏ノ報酬ハ俸給支給ノ一變例タル事ヲ推知スルヲ得ヘシ又自ラ設置スル役場ニ於テ職務ヲ行フモ畢竟其職務ヲ行フ場所ヲ異ニスルニ止リ其職務カ裁判所ノ職務ナル以上ハ之ヲ行フ場所

ノ如何ニ依リ區別スヘキ理由ナシ加之其自設スル場所モ隨意ニ設クルモノニアラスシテ實ニ執達吏規則第六條ノ命スル所ナリ  
又執達吏規則第二十二條ノ規定ノ如キハ決シテ論者ノ言ノ如ク執達吏ヲ官吏ニ非スト看做シタルカ故ニ非スシテ之ヲ官吏ナリト看做スヨリシテ一般官吏ノ規定ニ據ラシメタルモノト解スルコトヲ得可シ立法者カ時ニ無用ノ條項ヲモ注意迄ニ挿入スルハ決シテ稀有ノコトニ非ス其他同則第二十一條ニ執達吏カ恩給ヲ受ケル等ノ規定ハ皆是レ執達吏カ官吏タルノ故ヲ以テ然ルノミト  
予ハ敢テ此問題ニ付キ深ク其當否ヲ論究セサル可シト雖モ我構成法ノ規定ニ付テ觀ルトキハ立法者カ執達吏ヲ以テ一ノ官吏ト爲セルハ掩フ可カラサルモノ、如シ立法者ハ第二編ニ題シテ「裁判所及ヒ檢事局ノ官吏」トシ而シテ執達吏モ亦其編中ニ列記セルハ之ヲ以テ司法事務ニ從事シ裁判所ヲ組織スル一ノ官吏ナリト爲セルモノト見サル可ラス  
執達吏ノ制度ハ今日ニ於テ實ニ非難ノ燒點タリ新聞雜誌ノ之ヲ喋々スルノミ

ナラス現ニ帝國議會ニモ亦之カ改正案ヲ提出スルヲ見ルニ至ンリ蓋シ世論カ  
執達吏ノ弊害トシテ蓋々スル所ハ要スルニ

(一) 勉メテ債權者ノ歡心ヲ買ハンカ爲メニ債務者ニ對シテ苛酷ナル措置ヲ爲  
スコト

(二) 債務者ト結托シテ債權者ヲ害スルコト

ノ二點ニ存シテ此般ノ弊害ヲ見ルニ一ニハ執達吏ハ俸給ニ衣食セスシテ  
事件ノ上ニ報酬ヲ受クルカ故ニ勉メテ依頼ノ多カラシムコトヲ望ムトニハ直  
接ニ官廳ノ下ニ隸屬セス半ハ隸屬シ半ハ獨立スル中間ノ地位ニ在ル者ナルカ  
故ニ監督ノ途十分ナラサルトニ職由スルモノト云フニ在リ實際上ノ問題トシ  
テハ大ニ論究スヘキ所ナルヘシ

(甲) 執達吏ノ任用

執達吏ハ各區裁判所ニ相應ナル員數ヲ置ク(第九十四條)其任用ハ司法大臣之ヲ  
爲シ又司法大臣ハ控訴院長ニ其管轄區内ノ裁判所ノ執達吏ヲ任シ及ヒ補スル  
ノ權ヲ委ヌルコトヲ得(第九十五條)

執達吏ノ  
任用

執達吏ニ任セラレシニハ或ル資格ヲ具備シ且ツ一定ノ試験ヲ經サルヘカラス  
先其資格ヨリ説明セン資格ニ又積極ト消極トアリ

積極的資格即チ前ニ説明セシ所謂有的資格ニシテ其任用セラレヘキ者ニ必ス  
備ハラサルヘカラス

(一) 年齒滿二十五歲以上ナルコト

(二) 陸海軍ノ現役ヲ終ヘ又ハ之ヲ免セラレタルコト

(三) 身體健全ナルコト

(四) 家計ノ整理シタルコト

(五) 品行方正ナルコト

是ナリ

消極資格トハ即チ無的ノ事項ニ屬シ其一項ニタモ抵觸セサルコトヲ要ス

(一) 重罪ヲ犯シタル者 但シ國事犯者ニシテ復權ヲ得タルモノハ此限ニアラ  
ス

(二) 定役ニ服スヘキ輕罪ヲ犯シタルコト



(三) 身代限ノ處分ヲ受ケ負債ノ義務ヲ免レサルコト  
(四) 懲戒ノ處分ニ由リ免職セラレタルコト

以上ノ資格ヲ具ヘ又ハ牴觸セサル者執達吏ニ任用セラレンニハ一定ノ試験ヲ經ルヲ以テ本則トス而シテ受験者ハ其試験ヲ受クルノ前少クトモ六ヶ月間區裁判所ニ於テ主トシテ執達吏ノ職務ヲ修習シ傍ラ書記ノ職務ヲモ修習シタルコトヲ要ス而シテ豫メ此修習ヲ爲サントスル者ハ控訴院長ニ願出其許可ヲ受クヘシ許可アリタルトキハ區裁判所ノ一人ノ判事若クハ監督判事ハ授業ヲ擔當スヘキ執達吏及裁判所書記ヲ選定シテ職務ノ訓導ヲ爲サシム此訓導ヲ受ケツ、アル修習者ハ其職務上ノ秘密ヲ漏洩ス可ラス(執達吏登用規則第三條第四條及ヒ第五條參照)若シ此修習中ニ在ル者ニシテ其行狀執達吏トナルニ不適當ナルトキハ其修習ヲ止ムルコトヲ得ヘシ  
而シテ其修習六ヶ月ヲ終ヘタル者ハ(一)以上ニ説明セシ資格ニ欠缺ナク若クハ抵觸セサル事ヲ證シ及ヒ(二)其修習ノ終了シタル事ヲ證明シ登用試験願書ヲ區裁判所ノ一人ノ判事若クハ監督判事ヲ經由シテ控訴院長ニ差出スヘシ控訴院

長ハ此書願ヲ調査シ試験ノ許否ヲ定ム(執達吏登用規則第十條)

而シテ其試験ヲ受クルノ許可ヲ得タルモノハ執達吏規則第十二條ニ掲クル科目ニ付キ試験ヲ受クヘシ而シテ此試験ハ毎年一回各地方裁判所ニ於テ之ヲ行フモノトス

然レトモ或ル種類ノモノニ限り特ニ試験ヲ要セスシテ執達吏トナルコトヲ得可シ是登用規則第二十條及同則第二十二條ニ規定スル所ノ者ニシテ法律ハ此種ノ者ヲ以テ執達吏タルニ十分ナル學識ヲ具有スルモノト看做スニ由ル即チ左ノ如シ

- (一) 官立府縣立中學校又ハ之ト同等ナル官立府縣立學校、司法省法學校又ハ帝國大學ノ監督ヲ受ケタル舊私立法學校及文部大臣ノ認可ヲ經タル學則ニ依リ法律學ヲ教授スル私立學校、卒業證書ヲ有スル者
- (二) 裁判所書記ノ登用試験ニ及第シタル者
- (三) 判任官以上ノ職ヲ現ニ奉シ又ハ曾テ奉シタル者
- (四) 陸軍下士ニシテ文官奉職ヲ請願スルコトヲ得ル者

(五) 現ニ區裁判所ノ書記ヲ奉職スル者

以上五種ノモノハ即登用試験ヲ要セス執達吏ニ任用セラル、コトヲ得ルモノトス然レトモ第一乃至第四ノ者ニ在テハ尙其職務ノ修習ヲ爲スヲ必要トス(執達吏登用規則第二十一條)唯第五項ニ掲クル所ノ現ニ區裁判所ノ書記ヲ奉職スル者ニ在テハ別ニ職務修習ヲモ要セス直ニ任用セラル、コトヲ得  
右ニ陳フル所ノ資格ニ欠缺ナク亦抵觸セサル者ニシテ試験ニ及第シ又ハ試験ヲ要セサル身分ヲ有スル者ハ執達吏ノ欠員アル時ニ於テ執達吏ニ任用セラルヘシ

以上執達吏ノ任用ニ關スル手續ヲ概述セリ以下其職務ニ論及セン

執達吏ノ職務

(乙) 執達吏ノ職務

執達吏ノ職務ハ要スルニ訴訟書類ノ送達及ヒ裁判ノ執行ヲ爲スニ在リ(但シ裁判所ヨリ發スル文書ニシテ書記ニ直接又ハ郵便ヲ以テ送達セシムルノ特定アル場合ハ此限ニ非ス)尤モ刑事裁判ノ執行ニ至テハ元來司法警察官ノ專掌スル所ナレハ執達吏ハ單ニ罰金若クハ科料徴収ノ如キ公力ヲ要セサルモノヲ執行

スルニ過キス(第九十八條)民事訴訟法第三百三十六條第二項及ヒ第三項同第三百五十六條)左ノ外尙執達吏ハ當事者ノ委任ニ由リ(一)告知及ヒ催告ヲ爲シ(二)動産不動産ノ任意競賣ヲ爲シ(三)拒證書ヲ作り其他裁判所及ヒ檢事局ノ命令ニ由リテ其職務ニ應スル事務殊ニ書類物品ノ送付ヲ爲シ及ヒ沒收物品ヲ取上ケ若クハ賣却シ又令狀(此令狀ハ召喚狀ヲ云フモノ)ニテ拘引狀拘留狀ハ司法警察官ノ主トシテ執行スルモノナリ)ノ執行等ヲ爲スモ要スルニ其職務タル委任若クハ命令ニ由リテ初メテ之ヲ執行スルモノトス政ニ其職務ヲ行フハ恰モ商事ニ於ケル代辯人ノ如ク他人ノ依託ニヨリテ或ル事ヲ爲スヲ營業トスルモノ、如シ斯ル性質ノモノナルカ故ニ執達吏ハ法律規則ニ依リ又ハ裁判所及ヒ檢事局ノ命令ニ由リ若クハ當事者ノ委任アリタルトキハ正當ニ之ヲ執行シ得可カラサル理由ノ存スルニアラサレハ之ヲ拒絕スルコトヲ得ス若シ之ヲ拒絕スル正當ノ理由アリテ而モ之ヲ他ノ執達吏ニ代ラシムルコトヲ得サルトキハ其旨命令ヲ發シタル裁判所若クハ檢事局又ハ其委託本人ニ通知スヘシ若シ委任シタル本人ニ通知スル能ハサルトキ又ハ急速ノ處分ヲ要スルトキハ其旨ヲ區裁判所

ノ判事又ハ監督判事ニ報告スヘシ區裁判所ノ判事又ハ監督判事ハ此報告ヲ受ケタルトキハ其職務ヲ他ノ者ヲシテ攝行セシム(執達吏規則第十條第十條二及ヒ第十三條)

而シテ一區裁判所ニ數名ノ執達吏アルトキハ裁判所及ヒ檢事局ノ命令ニ依ル事務ト裁判判書記ヲ經テ委任スヘキ事務ヲ各執達吏ニ分配ス此分配方法ハ每年十二月區裁判所一人ノ判事若クハ監督判事其翌年ヲ定ム此事務配ノ事タル只事務ノ敏速ニ執行サレ得ヘキ便宜法ニ過キサルカ故ニ其効力ハ執達吏間ニ止リ毫モ外部ニ對シテ其効力ナシ從テ執達吏ノ爲シタル事務カ事務分配上他ノ執達吏ニ屬スヘキモノタルトノ事實ノミニテハ其効力ヲ失フコトナシ此事ハ既ニ書記ノ事務分配ノ章ニ說明セシ所ナレハ重子テ茲ニ贅セス(執達吏規則第七條及ヒ構成法第二百二十六條)

以上ノ事務ハ社會万般ノ事物増進スルニ從ヒ日々増加スルモノナレハ有數ノ執達吏ヲシテ其際限ナキ職務ニ當ラシメンハ到底實地ニ爲シ得ヘキ所ニアラサルヲ以テ此類劇ノ事務ニ應スルニ其機ヲ失セス其職ニ過チナカラシメンニハ他ニ其補助ヲ爲ス者ノ必要ヲ生ス是ヲ以テ法律ハ執達吏ニ其事務ノ補助ヲ爲サシムル者ヲ設クルヲ得ルコトヲ規定セリ然レトモ其執達吏カ委任ヲ受ケタル事務又ハ命令ニシテ特ニ執達吏自身ニテ取扱フヘキ事ヲ託セラレタルトキハ必ス自ラ之ニ當ラサルヘカラス而シテ其事務ヲ補助セシムルハ自己ノ責任ヲ以テセサルヘカラス故ニ事務補助者ノ失職又ハ懈怠ニ基ク責任ハ執達吏自ラ之ヲ負擔セサルヘカラス(執達吏規則第十一條)今其補助者トシテ執達吏ノ事務ヲ取扱フモノヲ擧グレハ左ノ四者トス

- (一) 執達吏登用試験ニ及第シタル者
- (二) 執達吏ノ職務修習中ノ者ニシテ三ヶ月以上ヲ經タル者
- (三) 裁判所書記登用試験ニ及第シタル者
- (四) 區裁判所ノ一人ノ判事若クハ監督判事ニ於テ臨時執達吏ノ職務ヲ行フニ適當ト認メタル者

此四種ノ者ハ執達吏ノ事務ニ多少ノ辨識アルヲ以テ之カ補助ヲ爲サシメ以テ執達吏ノ事務ノ澁滞曠廢ナカラシムルニ在リ

以上執達吏ノ職務ノ概要ヲ說示セリ以下更ニ其職務上ノ關係及ヒ職務ヲ行フニ付テノ保證等ニ付キ少シク細說スル所アル可シ

(一) 職務執行ノ開始及ヒ其保證

(二) 職務ヲ行フヘキ區域

(三) 裁判執行ニ付テ生スル權利上ノ關係

其一 執達吏ト債權者間ノ關係

其二 執達吏ト債務者間ノ關係

(四) 職務ノ執行ニ付テノ監督

第一 職務執行ノ開始及ヒ保證

執達吏ハ只其任用セラレタキノミヲ以テ未タ其職務ヲ行フコトヲ得ス其任命ノ日ヨリ三十日內ニ保證金ヲ管轄地方裁判所ニ納メサルヘカラス元來執達吏ノ職務タル常ニ財産ノ取扱ヲ爲ス者ニシテ時ニ或ハ不虞ノ變災若クハ不正ノ行爲ノ爲メニ當事者又ハ國庫ニ損害ヲ來スコナシトセス此損失ヲ償ハシメンニハ保證ノ要アリ此故ニ控訴院長ハ五百圓以內ノ額ニ於テ其土地ノ情況ニ從テ

職務執行ノ開始ノ保證

職務ヲ行フ區域

其保證額ヲ定メ其職務ヲ適實ニ行フ爲メノ保證トシテ之ヲ納付セシム(本法第九十九條第一項及執達吏登用規則第二十三條)此保證金ヲ納付シタルトキハ裁判所ハ其執達吏ニ官印ノ交付ス此官印ヲ交付アリタル後ニアラサレハ執達吏ハ其職務ヲ行フヲ得ス(執達吏登用規則第二十四條)故ニ此官印ノ交付ハ執達吏カ其職務ヲ行フ時期ノ開始ナリト云フコトヲ得可シ

第二 職務ヲ行フ區域

執達吏カ其職務ヲ行フ區域ハ其所屬區裁判所ヲ管轄スル地方裁判所ノ管轄區域內トス此區域內ニ在テハ執達吏ハ何レノ地ニ於テモ其職務ヲ行フコトヲ得ルモ其區域外ニ於テ爲シタル執達吏ノ行爲ハ適法ノモノニアラス何トナレハ執達吏カ職務ヲ行フニ付テハ必ス區域ニ付キ管轄權ヲ有セサルヘカラス管轄權トハ一定ノ區域內ニ於テ其職務ヲ行ヒ得ヘキ能力ナレハ其屬スル區裁判所ヲ管轄スル地方裁判所ノ管轄地以外ニ管轄權ナシ管轄權ナクシテ行フタル職務ハ之ヲ行フヘキ能力ナシ能力ナケレハ毫モ執達吏トシテ行フタル者ト云フヲ得ス故ニ此等ノ行爲ハ法律上執達吏カ正當ノ能力ヲ有シテ爲シタル行爲ト

同一視スルヲ得ス此規定ハ要スルニ執達吏ニシテ其職務ヲ行フヘキ地ニ制限  
ナケレハ時ニ遠隔ノ地ニ執行ノ依頼ヲ受クルコトアル可キモ斯クテハ裁判所  
ノ用務辨セズ訴訟ノ運延ヲ來シ當事者ノ失費ヲ重キ執行行為ノ迅速ニ拂運セ  
サル等ノ弊ヲ除カントスル主旨ニ出ルモノナリ(第九十八條)

然レトモ此管轄ハ其職務ヲ行フ土地ニ付テノ制限ニシテ人ニ對スルモノニア  
ラサルカ故ニ其委任者ハ管轄區域外ノ人ナリト雖モ其職務ヲ行フ場所ニシテ  
其屬スル區裁判所ヲ管轄スル地方裁判所ノ管轄地内ナルトキハ毫モ其效力ニ  
影響スルモノナキノミナラス其行フタル職務ハ法律上正當ノモノトス

第三 裁判執行ニ關スル權利上ノ關係

執達吏カ刑事裁判ノ執行ニシテ司法警察官ヲ要セサル罰金若クハ科料ノ徵收  
ヲ爲スニ當テハ行政官憲ノ一部トシテ執行スルモノナルカ故ニ被執行者ト執  
達吏トノ關係ハ所謂公法上ノ關係ニシテ一般官吏ト人民トノ間ニ於ケル關係  
ニ異ナルコトナケレハ深ク説明スルノ必要ナシ  
然レトモ執達吏カ民法裁判ノ執行ヲ爲スニ付テハ其關係ハ一ハ民法上ノモノ

裁判執行  
ニ關スル  
權利上ノ  
關係

ト爲リ一ハ公法上ノモノトナル以下之ヲ研究セントス

其一 執達吏ト債權者間ニ於ケル權利上ノ關係

此關係ハ所謂民法上ノ關係ニシテ執達吏ハ委託ヲ受ケタル債權者ニ對シテハ  
代理人ノ資格ヲ有スルモノトス故ニ執達吏ノ權利ハ執行サレヘキ者ノ債權者  
ノ委託ニ基テ生スルモノナリ(民事訴訟法第五百三十一條乃至第五百三十五條  
第五百八十六條及第六百十八條)

代理ノ關係ハ委任狀ヲ付與シ及ヒ執行力アル正本ヲ交付セルヲ以テ始マル但  
委任ノ付與ハ債權者自身ニ爲スモ又ハ訴訟代理人カ爲スモ又ハ口頭ニテ若ク  
ハ書面ヲ以テスルモ或ハ直接タルト書記ノ媒介ニ依リテ之ヲ爲スモ其效力ハ  
同一ナリ

債權者ハ惣テ訴訟ニ於ケル強制執行ヲ委託スル爲メニ區裁判所書記ノ媒介ヲ  
求ムルコトヲ得書記ノ委任シタル執達吏ハ債務者ニ對シ及ヒ第三者ニ對シテ  
執達吏ノ債務者及ヒ第三者ニ對スル關係ハ其官吏タルノ資格ニ依テ判定スヘ  
債權者自時カ委託シタルモノト看做サルヘシ(民事訴訟法第五百三十一條第五

## 百三十三條

強事執行ノ委任ヲ受ケタル執達后ハ特別ノ委任ヲ受ケサルモ債權者ヨリ支拂  
其他ノ給付ヲ受ケ其受取リタルモノニ對シ有效ニ受取證ヲ作りテ交付スルノ  
權ヲ有ス(民事訴訟法第五百三十三條)執達吏ノ差押ヘタル金錢ヲ取立若クハ差  
押物ノ賣得金ヲ受取リタルトキハ其金額ニ限り債務者ヨリ支拂ヲ爲シタルモ  
ノト看做ス(民事訴訟法第五百七十四條及ヒ同第五百七十九條)故ニ執達吏カ其  
金錢ヲ債權者ニ對シ引渡サ、ルトキハ債權者ハ執達吏ニ對シテ請求スルヲ得  
レトモ債務者ニ對シテ請求スルコトヲ得ス

強制執行ノ委託ニ因ツテ執達吏ニ與ヘタル權利ノ幾分ヲ制限シ或ハ全ク解除  
スル場合アルヘシ然レトモ其制限及解除ハ債權者ト執達吏トノ間ニ止リ第三  
者ニ對シテ債權者ハ其委託ノ制限又ハ解除ヲ主張スルコトヲ得ス(民事訴訟法  
第五百三十四條)

## 其二 執達吏ト債務者及ヒ第三者トノ關係

執達吏ノ債務者及ヒ第三者ニ對スル關係ハ其官吏タル資格ニ依テ判定スヘ

シ是レ即チ公法上ノ關係ニシテ執達吏ノ責任ハ代理ノ原則ニ依ラスシテ官吏  
タルノ資格ニ依ルヘキモノトス故ニ執達吏ノ過失ニ付テハ民法ニ從ヒ政府カ  
官吏ノ過失ニ付キ責任ヲ負フノ限度ニ於テ其責任ヲ負フヘシ

執達吏ハ債務者及ヒ第三者ニ對シテハ執行力アル正本ヲ有スル一事ニ因テ強  
制執行ヲ爲スノ權利ヲ有ス故ニ執達吏カ執行力アル正本ヲ有スル以上ハ當然  
債務者及第三者ハ強制執行ヲ甘受セサルヘカラス而シテ債權者カ委任ヲ與ヘ  
タルコトノ證明ヲ求メ若クハ債權者カ正本ヲ交付シタルコトノ證明ヲ求ムル  
事ヲ得ス然レトモ亦一方ニ於テハ債務者カ支拂又ハ給付ヲ爲シタルトキハ執  
達吏カ債權者ヨリ正當ニ正本ノ交付ヲ受ケタモルノナルト否トヲ問ハス債務  
者ハ其義務ヲ免ルヘシ而シテ債權者ハ債務者及ヒ第三者ニ對シテ委任ノ權限  
若クハ解除等ヲ主張スルコト能ハス但シ債務者及ヒ第三者カ委任ノ制限解除  
ヲ知リナカラ或ハ執達吏カ債權者ヨリ正本ノ交付ヲ受ケサリシコトヲ知リナ  
カラ支拂又ハ給付ヲ爲シタルトキハ債權者ハ其所爲ヲ詐欺ニ出テタルモノト  
シテ之ヲ訴フルコトヲ得ヘシ

以上ヲ以テ執達吏カ執行ヲ爲スニ付テノ權利上ノ關係ヲ説明シ終レリ而シテ  
 執達吏ハ其執行ヲ爲スニ當リ抵抗ヲ受クルトキハ威力ヲ用井且ツ警察上ノ援  
 助ヲ求ムルコトヲ得ルノミナラス若シ兵力ヲモ要スルトキハ之ヲ執行裁判所  
 ニ申立テ兵力ヲ藉ルコトヲ得ヘシ又其執行ヲ債務者ノ家宅ニ於テ爲ス場合ニ  
 シテ此執行行爲ニ立會フヘキ人ナキトキハ成年者二人又ハ市町村役場若クハ  
 警察署ノ吏員一人ヲ證人トシテ立會ハシムルコトヲ得ル等ハ執達吏ノ搜索及  
 ヒ威力兵力ノ使用權ニ關スル問題ニシテ其他執行ヲ爲スニ際シ注意スヘキ要  
 項及ヒ關係人ヘノ催告及ヒ通知等種々ノ手續ヲ要スレトモ是等ハ本講義ノ範  
 圍外ニシテ民事訴訟法ノ主トシテ規定スル所ナルヲ以テ之ヲ其講師ニ讓ル

第四 職務執行ニ付テノ監督

執達吏ハ其職務トスル所直接ニ人民ノ財産ニ干涉シ又ハ訴訟書類ノ送達ヲ爲  
 ス等皆吾人ノ權利消長ニ關スル重大ノ事務ニシテ又其間ニ容易ニ不正ノ行ハ  
 レ得ヘク即債務者ト密ニ結托シテ不正ノ利ヲ得ンカ爲メニ債權者ヲ害スルコ  
 トナシトセス左レハ其職務ノ執行ニ付テハ之ヲ監督スルノ必要アリ此故ニ所

手數料

屬區裁判所ノ一人ノ判事若クハ監督判事之ヲ監督ス而シテ又他ノ判事若クハ  
 檢事カ其職務上特ニ執達吏ニ執行事務ヲ命シタルトキハ其判事檢事ハ其命シ  
 タル事務ニ限リ執達吏ヲ監督ス(執達吏規則第四條)  
 而シテ執達吏カ職務ヲ行フニ當リテハ其所屬區裁判所ノ上官ノ命令ヲ受ケタ  
 ル書記及ヒ其區裁判所ヲ管轄スル地方裁判所ノ上官ノ命令ヲ受ケタル書記ノ  
 命令ニ從フ(本法第百條)此等ノ規定ハ皆執達吏ノ職務ニ過チナク且迅速ニ其職  
 分ヲ完フセシメントスル法律ノ精神ニ出ルモノナリ

手數料

執達吏ノ俸給ハ官ヨリ之ヲ支給セシテ一種特別ノ方法ニ依リ其收入ヲ以テ  
 俸給ト爲ス其收入ヲ稱シテ手數料ト云フ而シテ其手數料徵收ノ方法ハ其取扱  
 ヒシ事件ノ性質及ヒ種類ニ從ヒ一様ナラスト雖モ訴訟當事者又ハ委任者ヨリ  
 規則ニ定ムル所ノ一定ノ標準ニ依リ之ヲ受ク(二十三年七月法律第五十三號執  
 達吏手數料規則及本法第九十三條)之ヲ手數料トシテ當事者ヨリ徵收スルト  
 俸給トシテ國庫ヨリ一定ノ額ヲ支給スルトノ當否如何ハ今日ニ在リテ尙議論

職務ノ罷免

ノ存スル所タリ  
而シテ其手數料一ケ年百八十圓ニ滿タサルトキハ其不足額ハ國庫ヨリ之ヲ補助ス(執達吏手數料規則第十九條及本法第九十六條)  
職務ノ罷免  
執達吏ハ一般行政官吏ト同シク其失職又ハ懈怠アリタルトキハ其監督者ハ官吏懲戒令ニ因リ之ヲ責罰スルノミナラス其職務取扱上失當アルトキハ或ル期間内其職務ノ執行ヲ停止スルコトアルヘシ

廷丁

### 第六章 廷丁

廷丁ハ裁判所ニ屬シ裁判長ノ秩序維持權ノ下ニ活動スル職員ニシテ又裁判所構成ニ欠クヘカラサルモノナリ而シテ其任免ハ一ニ大審院長各控訴院長及ヒ各地方裁判所長ノ自由ニシテ其事務ノ繁閑ニ依リ之ヲ増減スルコトヲ得(第一百條)

然レトモ區裁判所ノ廷丁ハ其管轄地方裁判所長之ヲ任免ス他ナシ區裁判所ハ

單獨判事ニシテ裁判シ別ニ所長ナルモノヲ置キ其應ノ行政事務ヲ取扱ハレササルカ故ナリ

廷丁ノ職務トスル所ハ公廷ニ出テ公判ノ開廷ヲ呼上ケ其他裁判長秩序維持權ノ下ニ在テ公廷ノ取締ニ從フモノトス其他司法大臣ノ發シタル一般ノ規則中ニ定メタル事務ヲ取扱ハシム(第一百二條第一項)  
區裁判所ハ執達吏ニ差支若クハ其他ノ事故ニ因リテ之ヲ用ユルコトヲ得サルトキハ其裁判所ノ所在地ニ限り廷丁ヲシテ書類ノ送致ヲ爲サシムルコトヲ得(第一百二條末項)

### 第三編 司法事務ノ取扱

本編ノ規定ハ裁判所及檢事局ノ官吏カ其取扱フヘキ事務ニ付キ取扱ノ方法ヲ規定スルモノニシテ先裁判所開廷ノ事ニ起リ次テ裁判所ノ用語裁判所ノ評議及言渡、裁判所及檢事局ノ事務章程、司法年度及休暇、法律上ノ共助等第二章以下第六章ニ列次規定セリ

裁判所構成法



### 第一章 開廷

開廷トハ裁判所ヲ開クノ謂ニシテ裁判所ヲ開クトハ各級審ニ依リ定リタル員數ノ職員出席シ訴訟ノ審問及ヒ裁判ヲ爲スノ有様ヲ云フ開廷ハ裁判所又ハ支部ニ於テスルヲ通則トス(第三百條第一項)然レトモ此常則ニ變例アリ即チ出張裁判ノ制ニシテ出張裁判トハ裁判所又ハ支部ニ於テ裁判スルモノニアラスシテ一區裁判所ノ管轄區域内ノ地ヲトシ特ニ或ル時期ヲ限リテ其地ニ臨ミ訴訟ヲ審理審判スルノ制度ナリ此制度ノ設ケラレタル所以ノモノハ地方裁判所ノ管轄區域内ニアル一區裁判所ノ管轄區域時ニ或ハ十數里ニ跨リ其交通不便ナルカ爲メニ訴訟ノ小ナルモノニ在テハ費用ト手數トニ於テ收支ノ相償ハサルニ至ルモノアルヲ以テ人民ハ枉ケテ權利ヲ伸暢セサルコアルヘク斯クテハ折角裁判所ヲ設置シタル趣旨ニ反スルヲ以テ司法大臣ノ必要ト認ムル場合ニ於テハ區裁判所ヲシテ其管轄區域内ノ一定ノ場所ニ於テ裁判事務ヲ行ハシムルコトヲ得セシメタルナリ(第三百條第二項及ヒ明治二十三年八月司法省令第四號參照)

出張裁判ハ巡回裁判ニ異リ巡回裁判トハ甲地ヨリ乙地ト順次ニ裁判ヲ行クモノニシテ英國ニハ此制度行ハル此制度ハ多數ノ裁判官ヲ要セサルノ點ニ於テ利益アリト雖トモ訴訟ヲ延滞スルノ弊ハ免カル可ラス  
 本章ハ之ヲ左ノ三項ニ分説ス可シ

### 公開

#### 第一 公開

裁判ノ公開スヘキモノタルコトハ我憲法第五十七條ニ明文ノアルアリ是レ裁判所ノ開廷ハ必ス公行スヘキヲ原則トスル所ニシテ其公行ハ亦裁判ノ公平ヲ保證スルノ一方法ナリ實ニ裁判ハ爭訟ニ付キ其當否ヲ斷定スルノ處分ナレハ直接ニ吾人ノ身体名譽財產ニ重大ノ影響ヲ及ホスモノナルニ若シ之ヲ秘密ニセンカ縱令不公平ノ措置ナシトスルモ人ノ其ノ間ニ疑ヲ抱クハ人情ノ常ニシテ之ヲ疑フノ結果ハ裁判ノ威信ヲ損スルコト、ナル可ク且之ヲ密行スルカ爲メニハ時ニ或ハ私曲ノ行ハル、コトナシトモ云フ可ラス此故ニ裁判ヲ公開スルハ一方ニ其裁判ヲ公明正確ナルヲ知ラシメテ裁判ノ威信ヲ維持シ一方ニハ一般公衆ノ監視ノ下ニ裁判官ヲシテ毫モ私曲ヲ行フコト能ハサラシムル爲メ

最も重要ノ事ニ屬ス故ニ司法制度ノ未々發達セサル往時ハ措テ問ハス今日ニ在リテ裁判公行ノ制度ヲ認メサル邦國ハ殆ント之アルヲ見ス然レトモ若シ其對審ノ公開ヲ許スニ於テハ社會ノ安寧ヲ擾リ風俗ヲ害スル等ノ虞アルトキハ裁判所ノ決議ヲ以テ其公開ヲ停止スルコトヲ得ヘシ例ヘハ其事件カ國事ニ關スルモノニシテ之ヲ公衆ニ傍聽セシムルハ外交ノ機密ヲ漏洩スルノ恐レアリトカ又公安ヲ害スルノ虞アリトカ又ハ猥褻ニ涉ルカ爲メニ風俗ヲ壞亂スルノ恐レアリトカ云フカ如シ此場合ニ於テハ裁判所ハ公開ヲ停止スル旨ヲ言渡シ公衆ヲ退廷セシム然レトモ其對審終リ判決スルニ際レハ再ヒ公行ノ原則ニ立戻リ公衆ヲ入廷セシメ其判決ヲ言渡スモノトス(第百五條)

公開停止ノ言渡ヲ爲シタル場合ト雖モ裁判長ハ其當事者ノ親屬若クハ其他ノ者ニシテ當事者其他權利ノ伸暢ニ益スル所アルモノナルカ又ハ官吏ニシテ其職務上又ハ其他ノ必要アリテ別ニ風俗ヲ紊シ又ハ秩序ヲ亂ルノ恐レナキトキハ此等ノ者ニ限り特ニ入廷ノ許可ヲ與フルノ權アリ(第百六條)

茲ニ一ノ注意ス可キコトハ公開停止ニ付テハ裁判所ノ決議ヲ要シ其公開停止

訴訟ノ審問及ヒ指揮

中入廷ノ許可ヲ與フルノ特權ハ裁判長一人ニ專屬シ別ニ裁判所ノ決議ヲ要セサル點是ナリ蓋シ裁判ノ公開ハ一般ノ原則ニシテ又大ニ公益ニ關スル者ナルカ故ニ此原則ニ反スルハ最も重大ナル事柄ナリ故ニ之ヲ輕々ニ放任スルコトヲ爲サス必ス裁判所ノ決議ヲ要スル者トスルモ入廷ノ場合ニハ之ニ反シテ其一部分ト雖モ公開ノ原則ニ復スル場合ナルヲ以テ之ヲ裁判長ノ權内ニ一任セルナリ然モ區裁判所ハ單獨制ナレハ其公開ヲ停止スルモ又入廷ノ特許ヲ與フルモ一人ノ判事ノ權内ニ在レハ其結果執務判事ノ特權ナルカ如キ觀ナキニアラサルモ尙此原則ノ觀念ハ之ヲ抱持シ輕々ニ公開ヲ停止スルヲ得サルコト論ヲ竣タス

第二 訴訟ノ審問及ヒ指揮

裁判所カ開廷セラル、ニ當リ訴訟當事者及總テノ關係人ノ審問及陳述ヲ指揮シ又ハ陪席裁判官其他裁判所ノ職員ノ上席ト爲リテ此等ノ者ヲ指揮スルハ合議裁判所ニ於テ開廷シタルトキハ裁判長即部長ニ屬シ區裁判所ニ於テ訴訟ノ審問ヲ爲ス場合ニ在テハ單獨判事之ニ當ルカ故ニ從テ此權利ハ其判事一人ニ屬ス(此場合ニ於テ監督判事ニ屬セサル所以ハ監督判事ト雖モ他ノ判事ノ裁判

事務ニ干渉スルヲ得サレハナリ(第百四條第一項)又裁判長ニ屬スル此權利ハ一人ニテ執務スル受命判事受託判事及ヒ豫審判事ニモ屬ス(同條第二項)此審問及ヒ指揮權ノ裁判長ニ屬スル所以ハ訴訟ノ審問ハ正肅ニシテ嚴格ナラサル可カラス裁判長審問ヲ始ムルニ際シ陪席判事亦傍ヨリ勝手ニ審問ヲ爲ストセハ裁判ノ不体裁ナルノミナラス各判事各其見ル所ニ從ヒ迭ニ審尋スルヲ得ハ順序錯亂シテ訴訟ノ要點ヲ明瞭ニ陳述セレムルヲ得ス徒ラニ當事者ノ喧噪ヲ引起シ裁判ノ尊重ヲ瀆スニ至ルノ恐レナキニ非サレハナリ

秩序維持  
權

第三 秩序維持權

秩序ヲ維持スル權トハ裁判所ノ威信ヲ示シ司法權ノ神聖ナルヲ知ラシムルニ在リテ存ス而シテ此秩序維持權ハ審問ニ付テノ指揮權ト同シク合議裁判所ニ在テハ裁判長單獨制ノ裁判所ニテハ執務判事ニ屬ス(第百八條)又豫審判事受命判事及ヒ試補カ其職務ヲ行フ場合ニ於テハ是等ノ者亦同シク此權ヲ有ス(第百十二條)今此權ノ作用ニ付キ一般公衆ニ對スルモノト當事者及ヒ其關係人ニ對スルモノトノ異同ヲ分說セン

(一) 一般公衆ニ對スル場合

裁判長又ハ執務判事ハ公廷ニ於テ其裁判所ノ威信ヲ瀆スノ恐アル者ニ對シテ其退廷ヲ命スルコトヲ得又婦女兒童及ヒ相當ナル衣服ヲ着セサルモノニ退廷ヲ命シ又公廷ニ審問ヲ妨ケ或ハ不當ノ行狀ヲ爲ス者アルハ之ニ退廷ヲ命スルコトヲ得(第百九條第一項)又裁判長ハ此違犯者ニシテ其犯狀放擲セハ益々猖獗ヲ極ムルノ恐アリト認ムルハ之ヲ拘引セシメテ法廷ヲ閉ツル迄之ヲ勾留シテ妨碍ヲ豫防スル處置ヲ命スルコトヲ得然レトモ其法廷ヲ閉ツルニ至レハ裁判長ハ其職權ヲ以テ之ヲ解放スルコトヲ命シ又ハ情狀ニ依リ之ヲ五圓以下ノ罰金若クハ五日以内ノ拘留ニ處スルコトヲ得(第百九條第二項)而シテ此罰金ヲ受ケタル者不服ナルトキハ上告ヲ爲スコトヲ得然レトモ控訴ヲ爲スコトヲ得ス蓋シ公開ノ法廷ニ於テ法律ニ違背シタルモノハ其處分ヲ爲スト同時ニ其犯狀ヲ訴訟記録ニ記入シ其實明々白々ナルヲ以テ控訴ノ途ニ依リテ事實覆審ヲ爲スノ要ナカル可シト雖トモ法律上ノ點ニ付テハ未タ其適用ノ正否概定スヘカラサルモノアルカ故ニ之ニ對シテ上告ヲ許セルナリ而シ

テ又裁判長ハ此犯行ニシテ輕罪又ハ重罪ニ該ルヘキモノナリトスルハ刑事  
 訴追ヲ爲スヘク(第九條第三項及ヒ第十三條)若シ豫審判事受命判事又ハ試  
 補ノ處分ニ係ルトキハ二十四時間内ニ其判事又ハ試補ニ對シ之レカ異議ヲ申  
 立ツルコトヲ得ヘシ其異議ノ申立ハ其判事ノ屬スル裁判所ノ刑事部若クハ刑事  
 支部ニ於テ之カ裁判ヲ爲シ試補ノ下シタル命令ニ對スル異議ナルハ試補ニ  
 其事務ノ取扱ヲ命シタル判事之ヲ裁判スル者トス(第一百十二條第二項及ヒ第三項)  
 (二) 當事者及其他ノ訴訟關係人ニ對スル場合  
 以上ノ制裁ヲ適用スヘキ違犯者ハ獨リ傍聽人トシテ入廷シタル公衆ノ中ニ  
 ミ見ルヘキニアラス訴訟人タル當事者又ハ證人鑑定人等ノ如キ訴訟關係人ニ  
 於テモ時ニ或ハ斯ル違法ノ所爲ナキヲ保セス既ニ其所爲ニシテ生ス得ヘキモ  
 ノトセハ亦之ニ對シ相當ノ處罰ヲ行フハ當然ナリト雖正公衆ト訴訟人トノ間  
 ニハ自ラ其處分ヲ異ニスルモノナカルヘカラス他ナシ訴訟關係人ハ權利ノ伸暢  
 ヲ致サントスルノ切ナルヨリ知ラス識ラス違犯ノ所爲ヲ爲スコアリ是ヲ以テ  
 本法第一百十一條ニ於テ前條ノ規定ハ左ノ變更ヲ以テ當事者證人及ヒ鑑定人ニ

モ之ヲ適用ス云々ト規定シタル所以ナリ

第一 訴訟關係人中ニ本條ノ違犯者アルトキハ即時之ヲ處罰スル者トス之ヲ  
 即時ニ處罰スル所以ノモノハ元來此等ノ者ハ訴訟事件ニ關係スルモノナル  
 カ故ニ若シ之ヲ即時ニ罰セサレハ或ハ審問ヲ中止セサルヘカラサルニ至ル  
 ノミナラス遂ニ益々不敬ノ所爲ヲ逞フスルニ至レハナリ

第二 若シ其違犯者カ原告ナルトキハ之ヲ處罰セシ上尙ホ本人ヲ懲戒スルノ  
 制ニシテ即チ本人悔悟シテ宥恕ヲ乞フカ又ハ恭順ヲ表シテ不敬ノ罪ヲ謝ス  
 ル迄其審問ヲ中止ス此中止ニシテ解ケサル間ハ原告ハ永ク訴訟ニ繫ルヘケ  
 レハ自然自己ノ不利益トナルヲ以テ懲戒ノ法ニ適スルモノナリ

第三 辯護士モ亦法廷ニ於テ不當ノ言語ヲ用ヒタルトキハ裁判長ハ其事件ニ  
 付キ引續キ陳述スルノ權ヲ禁止ス尙其言語ニ付キ懲戒ノ必要アルトキハ之  
 レカ訴追モ爲スコトヲ得(第一百十一條辯護士法第三十一條以下參照)

裁判所ノ用語

第二章 裁判所ノ用語

裁判所構成法

第百十五條ニ曰ク「裁判所ニ於テハ日本語ヲ用ウ」ト一國ニハ一國固有ノ言辭アリ我國ノ裁判所ニ於テ我國語ヲ用ウルハ固ヨリ當然ニシテ彼ノ國權論者カ喋々スル國權ノ擴張、國粹ノ保存ノ上ニ於テ一國ノ体面ヲ維持スルノ必要ハ措テ言ハストスルモ言語ハ意思ヲ表彰スル最要ノ具ニシテ國語ハ即チ其國ニ最モ普及セル言語ナリトモハ當事者ノ意思ヲ表明シ事物ノ關係ヲ判別シ裁判ノ目的ヲ達スルニ於テ亦固ヨリ斯ノ如クナラサルヘカラス

若シ夫レ訴訟關係人ニシテ口言フヲ得耳聞クヲ得若クハ文字ヲ知ル者ナランカ此通則ヲ適用シテ毫モ差支ナシト雖モ世間時々聾者啞者若クハ文字ヲ知ラサル不具者ナシトセス之ヲ不具者ナリトシテ其訴訟ノ事實狀況ヲ辨論シ若クハ陳述セシメサラシカ其事ヲ決定スルノ材料ヲ得ルニ難ク是レ等ノ不具者ハ其既得ノ權利ヲ伸暢スルコトヲ得スシテ止ムニ至ル可シ是レ決シテ法律ノ目的ニ適フタルモノニアラス法律ハ普通人ニ對スルヨリモ無能力者不具者ノ利益ヲ保護スル點ニ於テ自ラ厚カラサル可カラス故ニ此等ノ不具者ノ爲メニハ特ニ通事ヲ付スルノ必要アリ蓋シ通事ナル者ハ口言フ能ハサル者耳聞ク能ハサ

ル者又ハ文字ヲ知ラサル者ニ對シ他ノ事物ヲ假テ間接ニ其抱藏スル意見ヲ外部ニ發表セシムル技能ヲ有スル者ナルカ故ニ能ク其技能ヲ假リテ訴訟ノ事實ヲ申明スルヲ得ヘキナリ(第百十五條第二項刑事訴訟法第百條參照)

通事ハ常職トシテ裁判所ニ使用セラシムル者ニアラス時々必要アル場合ニ際シ特ニ其事ニ堪能ナル者ヲ撰テ之ニ當ラシム其任命及ヒ使用並ニ訴訟手續上其行フヘキ職務ニ關スル規則ハ司法大臣之ヲ定ム(第百十六條)

以上ハ本邦人ニシテ自ラ辯論及ヒ陳述ヲ爲スコトヲ得サル不具者ニ適用スヘキ規則ナリ然レモ茲ニ聾啞文盲ニアラサルモ我カ國語文字ニ通セサルヨリ恰モ是等不具者ト同視スヘキ者アリ即チ外國人カ訴訟ニ關係スル場合はレナリ彼レ外國人ハ聾啞文盲ニアラサルモ其國ヲ異ニスルヨリ從テ其國情言語ニ通セサルモノニシテ其言語ノ不通ナル點ヨリ之ヲ觀察スレハ毫モ前者ニ異ナルナシ故ニ亦之カ訴訟ニ關係スル場合ニ於テハ通事ヲ用ユル者トス(此通事ト云フヨリハ寧口通辯ト云フヲ以テ能ク其性質ヲ明ナラシムヘシ)而シテ其任命使用等ハ前者ニ於ケル通事ト同一ナリ

以上二種ノ通事ヲ要スル場合ニ於テ其通事ト爲ル者ナク而シテ裁判所書記之ニ堪能ナル時ハ裁判長ノ承諾ヲ得テ通事ト爲ル事アリ(第百十七條)

然レトモ外國人カ訴訟ニ關係シタル場合ニ於テ之ニ通事ヲ付スルハ其應答ノ不明ナルカ爲メノミ故ニ其訴訟ノ審問ニ預ル官吏ニシテ或ル外國語ニ通シ之ヲ聞取ルニ妨ケナキトキハ通事ヲ用ヒス直ニ應答セシムルコトヲ得是レ却テ通事ヲ待テ其應答ヲ爲サシムルヨリハ直接ニ利害得失正邪是非ヲ知得スル點ニ於テ利益アル可キカ故ナリ然レトモ其審問ニ參與スル官吏ニシテ外國語ニ通スルハ偶々之ヲ見ル所ニシテ常ニ必ラス然ラサルナリ左レハ其訴訟一タヒ決審スルモ若シ再ヒ同一事件ニ付上訴ノ起リ其訴訟記録ヲ參觀スルノ必要アルニ之レヲ擔當セシ裁判官ニシテ外國語ニ通セサルヲ以テ遂ニ其訴訟記録ヲ調査スル事ヲ得サルニ至ルヘシ况ンヤ此特例ノ爲メニ一般普通ノ規則タル日本語ヲ用ユルノ規則ハ遂ニ其適用ヲ見サルニ至リテハ我司法權上一大影響スル所アルヲ以テ假令其審問ハ外國語ヲ以テ爲シタルトキト雖モ其訴訟記録ハ必ス日本語ヲ以テ作ラサルヘカラス(第百十八條)

裁判所  
評議及  
言渡

第三章 裁判所ノ評議及言渡

本章ノ規定ハ本法ノ骨髓トスル所ニシテ之ヲ概スルニ全編ノ規定ニ則リテ取扱ヒタル事務ハ評議ヲ以テ其當否正邪ヲ決定シ言渡ヲ以テ其決定ヲ外部ニ表影セシムルニ在レハ本章規定ノ當否ハ全編十有七章規定ノ消長ニ關スル重大ナリトス是レ特ニ諸君ノ注意ヲ望ム所ナリ

我構成法ハ審問及ヒ裁判ヲ爲スニ原則トシテ合議制度ヲ採用セリ合議制度ノ何タルコトハ既ニ第一編ニ於テ諸君ト共ニ研究シタルカ如ク要ハ多數ヲ以テ事ヲ決スルニ在リテ彼ノ所謂多數ハ眞理ナリトノ理想ヨリ來リタルモノニシテ即チ合議制ノ要趣ハ一人ノ認定ハ三人ノ認定ノ誤謬ノ少ク又五人ノ明確ナル判定ニ如カストスルニ存ス而レテ裁判ハ一ノ事實ニ對シテ一ノ意思ヲ表影スルニ過キサルモノナレハ其判事ニシテ各其意見ニ異ニスル事アルモ之レヲ發表センニハ一事件ニ付キ必ス一箇ノ決定ナラサルヘカラス若シ其各判事ノ意見ヲ悉ク發表セシガニ事件ニ對シ數箇ノ決定ヲ爲スモノニシテ所謂判決ナル

ルモノニアラス而シテ我構成法ハ裁判ニ合議制ヲ採リ數人ノ判事ヲ以テ審問  
 裁判スルモノトセハ(第三十二條第四十條及ヒ第五十三條)其各異リタル意見ヲ  
 一點ニ歸着セシメテ以テ判決ヲ形作ルコトヲ計ラサル可カラス而シテ之ヲ一  
 點ニ絡ムルノ方法トシテ茲ニ評議ノ必要アリ而シテ其評議ハ各審級ニ定マリ  
 タル判事(大審院ハ七人ノ判事各控訴院ハ五人ノ判事各地方裁判所ハ三人ノ判  
 事)ヲ以テ之ヲ爲サハルヘカラス(第百十九條)唯區裁判所ニ於テノ審問裁判ハ常  
 ニ一人ノ判事ヲ以テ之ヲ爲ス所謂單獨制裁判ノ方法ナレハ其事ニ當ル判事ハ  
 自ラ信スル所ニ從ヒ裁判ヲ爲シ他ニ評議スルノ必要ナク又評議スルニ由ナキ  
 モノナルカ故ニ本章ノ裁判所ノ評議ナル規定ハ區裁判所ノ裁判ニ適用スルヲ  
 得サルコト勿論ナリトス

凡ソ裁判ナルモノハ訴訟ノ争點ニ對シ其當否ノ斷定ヲ爲スモノニシテ此判定  
 ヲ爲スニハ其争ノ原因トナリシ事實ヲ知ルヲ以テ最先最要ノ務トス何トナレ  
 ハ事實ヲ措テ他ニ裁判ノ基礎タルモノナケレハナリ故ニ裁判ヲ爲スニハ先ツ  
 第一ニ訴訟ノ繫ル事實ヲ審問スルノ必要アリ而シテ其事實ノ上ニ之ニ擬スヘ

事實ノ審問

キ法律ヲ索メ一ノ標識ヲ定ムルモノトス故ニ本章ノ規定ヲ第一事實ノ審問第  
 二評議第三言渡ノ三者ニ分説セン

第一 事實ノ審問

事實ノ審問ハ其裁判ニ與カル判事即地方裁判所ニ在テハ三人控訴院ニ在テハ  
 五人大審院ニ在テハ七人ノ判事ヲ以テ組立タル部ニ於テ之ヲ爲ス若シ夫レ其  
 争フ所ノ事實單純ナルモノハ一回ノ審問能ク直ニ辯論ヲ終結セシム可シト雖  
 正錯雜難棘ノ事件ニ至リテハ民事トナク刑事トナク往々其審問數日ニ涉リテ  
 尙ホ盡キサルコトアルカ爲メ其時日ノ永キ之ニ參與スル判事中疾病又ハ差支  
 アリテ欠席スル者ナシトセス而シテ其判事一人ニテモ欠席スルコトアラン  
 カ忽チ合議体ヲ組成スルヲ得サルヲ以テ審問又ハ裁判スルコトヲ得ス去リ逆  
 俄ニ他ノ判事ヲシテ其欠ヲ補ハシメシメ初メヨリ其審問ニ參與セサル判事ハ  
 到底其心證ヲ作ルコトヲ得サルヘシ從テ裁判ニ付テノ意見ヲ述フルコトヲ得  
 ス然ラハ其欠席判事ノ差支ノ終ル迄其審問ヲ中止センカ當ニ訴訟ノ終結ヲ遲  
 延シテ永ク權義ノ所在ヲ不安ノ地ニ置クノ不都合アルノミナラス特ニ刑事ニ

在リテハ其間空シク被告人ヲ拘禁シ置カサルヲ得ス是レ決シテ忍フヘキコトニ非サルカ故ニ法律ハ規定ヲ下シテ曰ク刑事事件ニシテ其審問四日以上引續クヘキ見込アルトキハ補充判事一人ヲ命シ常ニ其審問ニ立會ハシメ該審問ニ與カル判事ニシテ疾病又ハ其他ノ事故ニ因リ引續キ其審問ニ參與スルコトヲ得サルトキ之ニ代リ審問及ヒ裁判ヲ爲サシム(第百二十條)此規定タル實ニ裁判ヲ進行シ訴訟關係人ニ無用ノ時日ヲ徒費セシムル公私ノ不利益ヲ避ケントスルニ在リト雖モ法律ハ只刑事ノ場合ノミニ付キ之ヲ規定シ一言ノ民事訴訟ニ及ハサルハ何ゾヤ立法者ノ意蓋シ民事訴訟ハ其審理ヲ中止スルコトアルモ爲メニ當事者ノ權利伸暢ニ影響ヲ及ホスノ少キ刑事ノ如ク時ニ無罪者ヲ囹圄ノ裡ニ呻吟セシムルノ憂ナク又民事訴訟ハ不干渉的裁判ニシテ當事者ノ申立ナケレハ之ヲ審理セサル制ナルカ故ニ其取調ニ於テモ時日ヲ要スルコト少ク其弊刑事ノ比ニアラス又其實實ニ付テハ準備書面ノ有ルアリテ自ラ事實ヲ詳悉スルカ故ニ刑事ノ如ク事實ノ詳明ヲ失フコトナシトノ精神ニ出テタルモノナランカ然レトモ民事訴訟ト雖モ其落着ノ遲速ハ當事者利害ノ別ル所ナ

レハヨシ刑事ト同一ニ之ヲ取扱ハストスルモ少ナクモ之ト相似タル規定ヲ設クルハ訴訟ノ滯滞ヲ醫スルニ於テ亦其用ナシトセス况ンヤ財産上ノ權利モ身体ノ自由モ其貴重ナル時ニ軒輊シ得可キニ非サルオヤ

## 第二 評議

審問ニ依テ訴訟ノ因テ來ル事實ヲ詳知セル以上其事實ニ擬シテ是非曲直ノ判決ヲ下サハルヘカラス而モ判決ハ事實上ニ一ノ斷定ヲ下スモノナルカ故ニ數人ノ判事共ニ裁判ニ于與スルニ當リテハ各自ノ意見ヲ一纏シテ判決ヲ作り出ス爲メ茲ニ評議ノ必要ヲ生ス可シ

我構成法ハ公判ニ公開主義ヲ採ルニモ拘ハラズ判事ノ評議ハ之ヲ公行セシメス論者或ハ曰ク既ニ裁判ヲ公開スルノ必要ヲ認ムル以上ハ評議モ之ヲ公行セサル可ラス之ヲ密行スルハ徒ニ當事者ノ疑惑心ヲ惹起シ裁判ノ威信ヲ損スルノ外ナシト蓋シ一理アリ然レトモ評議ヲ公行シテ裁判官ノ公明正大ナルヲ知ラシムルト云フノ傍ラ當事者並ニ多數傍聽人ノ面前ニ在リテハ裁判官モ時ニ其本心ヲ左右セラルノ恐ナキニ非サルコトヲ慮ラサル可ラス又當事者ニ不



利益ナル意見ヲ開陳スルヤ人情其説ヲ嫌フト同時ニ其人ヲ忌ミ其人ヲ怨ムニ至ルコト之レナシトセス尙且評議ヲ公行スルニ於テハ法廷ノ整理ニ一段ノ繁雜ヲ加フルノ不都合アリ立法者カ裁判ノ評議ヲ公行セシメサルモノ惟フニ此般ノ弊ナキヲ望メルニ外ナラサル可シ

裁判官ハ評議ノ結果及ヒ其意見ノ如何並ニ多少ニ付キ嚴ニ秘密ヲ守ラサル可ラス是レ評議ヲ密行スルヨリ來ル必然ノ結果ナリトス然レトモ彼ノ欠位ヲ待テ補セラルヘキ豫備判事及事務修習ヲ爲ス司法官試補ハ評議ヲ漏スノ恐レナキノミナラス事務修習上大ニ益スル所アルヘキヲ以是レ等ノ者ニ限り其評議ノ傍聽ヲ許スコトヲ得可シ(第百二十一條)

以下評議ノ順序並ニ評議ノ方法ニ付キ説明センニ  
評議ニ際シテ各判事カ意見ヲ述フルノ順序ハ先官等低キ者ヨリ順次ニ裁判長ニ遡及シテ而シテ其判事中ニ官等同シキ者アルトキハ年少者ヨリ初ム(第百二十二條前段)此規定ノ精神タル威壓雷同ノ弊ヲ避ケ各其信スル所ニ從ヒテ十分ニ其意見ヲ述ヘシメントスルニ外ナラス蓋シ官等高キ者ヨリ順次ニ其官等低キ

者ニ及ヒ其意見ヲ述ヘシムルモノトセンカ情勢ニ屈スルハ凡俗ノ通患ナルカ故ニ高官ノ者ハ下官ヲ威壓シ下官者ハ甘ンシテ其意見ニ附和雷同スルノ恐レナキニ非サレハナリ

然レモ受命判事ニ至リテハ官等ノ高下年齢ノ多少ヲ問ハス其評議ヲ爲スニ當リテハ先其意見ヲ述フルモノトス(第百二十二條後段)受命判事ハ特ニ命ヲ受ケテ事件ノ取調ニ從事シタルモノニシテ事實ノ真相ヲ知悉シテ茲ニ意見ヲ得ヘキノトモハ受命判事ニ先其意見ヲ述ヘシムルハ事ノ實際上止ムヲ得サル例外法タルヲ知ル可シ

各判事評議スルニ當リテハ其裁判スヘキ問題ニ付キ自己ノ意見ヲ表スルコトヲ拒ムヲ待ス(第百二十四條)是レ合議ノ本旨ヨリ來ル必然ノ結果ナリトス若シ夫レ各判事ニ於テ其意見ヲ述ヘサルコトヲ得ルトセンカ到底評議シ決定スルニ途ナカルヘキナリ

斯ノ如ク評議ヲ盡シタル結果各判事ノ意見悉ク同一点ニ歸スルトキハ直チニ其一點ヲ以テ判決ト爲ス可ク別ニ其意見ノ上ニ取捨撰ヲ爲スノ要ナシト雖モ

人心ノ異ナルハ猶其面ノ如シ各判事其意見ヲ異ニスルハ却テ事ノ常態ナルカ故ニ各自ノ意見ハ未ダ必スシモ直チニ判決ヲ形クルコトヲ得ス須ラク其意見ヲ取捨総合シテ一個ノ決定ヲ得ルコトヲ勉メサルヘカラス是レ法律ノ第二百二十三條ニ規定スル所ニシテ此場合ニ於テハ過半数ノ意見ヲ採擇スヘキモノトス即チ正半数ニ加フルニ一個ノ意見ニ從フモノナリ然レトモ其意見三説以上ニ分レタルトキハ如何ニシテ之ヲ過半数ト爲スヤ研究ヲ要スル点ナリトス

(一) 民事訴訟ニ於テ其金額ニ付キ判事ノ意見三説以上ニ分レ過半数ニ至ラス爲メニ其決ヲ取ルコトヲ得サルトキハ過半数ニ至ルマテ最多額ノ意見ヨリ順次ニ算額ニ合算スヘキモノトス今之ヲ損害賠償ノ場合ニ例ヲ取ランニ甲判事ハ其金額百萬圓ナリトシ乙判事ハ之ヲ九十萬圓トシ丙判事ハ八十萬圓ナリトスルトキハ(第一審ノ合議裁判所ノ評議ヲ假想スルモノナルカ故ニ其上級合議裁判所ニ於ケル評議ニモ此例ヲ援引スヘシ)其意見ハ各孤立ノモノニシテ過半数ヲ得サルカ故ニ此場合ニ於テハ最多額ヲ主張スル甲判事ノ意見ヲ以テ乙判事ノ意見ニ合同セシメ以テ三名ニ對スル二名

ノ過半数ヲ得可シ從ツテ其賠償額ハ乙判事ノ主張セシ九十萬圓ニ定マルモノトス(第二百二十三條第二項)

右ハ民事訴訟ノ金額請求ノ場合ニ適用スヘキ規定ニシテ其他金額請求ニアラサル訴訟ニ付キ過半数ノ意見ナキ場合ヲ規定セス是レ法律ノ欠典ニハアラサルカ

凡テ合議裁判所ノ意見ハ其事件ノ金錢ニ係ルト否ラサル場合トヲ問ハス常ニ過半数ノ意見ニ依テ決セラルヘキモノトス是レ合議制ノ本旨ナリ然ルニ我構成法ニ於テハ金額ニ付キ意見三説以上ニ分レタル場合ノミ規定シ金錢以外ノ事件ニ對スル評決法ナキハ大ニ疑ハサルヲ得ス今姑ク之ヲ外國法律ニ考フルニ佛國民事訴訟法第十七條第百十八條ニ依レハ此場合ニ適用スヘキ評決ノ方法アリ又「ウルダンベール」王國ノ民事訴訟法第三百六十七條ニモ亦之ヲ規定セリ是等ノ法律ニ依レハ合議体ノ意見ニシテ二説以上ニ分ル、トキハ再ヒ決ヲ取り過半数ノ意見ヲ得ルヲ試ミ而シテ尙其目的ヲ達セサレハ比較的少數ノ意見ヲ主張スル判事ハ最多額ノ意見ニ從フヘキモノトス如此尙過半数ノ意見

ヲ得ル能ハサルトキハ更ニ新ナル判事ヲ加ヘテ辯論ヲ再開スルノ制規ナリ

(二) 刑事裁判ノ場合ニ於テ其意見三分シ過半数ヲ形クルコトヲ得サルハ被告  
 告人ニ不利益ナル意見ヨリ順次ニ被告人ニ利益ナル意見ニ合算スヘキモ  
 ノトス即チ犯人處罰ノ刑期ヲ三年ト爲スノ説ト之ヲ二年トシ若クハ一年  
 ナリトスルノ三説ニ分ル、ハ被告人ニ不利益ナル刑期三年ノ説ヨリ二  
 年ノ説ニ合算シ此二年説ヲ以テ過半数ノ意見ト爲ス(第二百二十三條第三項)  
 以上ニ於テ裁判ノ評議ハ過半数ノ意見ニ依テ之ヲ決シ其説ノ一致セサルトキ  
 ニ當リ過半数ノ意見ヲ形クルノ方法ヲ説明シ了レリ然レトモ其過半数ノ意見  
 トハ裁判終局ノ結果即チ判決ノ點ニ付キ決ヲ取ルヘキモノナルヤ將タ亦其理  
 由ナルカ否ナ判決ニ付キ意見ノ一致ヲ要スルハ論ナシト雖モ判決ノ理由ニ付  
 テモ尙且ツ其意見ノ一致ヲ要スルヤ否ヤ

獨乙裁判所構成法第九十八條ニ依ルニ該法モ亦我構成法ノ如ク合議ノ採決  
 ハ結果ニ付テノ過半数ニ依ルヘキヤ將其理由ニ付テノ過半数ニ依ルヘキヤハ一  
 モ明文ニ之ヲ示サス此故ニ該國ニ於テモ合議ノ採決法ハ學者間ニ議論アル所

タリ

今夫レ評議ヲ爲スニ當リ合議体ノ全員若クハ其過半数以上ノ者悉皆同一ノ理  
 由ニ依リ同一ノ意見ヲ得ハ即チ可ナリ然レトモ其全部員又ハ過半数以上ノ  
 意見三説以上ニ分レ又其理由ニ於ケルモ之ト同一ナル事アリト假定セヨ此場合  
 ニ於テ其過半数ノ意見ヲ形ルハ其理由ヲ外ニ措キ單ニ其結局ノ結果ニ依リ評  
 議ヲ爲ストセハ其決議ハ過半数以上ノ者カ正當ナリトスル所ノ理由ヨリ生シ來  
 ルノ結果ニ非スシテ其裁判ハ理由ト相矛盾スルモノト云ハサルヘカラス元來  
 判決ニ理由ヲ付セサルヘカラスハ各國法律制度ニ共通スル所ノ原則ニシテ  
 我民事訴訟法第二百三十六條及ヒ刑事訴訟法二百〇三條ニモ明定スル所ナリ  
 故ニ合議裁判所ノ判決ニ付スヘキ理由ハ即チ其合議体ノ意見ナラサルヘカラ  
 サルコトハ固ヨリ論辯ヲ要セサル所ナリ然ルニ若シ理由ニ付キ決ヲ取ラス只  
 單ニ其結果ニ付テノミ決ヲ取ラシカ到底判決ノ理由ニ付キ合議體過半数ノ意  
 見ヲ知ルヲ得サルカ故ニ我構成法ニ依リテ評議ヲ爲ス場合ニハ尙其理由ニ付  
 テモ亦其意見ノ過半数ヲ作ルノ決ヲ取ラサルヘカラス是レ學者ノ是認スル所

ノ説ニシテ合議裁判評決ニ付テノ一ノ原則ト云フヲ得ヘシ尤モ實際ニ於テハ一ノ説ヲ賛成スレハ即チ同時ニ一定ノ理由ヲ賛成スルニ歸スルカ故ニ單ニ結果ニ依リ決ヲ取ルヲ以テ足ル場合多カルヘシト雖モ理由ニ付キ三説以上ニ分ルハトキハ此方法ニ依ラサルヘカラサルモノトス

此原則ハ現ニ瑞西國「デン」州民事訴訟法第四百條ハノール「王」國民民事訴訟法第三百五十條「ウエル」タンベル「王」國民民事訴訟法第三百六十六條ニ明ニ採用セラレタリ

裁判ノ言渡

第三 裁判ノ言渡

評議ノ結果ハ定數ノ判事立會ノ上ニテ之ヲ言渡ス(第百十九條)判決ノ言渡ニ就テハ本法第三十二條第四十一條及ヒ第五十三條并ニ刑事訴訟法第二百四條民事訴訟法第二百二十五條以下ヲ參照ス可シ茲ニハ述ヘス

第四章 裁判所及檢事局ノ事務章程

凡ソ職務ノ何タルヲ問ハス事務取扱上ニ一定ノ規則ナクシテ其整頓ヲ期ス可

キニニ非サルカ故ニ豫メ事務取扱上其倚ルヘキ一定ノ章程ヲ設クルハ最モ必要ノコトニ屬ス况ンヤ司法事務ノ如キ直接ニ吾人ノ權利ノ消長ニ關スルモノニ在テハ其事務ニ付キ一定ノ章程ノ必要ナルハ他ノ官署ニ比シ一層切ナリト云ハサルヲ得ス

司法大臣ハ裁判所及檢事局ノ事務取扱ノ標準ト爲ルヘキ規則ヲ定ム(第百二十五條第一項)而シテ又控訴院長及ヒ檢事長ハ司法大臣ノ定メタル規則ニ依リ各自其管轄スル區域内ノ地方裁判所若クハ區裁判所又ハ是等ノ裁判所ノ檢事局ニ對シ事務ノ一般ノ取扱ニ關シ成ルヘク統一同轍ニ歸セシムルヲ旨トシ殊ニ裁判所及ヒ檢事局ノ開廳スル時間及ヒ開廷スル日時ニ付キ訓令ヲ發ス(同條第二項)此開廳及ヒ開廷日時ヲ司法大臣之ヲ定メシテ控訴院長及ヒ檢事長ニ委任セシハ各地方ノ狀況ニ因リ多少斟酌ヲ要スルモノアルカ故ナリ  
然レモ大審院カ其自ラ取扱フ事務ニ付テノ一定ノ規則ハ大審院之ヲ定メ司法大臣ノ定ムル規則ニ依ラサルモノトス(同條第三項)

## 第五章 司法年度及休暇

司法年度ハ司法官廳カ其事務取扱上ノ便宜ノ爲メニ區畫セルモノニシテ其年度ハ毎年一月一日ニ始リ十二月三十一日ニ終ルモノトス(第二百二十六條)而シテ其一年度内ニ於テハ一般ノ休日及ヒ令節國祭並ニ第二百二十七條ニ掲クル休暇ヲ除ク外常ニ其事務ヲ取扱フ而シテ其休暇トハ毎年七月十一日ヨリ九月十日ノ間ニシテ此期間ハ炎暑酷烈ノ候ニシテ訴訟當事者及ヒ其他訴訟關係人ニ於テ裁判所ニ出頭スルカ爲メニ旅行スルカ如キハ頗ル苦難ニシテ且裁判官其他ノ吏員モ此期間ニ執務スルカ如キハ實ニ堪ヘ得ヘカラサルヲ以テ此期間中ハ官民共ニ休息スルノ便法ヲ定メシモノニシテ裁判所ハ一般ノ事務ニ於テハ其既ニ着手シタルモノハ中止シ且新ナル訴訟ニ着手セサルモノナリ

然レトモ事件ノ性質急速ヲ要スルモノノ休暇中ト雖モ之ヲ取扱ハサルヘカラス而シテ之ヲ取扱フニ合議裁判所ニ在テハ殊ニ休暇部ナルモノヲ組織シ之ヲ扱ハシム而シテ其組立ハ休暇ノ始マル前裁判所長之ヲ定ム(第三百三十一條第一項)及第二項區裁判所ニ於テハ二人以上ノ判事アルトキハ監督判事之ヲ定ム(同條

## 三項)

然ラハ其休暇中ニ取扱フ事件ハ如何是レ本法第二百二十八條第一號乃至第八號及ヒ同第二百二十九條ニ列擧スル所ニシテ以下順次之ヲ説明スヘシ

## 第一 爲替手形約束手形其他ノ流通證書ニ關スル請求

此等流通證券ニ關スル請求ハ商業上資本ノ運轉ニ重大ノ關係ヲ有スルヲ以テ之ニ關シ迅速ノ裁判ヲ受ケサルトキハ融通ヲ妨ケ信用ヲ害スルノミナラス商人ノ資産ニ一大影響ヲ及ホスモノナリ

## 第二 船舶又ハ運送貨又ハ積荷ニ對スル請求

船舶ハ一日モ徒ニ繫留スルトキハ必ス多少ノ損失ヲ來シ若クハ急ニ去テ其踪跡ヲ暗マシ遂ニ本訴ノ目的物ヲ失フコトアルヘク又運送貨ハ速ニ之ヲ受取ラサルトキハ旅人ノ如キハ早ク己ニ遁走シ又積荷ハ殊ニ荷爲換ニ係ルモノ、如キハ速ニ之ヲ引取ラサレハ遂ニ賣却セラレテ損失ヲ負ハサルハカラサルニ至ルノミナラス又其引渡遅延ノ爲メニ其價低落シ損失ヲ來スコトアルヲ以テ是等ノモノニ對スル請求ハ商業上尤モ迅速ヲ要ス

第三 財産差押事件

財産ノ差押ハ速ニ着手セサレハ狡猾ナル債務者ハ遂ニ其財産ヲ隠匿シ債權者ヲ害スルノ恐レアリ

第四 住家其他ノ建物又ハ其或ル部分ノ受取、明渡、使用、占據若クハ修繕ニ關シ又ハ賃借人ノ家具若クハ所持品ヲ賃借人ノ差押ヘタルコトニ關シ賃借人ト賃借人トノ間ニ起リタル訴訟

是等ノ訴訟ハ迅速ニ處辨セサレハ爲メニ損害ノ日ニ及フモノナルヲ以テ速ニ之レカ判決ヲ爲サ、ルヘカラサル理由ノ存スルアレハナリ

第五 養料ノ請求

抑モ養料ヲ受クル者ノ如キハ自ラ完全ナル生計ヲ營ム能ハス其養料ヲ以テ日々ノ生計ヲ爲スモノナレハ一日其支拂ヲ猶豫センカ或ハ饑渴ノ患立トコロニ至ラサルヲ保セス故ニ裁判所ノ休暇中ナレハトテ之ヲ等閑ニ付ス可キニ非ス

第六 保證ヲ出サシムルノ請求

保證ヲ出サシムルノ請求ハ其如何ナル事柄ニ屬スルヲ問ハス保證ハ元來擔保

ナレハ之ヲ差出サシメサレハ時ニ或ハ債權者ノ損失ト爲リ又ハ或ル事ヲ實行スルヲ得サル場合ニ起ルヘキ請求ナルカ故ニ是亦急速ヲ要ス

第七 取掛リタル建築ノ繼續ニ關スル事件

既ニ取掛リタル建築ノ繼續ニ關スル事件ニ在テハ或ハ受負ヲ爲シタル者カ中途ニシテ違約シ或ハ地所ヲ賃借シテ建築ニ着手シタルモノカ遽ニ地所ノ占據ヲ拒マレ建築ヲ中止セシ等ニ由リ起リタル事件ニシテ速ニ裁判ヲ與ヘサレハ材料ノ腐朽等損失ヲ醸スノ恐レアレハナリ

第八 前數項ニ掲グルモノヲ除ク外區裁判所ノ判事又ハ休暇部ニ於テ直ニ着手スルヲ要スル緊急事件ト認メタルモノ

本項ハ前數號ニ掲ケタル事件ノ外尙速ニ着手セサレハ損失弊害ノ生スルモノアラシコトヲ恐レ其欠ヲ補フカ爲メニ特ニ設ケタル規定ニシテ人事ノ繁端タル如何ニ達識ノ立法者ト雖、時々社會ニ現ハル、無限ノ場合ヲ一々假想スルヲ得サルヲ以テ若シ前ニ列舉シタル事件ノ外尙急速ヲ要スルモノト認メタルハ直ニ之ニ着手スヘキノ余地ヲ與ヘタルモノナリ而シテ其急速タルヤ否ヤハ

一ニ裁判所ノ認定ニ任ス

以上ハ我構成法ニ所謂休暇事件ナルモノニシテ實ニ休暇中ハ一切ノ民事訴訟ヲ中止シ若クハ新訴ニ着手セストノ原則ニ對スル例外タリ然ルニ裁判所ハ休暇中ト雖トモ常時ト異ルナク常ニ取扱ハサルヘカラサル事件アリ(第二百二十九條以下之ヲ列記セン)

第一 刑事訴訟

刑事訴訟ヲ停止シ若クハ之ニ着手セサルハ或ル場合ニ於テハ無辜ノ民ヲシテ永ク獄牢ニ呻吟セシメ爲メニ貴重ノ人權ヲ抑制スルノ恐アルヲ以テ之ヲ中止セス又新ナル訴訟ハ直ニ採テ審理セシム

第二 非訟事件

非訟事件トハ失踪、相續、財産ノ封印若クハ地所家屋船舶ノ賣買讓與質入等ノ登記ヲ爲ス等ノ事務ニシテ之ヲ停止スルハ箇人ノ財産ヲ永ク不安ノ地位ニ置キ又諸種ノ登記ヲ爲スコトヲ中止セハ金融ノ圓滑ヲ防ケ經濟上ノ利益少カラサレハナリ

第三 判決執行

判決ノ執行ヲ停止セハ狡猾ナル裁務者ハ之ヲ奇貨トシテ遂ニ債權ヲシテ其權利ノ實効ヲ得ル能ハサラシムルニ至レハナリ

第四 破産事件

破産ノ商人ニ關スルモノタルヲ知ラハ破産事件ノ猶豫スヘカラサル亦言フ俟タズ若シ之ヲ停止セハ債權者ニ不利ナルノミナラス破産者ニアツテモ其損失少トセス且其決定ノ如何ハ實ニ破産者カ爲シタル行爲ノ有罪無罪ノ別ル、所從テ財團ノ損益ニ關シ重大ノ關係アルカ故ニ之ヲ停止スルヲ得サルモノトス

第五 民事訴訟法ニ依リ略式ヲ以テ取扱フヘキ訴訟

訴訟上畧式ヲ以テ取扱事件トハ我民事訴訟法第三百八十二條以下督促手續ニ於ケル支拂命令ノ如キモノ是ナリ而シテ支拂命令トハ債權者ノ申立ニ依リ裁判所ハ其債務者ニ對シ或ル期間ヲ定メテ一定ノ物ノ給付若クハ辨濟ヲ促ス一ノ命令ニシテ債務者カ其命令ニ從フコトヲ厭フ場合ニハ一定ノ期間内ニ命令ニ對シテ異議ヲ申立ツレハ其事件ハ訴訟ト爲リ(但シ其事件カ區裁判所ノ管轄

事件ナルトキニ限ル直ニ當事者双方ヲ呼出シ辯論ヲ爲サシム其手數ノ簡單ナルノミナラス此等ノ訴訟ハ多クハ細民間ノ關係ナレハ速ニ之ヲ裁判スルノ必要アルヘシ

### 第六章 法律上ノ共助

共助トハ猶補助ト云フニ等シク他ノ取扱フヘキ事務ヲ扶助スルノ謂ヒニシテ之ヲ相互ニ爲スカ故ニ共助トハ云フナリ  
本法カ共助ノ事ヲ規定シタルハ蓋シ其理由トスル所ハ裁判費用及ヒ時日ヲ省略シテ事務ノ抄運ヲ速ナラシムルノ利益アルニ由ル試ニ思ヘ今一事件ニ付キ或ル事項ノ調査ヲ要スルヲ以テ其時々遠隔ナル他ノ裁判所ノ管轄區域内ニ出張スルトセハ之レカ費用ヲ要スル其自ラ管轄スル裁判所ヨリ派出スルノ比ニアラス又其日子ヲ要スルコト多ク從テ裁判ヲ迅速ナラシムルヲ得ス故ニ其裁判所ノ間ニ於テハ其相互ノ便益ノ爲メニ其事務ヲ互ニ扶助スルモノトス而シテ其補助ヲ爲スヘキ裁判所ハ訴訟法又ハ特別法ニ規定アル場合ノ外(判事カ

實地ニ目撃スルノ必要ヲ減シ自ラ出張スルコトアル彼ノ民事訴訟法第三百五十七條以下及ヒ刑事訴訟法第二百二條以下ノ場合ハ取除其法律ニ場合ヲ掲ケサルトキハ所要ノ事務ヲ取扱フヘキ地ノ區裁判所ニ於テ之ヲ爲ス(第三百一十一條)此規定ノ精神タルヤ區裁判所ハ其區域小ナレハ從テ地方裁判所ヨリモ其所要ノ地ニ接近スルカ故ニ其地ノ情況風俗其他土地ノ形勢ニ通曉スルヨリ諸種ノ調査ニ便宜多カル可ケレハナリ

又各裁判所ノ檢事局モ亦各自ノ管轄區域内ニ於テ取扱フヘキ事務ニ付キ互ニ補助ス(第三百三十二條)

又裁判所書記課モ其權内ノ事件又ハ其配下ノ執達吏ノ權内ノ事件ニ付キ互ニ法律上補助ヲ爲スモノトス書記課カ斯ク其權内ノ事件ノ補助ヲ求ムルハ敢テ疑ナシ然レトモ執達吏ノ事務ニ付キ補助ヲ求ムルハ聊カ其職權以外ニ屬スルモノニアラサルカノ嫌ナキ能ハス然レモ書記ハ執達吏ノ職務上其指揮ヲ爲スヘキ地位ニアルカ故ニ(第一百條)其執達吏カ取扱フヘキ事務ニ付キ他ニ補助ヲ囑託スルハ自ラ其職分ノ範圍内ナルノミナラス執達吏ノ職務ノ迅速ニ行ハレンコ



トヲ圖ルハ大ニ權利者ノ爲メニ有益ノ事タリ例ヘハ二以上ノ區裁判所ノ管轄區域内ニ散在スル不動産ニ對スル判決ノ執行ヲ爲スカ如キ場合ニ於テ甲裁判所ノ執達吏ニ委任スレハ執達吏ハ乙裁判所ハ執達吏ノ補助ヲ求メテ其管轄區域内ニ在ルモノニ對シテ執行事務ヲ取扱ハシムルカ如キ最モ便利ナリト云フヘシ殊ニ處々ニ散在スル動産ノ差押ヲ爲ス場合等ニ於テハ債務者ハ之レカ爲メニ早ク己ニ財産ヲ隱匿スルノ不良ヲ圖ルニ違アラスシテ爲メニ債權ヲ害セラレ、コト少ナキノ利益アリ

#### 第四編 司法行政ノ職務及監督權

本編ノ規定ハ司法事務取扱ノ方法及ヒ其職員ノ職務及ヒ監督權ノ所在ヲ定ムルニ在リ抑モ裁判官カ其職務ヲ行フニ當リテハ固ヨリ獨立不羈ニシテ毫モ他ノ掣肘ヲ受クヘキモノニアラスト雖モ其事務ノ取扱及ヒ其身上ニ付キ之ヲ監督スル者ナキカ人情ノ常トシテ柔惰ニ流レ遂ニ其職務正當ニ行ハレス其極布テ司法權ノ神聖ヲ害スルニ至ルヲ以テ其之ヲ監督スルハ司法釋機關ヲ益々鞏

#### 監督權

固ナラシムルモノトス以下本編ノ規定ヲ第一監督權ハ如何ナルモノナルカ第二其監督權ヲ有スル者及ヒ其監督ヲ受クヘキ者ノ二項ニ分チテ説明セントス

##### 第一 監督權

監督トハ其下位ニ在ル者ヲシテ適實ニ其職務ヲ行ハシメ其行爲ニ付過失ナク其職務ノ正當ニ行ハル、ヤ否ヤヲ監視スルヲ云フ此故ニ司法官ヲ監督スルトハ判事若クハ檢事ヲシテ各其掌ル事務ニ勉メシメ而シテ又司法官吏タルノ體面ヲ汚瀆スルコト勿ラシムルニ在リトス

監督ナルモノハ只暗々ノ裡ニ其守ルヘキ途ヲ訓ユルニ止マラス時ニ或ハ進ンテ訓戒ヲ加フルコトナシトセス此故ニ

- (一) 官吏ニシテ其事務ヲ不適當又ハ不充分ニ取扱タルトキハ之ニ注意ヲ促シ並ニ適當ニ其事務ヲ取扱フヘキ事ヲ訓令スル事(第三百三十六條第一號)
- (二) 官吏カ其職務上ト否トニ拘ハラス其地位ニ不相當ナル行狀アルトキハ之ニ諭告スル事(第三百三十六條第二號)但シ此諭告ヲ爲ス前ニ其官吏ニ辨明ヲ得

セシム

(三) 以上二種ノ訓戒方法アリト雖モ若シ裁判所若クハ検事局ノ官吏ニシテ其官吏タルニ適當ノ職務ヲ行ハサル者又ハ其行狀正シカラスシテ其地位ニ不相應ナル者ニシテ以上二種ノ方法ヲ以テ其行爲ヲ改メシムルニ其度ヲ超ヘタルトキハ判事ニ在テハ判事懲戒法其他ノ者ニ在テハ一般官吏懲戒令ニ從ヒ之ヲ訴追スル事第百三十八條明治二十三年法律第六十八號判事懲戒法及ヒ明治九年四月第三十七號達官吏懲戒令參照本項ノ行爲ハ主トシテ前二項ノ訓令若クハ諭告ヲ適用スルコトヲ得サル場合ニシテ例之ハ檢事カ免訴ノ言渡ヲ受ケタル被告人ヲ故ナク拘留シ又ハ判事カ開廷日ニ故ナク欠席シ又ハ負債ノ爲メニ起訴セラレ其局執行ヲ受グルニ至リタルカ如シ要スルニ以上二種ノ訓戒ヲ蒙ルヘキ行爲ニシテ一般ニ知ラレテ一層其重キニ至リシモノナリ

而シテ此監督權ニ依ルノ處分ハ以上三種ノ場合ノミニ限ラス尙判事若クハ檢事ノ事務取扱方法ニ對スル抗告就中或ル事務取扱方ニ對シ又ハ取扱ノ延滯若クハ拒絕ニ對シ處分ヲ求メントスルノ抗告ハ訴訟法上人民ニ之ヲ許サス然レ

トモ訴訟法ニ此抗告ヲ許サ、レハトテ之ヲ其判事若クハ檢事ノ爲スカ儘ニ放任センカ益々人民ハ其不當ノ職務執行ノ爲メニ權利ノ伸暢ヲ妨ケラルヘシ故ヲ以テ是等ノ場合ニ於テハ尙此司法行政上監督權ニ依リテ處分スルモノトス(第百四十條)然レトモ此規定タル其處分ノ趣旨ハ官吏カ司法事務取扱ニ不相當ナル所アルカ爲メニ來ルモノニシテ決シテ一人ニ對スル償贖トシテ之ヲ行フモノニアラサルヲ以テ判事檢事タル官吏ノ資格又ハ其他ノ資格ヲ以テ爲シタル事ニ對シテ起リタル請求ニ付キ其請求ヲ満足セシムルカ爲メニ之ヲ執行スルヲ得ス(第百三十九條)若シ之ニ反シテ一人ノ請求ヲ満足セシムルカ爲メニモ之ヲ執行スルトセンカ其監督處分權ナルモノハ人民ニ左右セラレ遂ニ重大ナル司法機關ヲ不信用ノ地位ニ陥ラシムヘシ此ニ至テ司法權ノ尊嚴ハ終ニ破壊セントス

以上説明セシ監督處分權ナルモノハ判事ノ職務上ト否トニ拘ハラズ其人ノ名譽信用ニ關スルノ重大ナルノミナラス其行爲ノ法律上ノモノタルカ又ハ司法行政上ニ關スル事項ニ付テハ監督權ヲ有スルモノ、眼中不適當ナリトスルモ

實際適當ナル事アルヘシ若シ然ルニモ拘ハラズ唯其不適當ナリト思惟スルノ一事ヲ以テ輕忽ニ之ヲ處分センカ其人ハ時ニ或ハ冤罪ヲ蒙ルコトナシトセス此故ニ司法大臣又ハ監督權ヲ有スル判事若クハ檢事ハ裁判所及檢事局ニ向テ法律上ノ事項若クハ司法行政ニ關スル事項ニ付キ其意見ヲ求メタルトキハ裁判所及ヒ檢事局ハ之ニ對シテ意見ヲ述フルモノトス蓋シ机上ノ考案ト實地ノ狀況トハ動モスレハ反對ノ結果ヲ呈スルコトアルヲ以テ司法權ヲシテ適當ニ行ハシムルニハ法律上ノ事項ニ付キ裁判所及檢事局ノ意見ヲ諮詢スルハ尤モ肝要ナリトス(第四百四十一條)

第二 監督權ヲ有スル者及ヒ其監督ヲ受クル者

司法部内ニ於テ其最上位ヲ占ムル所ノモノハ司法大臣トス而シテ其監督權ヲ上長官ニ委ヌルハ權勢ノ爲メニ枉ケラルハコトナク其地位ノ安危ニ掛念シテ監督ノ公平ヲ欠クノ恐レナケレハナリ故ニ司法行政ノ監督ハ司法大臣之ヲ爲ス(第三百三十五條第一號)然レモ全國數十ノ裁判所及ヒ檢事局ヲ監督センニハ到底一人ノ爲シ得ヘキ所ニアラス故ニ其一部ニ長タルモノヲ機關トシテ其監督

監督權ヲ有スル者  
監督ヲ受クル者

ヲ周到ナラシム(第三百三十四條)而シテ是等ノ者ヲシテ其監督權ヲ施行セシムルニハ左ノ順序ヲ以テス(第三百三十五條第二號乃至第八號)

- 一 大審院長ハ大審院ヲ監督ス
- 二 控訴院長ハ其控訴院及ヒ其管轄區域内ノ下級裁判所ヲ監督ス
- 三 地方裁判所長ハ其裁判所若ハ其支部及ヒ其管轄區域内ノ區裁判所ヲ監督ス
- 四 區裁判所ノ一人ノ判事若クハ監督判事ハ其裁判所々屬ノ書記及執達吏ヲ監督ス
- 五 檢事總長ハ其檢事局及ヒ下級檢事局ヲ監督ス
- 六 檢事長ハ其檢事局及ヒ其局ノ付置セラレタル控訴院管轄區域内ノ檢事局ヲ監督ス
- 七 檢事正ハ其檢事局及其ノ局ノ付置セラレタル地方裁判所管轄區域内ノ檢事局ヲ監督ス
- 八 右ノ外本法第十八條及ヒ第八十四條ニ掲ケタル警察官憲兵將校下士又

ハ林務官等ヲシテ司法警察ノ事務ヲ取扱ハシムル場合ニハ其指揮命令スルモノニ監督セラレ(第三百三十七條)

以上ヲ以テ司法行政ノ職務監督權ノ大略ヲ講述セリ而シテ其監督權ノ行ハルノ範圍及ヒ其性質ハ前ニ説明セシ如ク要ハ只裁判權ヲ行ハシムルニ適當ナル職務ヲ行ハシムルモノニシテ此監督權ハ裁判上職務スル判事ノ裁判權ニ影響ヲ及ホシ又ハ之ヲ制限スルコトナシ蓋シ裁判權ノ執行ハ其判事ノ自由ニシテ何人モ之ニ干渉スルヲ得サルモノナレハナリ(第四百三十三條)

終ニ本編第四百二十二條ノ規定ハ司法官廳ニ對シテ起リタル民事訴訟ニ於テ檢事ハ其司法官廳ヲ代表スルノ制限アリト云フニ在リ是レ先ニ檢事ノ職務ニ付キ既ニ説明セル所ニ係ル又附則第四百四十四條ハ裁判所構成ニ關スル特別法ニシテ必要アルトキハ本法ニ牴觸スルモ尙其効力ヲ有セシムルモノハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定ムル事ノ一ノ除外ヲ規定シタルモノニシテ別ニ説明ヲ要セス

裁判所構成法講義 終

